



セブンスデー・アドベンチストの教え 検 証



金城 重博

セブンスデー・アドベンチストの教え 4

今日の問題点を検証 4

1. 1844年10月22日は福音理解には重要なことではない。それは何ら聖書的根拠がない。証の書がなければ聖書で証明できるものではない。キリストは昇天後すぐ、至聖所に入られたのである。 4
2. 何のために、イエスは天の聖所の第二の部屋—至聖所に入られたのか。その目的は何か? 7
3. 神は悔い改めて信じた者たちをすでに救われたのであって、どうしてまた調査してさばく必要があるのか。「彼を信じる者は、さばかれない。信じない者は、すでにさばかっている。神のひとり子の名を信じることをしないからである。」(ヨハネ 3:18)と書かれているではないか。 9
4. 罪を赦されたキリスト者は調査審判においてまた、特別な清めの経験をするだろうか。それとも罪を赦された者は、調査審判において監査、確認をするだけなのだろうか。 17
5. 罪はいつ罪人から除去されるのか? 罪を告白した時か、さばきの時においてか? 再臨の時か? 21
6. どうしてセブンスデー・アドベンチストは、十字架であがらないは完成したのに「最後のあがない」とか「特別なあがない」とかいう言葉を使うのか。十字架でのあがないは不足であったのか。 23
7. アブラハム、ノア、ダビデ、アサ、ヨブ、ダニエル、ヨハネ、パウロは完全ではなかったか? 創世記 6:98(全き人)、17:1(全き者)、歴代志上 28:9(全き心)、列王上 15:14(全き真実)。「聖書的完全」はそういう意味ではないか? 24
8. 「パウロはキリスト・イエスにあって人として道徳的に完全な身の丈まで達した。彼の魂はどのような過程を通して発達したか? 彼の生涯は絶えざる困難、戦い、労苦の連続であった」(7BC 903)と書いてあるではないか。 25
9. 最後のあがないが 144,000 を完全にするという教えは、神は他の時代の人々からその経験を差し控えていたのか? 26
10. エノクとエリヤは聖所の清めの時が来る前に天に移されたではないか。なぜ我々は最後のあがないの経験が必要なのか? 27
11. さばきは、もうすでに聖化の過程で品性を完成した者を確認、監査するだけだ。 27
さばきの前に完全な品性に到達していなければならないのではないか。 27

12. 日曜休業令と完全な品性の関係。	28
完全な品性は日曜休業令の前に完成されなければならない。日曜休業令は 100 点(完全)になった人がパスする最後のテストだから。日曜休業令が発布されてからなお、不完全であるなら、パスできない。	28
13. 聖所の清めは天の聖所の清めであり、天にある記録の書からの法的な清めである。神の民の特別な清めではない。	30
14. 「罪なき完全な品性はこの地上では不可能なことである。罪が完全に取除かれるのは、再臨の時である。」	31
15. 「キリストを信じる者たちは、神の恵みによって救われるのであって、過去の聖徒たち以上の特別なきよめの経験は必要ではない。」	33
16. 「キリストはアダムの墮落前の性質を取られた。我々の身代わりであって、我々が罪を犯さないで生きられるという模範ではない。」	34
17. 1888年の信仰による義のメッセージに関して「1888年にわが教会で一時反対があったが、教会は受け入れたので今日の繁栄がある。信仰による義認は、他教派も共有するものである。」	35
18. 他教派との関係—エキュメニカル(キリスト教合同運動)へ?	42
19. キリストの仲保の働きは再臨まで続くか?恩恵期間で終わるのか?	44
恵みの期間が閉ざされる時、キリストの仲保なしに、完全な者として立つことができなければ、悩みの時を通り抜けることはできないといった強調は誤りであるか?	44
20. 後の雨/大いなる叫びが今あるところでは起こっている。日曜休業令に備えさせるために降るのか?	47
21. 生ける者のさばきに移る時は誰も知らないはずだ。どうして日曜休業令から始まると言えるのか?	51
22. 144,000 の印される働きは 1844 年から始まったか?	52
23. 証の書に 1844 年以来三天使の使命、安息日を受け入れた者が印されたと書いてある。 ...	55
死んだ義人たちも含まれる。	55
24. 144,000 は 1844 年から印された字義どおりの数であろうか?	59
25. 「カトリック教会は変わったのだ。カトリックのことを悪く言ってはならない。信教の自由も認めたのだ。」	61
26. 最後の時代に神はご自分の民を通してご自分を擁護する必要があるのだろうか?	64
27. 「黙示録 13 章の獣は、ローマ・カトリックにだけ特定できない。時代によって、国によって適用は異なる。」「ヒットラーか、スターリンにも適用できるであろう。」「イスラム	

パワーかもしれない」	70
28. 「SDA 教会は背教してはいない。成長してすばらしく発展している。」.....	70
29. セブンスデー・アドベンチスト教会は背教し、ラオデキヤになったから、出て分離すべき であろうか。「名目的再臨信徒」から分離すべきであるというのはどういうことであろう か?	72
30. エレン・ホワイト、証の書について.....	81
① エレン・ホワイトは単なる天才的宗教家か、あるいは預言者的指導者か、それとも聖書記 者と同じ預言者か。	81
② エレン・ホワイトは、聖典の著者に入っていないから権威はないか?	83
31. 死んで主を迎えることと、生きて主を迎えることとの経験に違いはあるだろうか?	85

セブンスデー・アドベンチストの教え

今日の問題点を検証

詩篇 137:7 主よ、エドムの人々がエルサレムの日に、「これを破壊せよ、これを破壊せよ、その基までも破壊せよ」と言ったことを覚えてください。

セブンスデー・アドベンチスト信仰の基礎は何であろうか？預言者は次のように言っている：

「天の聖所の正しい理解は我々の信仰の土台(基礎)である。」JEv 221

そうであるなら、当然サタンは聖所の教理を破壊しようと試みるに違いない。教理として表明していても、人々が「正しい理解」をしないように、「あらゆる策略」を弄することは間違いない。サタンが「最も憎む大真理」は、聖所に表わされた「贖罪の犠牲と全能の仲保」である。この「正しい理解」に「万事がかかっていること」をサタンは知っている(大争闘下 221)。この基礎から派生したいろいろな教えに歪みが見えてきた。方程式が正しく理解されないと、どんなに実験を繰り返しても成功しない。どんなに伝道活動しても、主の約束は成就されず、人々に主に会う備えをさせることはできない。今、多くの再臨信徒の信仰を揺るがしている基礎的教えを検証してみたい。

1. 1844年10月22日は福音理解には重要なことではない。それは何ら聖書の根拠がない。証の書がなければ聖書で証明できるものではない。キリストは昇天後すぐ、至聖所に入られたのである。

検証:

セブンスデー・アドベンチストは、預言された教会である。サタンが最も攻撃するのは、「女の残りの子ら、すなわち神の戒めを守りイエスのあかしを持っている者」である(黙 2:17)。幾たびも教会の内外から攻撃されてきたのは、1)聖所と 2)証の書であった。つまり、1)1844年10月22日にキリストは天の至聖所に入り、調査審判、特別なあがないを始められたということと、2)エレン・ホワイトの神の靈感を受けたメッセンジャー、預言者としての権威についてであった。

このことが聖書で証明できなければ、セブンスデー・アドベンチストである必要はない。教会の「星」である指導者たちも、信者もこの問題でつまずいて教会から離れてしまった。教会から出る勇気がなくて、疑いと混乱の中に「水槽の中の魚のようにあえいでいる」人も少なくはない。理由は主の僕の次の言葉に見いだせないだろうか：

「しかし、2300日に関連した聖所問題、また神の律法とイエスの信仰などの問題は、過去の再臨運動を説明して、われわれの現在の立場を示し、疑う者の信仰を確立し、輝かしい将来に対する確信を与えるように十分に計画されたものである。わたしはしばしばこれらが、使命者たちが詳しく話すべき重要な問題であることを見た。」初代文集 138

世界総会安息日学校部長のクリフォード・ゴールドスタイン氏が言っているように、「過去の再

臨運動を説明」できない信徒が多い。セブンスデー・アドベンチストの「現在の立場を示し」得る人が少ない。そのために再臨信仰を疑い、離れて行く者もあれば、アドベンチストの焦燥のなかに溺れている者もいる。「輝かしいセブンスデー・アドベンチストの将来に対する確信」を失って、「ちよつがいのように」教会に通っている者も少なくはない。使命者たちは、「詳しく話すべき重要な問題」にめったに触れないのが現状ではないだろうか。

「しかし、群れが今必要としているのは『現代の真理』である。わたしは、使命者たちが、現代の真理の重要点を離れて、群れを一致させ魂を清めるのになんの役にも立たない問題を長々と話す危険を見た。」初代文集 137

一致、一致が叫ばれるこの頃だが、教え、特に現代の真理が群れに与えられたら、一致は結果として生ずるものではなかろうか。

アボンデール、PUC の有名な神学部長であるデズモンド・フォード氏が、この問題に挑戦するまでは、セブンスデー・アドベンチストはこの基礎に関して定着していた。つまり、1844年10月22日にキリストが至聖所に入られたという教えを大前提としてあたりまえに受け入れられていたのである。しかし近年、この大前提に対する疑いがはびこってきたようである。

クリフォード・ゴールドスタイン氏は、証の書を用いずに聖書から1844年10月22日の妥当性、また、エレン・ホワイトの預言者としての権威を証明できなければ、「荷物をまとめて、わたしが初めてイエスを信じたときに住んでいたイスラエルに帰ろう」と思ったのであった。

彼は次のように言っている：

「まず最初に完全に崩壊しなければならなかったのは、エレン・ホワイトであった。もし 1844年が聖書的でなければ、エレン・ホワイトはメアリー・ベーカー・エディーやジョセフ・スミスと同じレベルの人になってしまう。

わたしは、アドベンチストが残りの教会であるという考えに疑問を抱いた。もし 1844年が聖書的でなかったならば、教会もそうでなかったことになる。

わたしは、律法、特に安息日の重要性について疑い始めた。

わたしは、なんと獣の印さえも疑い始めたのだった!

彼は、エレン・ホワイトの著書をいっさい用いずに、数週間聖書研究に没頭した。彼の研究の結果に耳を傾けよう：

「エレン・ホワイトについてのすべての疑念も瞬時に消えた。『あのおばあさんは、自分が語っていることを確かに良く知っている』と、私は思った。その時以来、エレン・ホワイトが預言者であることを疑ったことは一度もない。それどころか、1844年の真理に対する確信によって、わたしは彼女を預言者の中で最も偉大な預言者である、とみなすようになったのである!」 牧羊別冊 2001年秋季号（これで1844年、調査審判が良く分かる）p3,4

アーメン！である。

さらに続けて彼は言う：

「1844年問題を理解したことで、わたしは全く新しい経験を、イエスとの間に、アドベンチズムとの間に、さらには預言の霊との間に、持つに至った。一旦、1844年がいかに聖書

的であるかが分かると、わたしはセブンスデー・アドベンチスト教会がその主張どおりの教会である事がわかったし、律法や安息日やあらゆることに関する疑いが跡形もなくなった。背教、ラオデキヤ的な無気力、スキャンダル、教会内部に起こるさまざまな出来事……にもかわらず、1844年の教えは、セブンスデー・アドベンチスト教会がまぎれもなく聖書の預言どおりの教会であり、われわれのメッセージが現代の真理である事を証明している。1844年審判の教理は、死後の状態や安息日や再臨の教理以上にアドベンチストの正当性を確立している。これらの他の教理は、他教派のある人々によっても受け入れられているものだが、1844年調査審判の真理を持っているのはセブンスデー・アドベンチストだけである。1844年の真理を理解し、それを教えているのはアドベンチストだけであることを自覚しない限りわれわれの召命や使命を完全に理解することはできないであろう。」
同 p4

再臨信仰の基礎、中心的柱、土台は何であろうか？

「聖書の中で、他のどの聖句よりも、再臨信仰の基礎であり、中心的な柱であったものは、『2300の夕と朝の間である。そして聖所は清められてその正しい状態に復する』という宣言であった(ダニエル 8:14)。」 大争闘下 119

デズモンド・フォード氏が挑戦したすべての問題も、ここから派出したものであった。彼は多大な影響を教会員に及ぼした。多くの働き人、信者が影響を受けた。牧師たちは、1844年から始まった天の聖所におけるイエスの特別な清め、最後のあがない、罪の除去などについての説教をしなくなってしまう。

1844年10月22日の正当性は、ゴールドスタイン氏の本に詳細に説明されている。そして他にもセブンスデー・アドベンチストの本は多く出ているので、この問題はここでは詳しく扱わない。

元エレン・ホワイト刊行協会の会長ロバート W. オルソン氏の「聖所とエレン・ホワイトに関する 101 の質問」は非常に素晴らしい(まだ翻訳されていない)。

フォード氏はヘブル 6:19、9:12 を用いて、キリストが 1844年10月22日に至聖所に入られたというのは聖書的ではなく、昇天後すぐ至聖所に入られたのであると挑戦した。確かに新国際訳(NIV)や新共同訳では、「至聖所に」入られたと訳されている(新共同訳では 6:19 だけ)。しかしそれは、改悪されたギリシャ語の定本から翻訳したエキュメニカル聖書なのである。

1844年の聖所の清め、調査審判は聖書的である。預言の研究、ユダヤの祭りの研究から明確に解き明かすことができる。ごく簡単にまとめてみよう:

1. さばきは紀元 31 年に始まったのではなく、使徒たちは、神が未来にさばきの日を定めておられることを説いた (使徒 17:31,24:25 ; ローマ 2:16)。では、いつか？
2. ダニエル 7:9-27 によると、ローマ法王教の 1260 年間の支配の後に、調査審判が行われ、人の子=キリストは日の老いたる者=父なる神のもとに来られる。昇天後すぐ、審判の座につかれたのではない。
3. 黙示録 1 章、4 章、5 章、8 章によると、昇天後主は天の聖所の第一の部屋に入られたのをヨハネは見た。

4. ヘブル書によると天にオリジナルの聖所があり、第一の部屋と第二の部屋がある(ヘブル 9 章、初代文集 412)。大祭司は 1 年に 1 度幕屋の奥(至聖所)に入る(ヘブル 9:7)。地上の聖所も天の聖所の務めもその規定に従ってなされた(ヘブル 9:1、大争闘下 124-125)。地上の聖所も天の聖所も清めの時がある(ヘブル 9:22,23 ; 大争闘下 130)。
5. ダニエル 8:14 によると「聖所の清め」の働きは、エルサレムを建て直せという命令が出た秋から 2300 年後の秋に起こる(ダニエル 9:24-27)。それは 1844 年 10 月 22 日にあたる。
6. また、旧約聖書の型から見ても、1844 年の秋、ユダヤ暦の 7 月 10 日は現代の暦の 10 月 22 日であることが分かった。過越しの祭に神の小羊イエスが十字架につけられた。揺祭の東の实体として、3 日目に主は死からよみがえられた。
7. 「これと同様に、再臨に関連した型も、象徴的奉仕のなかで指示されたその時期に成就しなければならない。」大争闘下 105-106
8. 1844 年 10 月 22 日からあがないの日の実体が始まった。それは聖所の清めと呼ばれ、さばきの時でもあった(レビ 16:19,20,23:29)。黙示録 14:6,7 の「神のさばきの時」が始まった。

預言の 1 日を 1 年と計算することは聖書的ではないのだろうか？ダニエル 9:24-27 のユダヤ人に関する預言、メシアに関する預言は見事に成就した。ウィリアム・ミラーは聖書に教えられているように(民数記 14:34 ; エゼキエル 4:6)、預言の計算で 1 日を 1 年とする方法を適用したら、それは正確に「驚くばかりに成就した」ことを見たのである(大争闘下 15)。70 週はこの 2300 の「幻」から「切り取られた」一部であるから、起算点も同じである。

2. 何のために、イエスは天の聖所の第二の部屋—至聖所に入られたのか。その目的は何か？

検証:

1. キリストの再臨の前に誰が報いを受けるにふさわしいかが調査される (ダニエル 7:9-13,22 ; マタイ 13:47-50,22:1-14)。キリストは再臨の時に報いを携えてこられる。「見よ、わたしはすぐに来る。報いを携えてきて、それぞれのしわざに応じて報いよう。」黙示録 22:12
2. しかし、ただ調査するだけではない。それは信者から完全に罪を取り除くためである。再臨の時に罪が除かれるのではない。「キリストもまた、多くの人の罪を負うために、一度だけご自身をささげられた後、彼を待ち望んでいる人々に、罪を負うためではなしに二度目に現れて、救を与えられるのである。」(ヘブル 9:28)「罪を負うためではなしに」というのは、「罪を処理するためではなく」という意味である。
3. 使徒 3:19 によると、神がキリストをお遣わしになる前に罪の除去がなされなければならない。
「調査審判と罪をぬぐい去る働きは、主の再臨の前に完了しなければならない。死者は、書物に記録されたことによって裁かれるのであるから、彼らが調査されるその審判が終わるまでは、彼らの罪はぬぐい去られることはできない。しかし、使徒ペテロは、はっきりと、信者の罪は、「主のみ前から慰め〔原文では refreshing (活気づけ、回復の意)〕の

時が」くるときにぬぐい去られる。そして、「キリストなるイエスを、神がつかわして下さる」と言っている(使徒行伝 3:19,20 参照)。調査審判が終わると、キリストは来られる。そして、たずさえて来た報いを、それぞれの人の行ないにしたがってお与えになるのである。」大争闘下 218

4. それが「聖所を清める」働きであると言われている。(ダニエル 8:14)
5. レビ記 16:29,30 によると神の民を「もろもろの罪」から清めることであり、あがなうことであると教えている。
6. 預言者エレン・ホワイトは次のように言っている:

「しかし、人々は、まだ主に会う準備ができていなかった。まだ、彼らのためになされねばならぬ準備の働きがあった。彼らは、まず光を受けて、天にある神の宮に心を向けねばならなかった。そして彼らが、そこで奉仕しておられる彼らの大祭司に、信仰によって従っていくときに、新しい義務が示されるのであった。もう一つの警告と教えの使命が、教会に与えられるのであった。

預言者は語っている。『その来る日には、だれが耐え得よう。そのあらわれる時には、だれが立ち得よう。彼は金をふきわける者の火のようであり、布さらしの灰汁のようである。彼は銀をふきわけて清める者のように座して、レビの子孫を清め、金銀のように彼らを清める。そして彼らは義をもって、ささげ物を主にささげる』(マラキ 3:2,3)。天の聖所におけるキリストのとりなしがやむとき地上に住んでいる人々は、聖なる神の前で、仲保者なしに立たなければならない。彼らの着物は汚れがなく、彼らの品性は、血をそそがれて罪から清まっていなければならない。キリストの恵みと、彼ら自身の熱心な努力とによって、彼らは悪との戦いの勝利者とならなければならない。天で調査審判が行なわれ、悔い改めた罪人の罪が聖所から除かれているその間に、地上の神の民の間では、清めの特別な働き、すなわち罪の除去が行なわれなければならない。この働きは、黙示録 14 章の使命の中にさらに明瞭に示されている。

この働きが成し遂げられると、キリストの弟子たちは、主の再臨を迎える準備ができるのである。『その時ユダとエルサレムとのささげ物は、昔の日のように、また先の年のように主に喜ばれる』(マラキ書 3:4)。その時、主が再臨されてご自分のもとに受け入れられる教会は、『しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、清くて傷のない……栄光の姿の教会』である(エペソ 5:27)。また、その教会は、『しののめのように見え、月のように美しく、太陽のように輝き、恐るべき事、旗を立てた軍勢のような者』である(雅歌 6:10)。」大争闘下 140,141

7. マラキ 3:2-4 さばきと清め

「その来る日には、だれが耐え得よう。そのあらわれる時には、だれが立ち得よう。彼は金をふきわける者の火のようであり、布さらしの灰汁のようである。彼は銀をふきわけて清める者のように座して、レビの子孫を清め、金銀のように彼らを清める。そして彼らは義をもって、ささげ物を主にささげる。その時ユダとエルサレムとのささげ物は、昔の日のように、また先の年のように主に喜ばれる。」

「昔のように、先の年のように主に喜ばれる」とは、人類の父祖アダムが罪を犯す前は、彼らの祈り、讃美、礼拝は仲保者を通さないで直接に神にささげられ、喜ばれた。罪が除去されると、罪なき聖徒達の祈りと礼拝と讃美は仲保者なくして神の前にささげられる。仲保者なくして生きるとはそういうことである。しかし、それはイエスをもはや必要としないということではない。

8. イエスが天の至聖所に入られたのは、贖いの最後の働き、特別な贖い、最後の仲保をするためであった。(大争闘下 137 ; 初代文集 410,413,415)

「こうして、預言の言葉の光に従った者たちは、キリストは、2300 日が 1844 年に終了した時に、この地上に来られるのではなくて、再臨に備えて贖いの最後の働きをするために、天の聖所の至聖所に入られたのだということを知った。」大争闘下 137

「1844 年に、天の至聖所にはいり、彼の仲保の働きによって恵みにあずかるすべての者のために最後の贖いをなし、こうして、聖所をお清めになるのであった。」初代文集 413

「イエスは、失望した人々の心を至聖所におけるために、彼の天使たちをお送りになった。彼は、聖所を清め、イスラエルのために特別な贖いをするために、そこに入られたのである。」同 410

「このメッセージを信じるすべての者の心は、至聖所に向けられる。イエスはそこで箱の前に立って、恵みがなお与えられているすべての人々と、知らずして神の戒めを破った人々のために最後の仲保をしておられるのである。」同 415

まとめ:

1844 年 10 月 22 日にイエスが大祭司として天に入られたのは二つの目的がある。

1. 調査審判して、悔い改めと信仰をもってみ前に来る者たちに
2. 神の民の特別な罪の清め、最後の贖いの祝福を与えるためである。

3. 神は悔い改めて信じた者たちをすでに救われたのであって、どうしてまた調査してさばく必要があるのか。「彼を信じる者は、さばかれない。信じない者は、すでにさばかれている。神のひとり子の名を信じることをしないからである。」(ヨハネ 3:18)と書かれているではないか。

検証:

下記の聖句は、一度救われたら永遠に救われるとは教えていない:

- ① サムエル上 10:6,9,28:6,15;エゼキエル 18:24;マタイ 24:13; I コリント 9:27;ヘブル 3:12-14、6:4-6 ; II ペテロ 2:4,21,22
- ② すべての人は神の前で裁かれる:使徒 24:25 ; 伝道 12:14 ; ローマ 2:16 ; 14:10-20 ; ヘブル 10:30
- ③ さばきの標準は神の律法である:伝道 12:13 ; ヤコブ 2:12

「神の律法が審判の時に人々の品性と生活を吟味する基準である。」大争闘下 214

- ④ さばきにおいて「記録が調査され、運命が決定される...受け入れられる名もあれば、拒まれる名もある」(大争闘下 215)。マタイ 13:47-50—網のたとえ ; マタイ 22:1-14—婚姻の衣。

「われわれの行動、言葉、そして極秘の動機でさえも、みな、われわれの運命を禍福いづれかに決定する重要な役割を持っている。たとえわれわれが忘れていても、それらは、義とするかそれとも罪に定めるかの証言を立てるのである。」同 220

「しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。」マタイ 24:13

S 先生著、2001年3期安息日学校聖書研究ガイドプラス 62 ページから引用しよう:

「人は恵みによってのみ救われるのであり、この審判によって、人の運命が決定されるのではありません。」

アーノルド・ヨーレンキャンプを引用し「また彼は、さらにこの再臨前審判は救いを決定するものではなく、救いについて確認するものであると言っています。そして彼は審判という言葉よりむしろ『監査』という言葉を使うべきではないかと提案しています。『再臨前審判』の目的は、私たちの批評者が誤って考えているように、ある人が救われるかどうかを決定することではない。調査審判という言葉は、それによってある人の運命が決定されるということを暗示するために、適切でないかもしれない。これはそうではないのである。それはむしろ監査と言った方が正しいであろう。支払われた請求書の監査は、ただ負債が精算されている事を証明するだけである。監査においてはいかなる決定もなされない。監査はただ確認をするだけのものである...」

「また、『主よ、み国を！』の著者は、再臨前審判を待っている状態を、『空港で飛行機への搭乗を待っている状態』にたとえています(p 191)。すでに座席を予約して搭乗券(信仰による義)を持っている人は安心して待っていることができます。搭乗の時になされる搭乗券のチェック(再臨前審判)は不安を与えるどころか、天国への喜ばしい通過点なのです。(ローマ 8:1,2 引用)」

証の書と上記の思想には違いがある。

まず、この著者と共鳴できる点について述べる。

大いに共鳴できる点とは、さばきは聖徒たちには不安、恐怖を与えるものではないということである。確かに調査審判は、悔い改めと信仰によってキリストとつながっている限り恐怖ではない。さばきは聖徒たちにとって福音であるということを強調することは非常に大事である。ダニエル書によるとさばきは「聖徒達のために」なされるのである(ダニエル 7:22)。第一天使の「神のさばきの時は来た」との警告は「永遠の福音」なのである(黙示録 14:6)。

なぜなら、神は貧しい者、乏しい者をさばかれ、弁護され、救われ、助けられるからである(詩篇 72:2-4,12,13 ; 43:1 ; 35:23,24)。そしてしえたげる者を打ち砕くからである(詩篇 72:4)。さばきにおいて彼らの「悔い改めと信仰」をごらんになって、彼らのために「以前の主権」を回復し、「完全で十分なゆるしと義認」を与えるだけでなく、「御自分の栄光にあずかり」共にみ座につくことを求められるからである(大争闘下 216)。さばきにおいて罪を永遠に取り除き、永遠に栄光の衣を着せ、世俗の腐敗に二度と汚されることがないようにし、誘惑者の計略から永遠に安全な者として生ける神の印を押してくださるからである(国指下 196)。このようなことを聖徒のために神がなさるのであれば、福音ではなくて何であろう。悔い改めと信仰によってキリストとのつながりを維持する者たちは、はばかりことなくさばきのみ座に近づくことができるのである。そこはあわれみの座でもあるからである。その理由をパウロはヘブル 10:19-22 に書いている。それは3つある。①キリストの血、②キリストの完全な人性、③憐れみ深い大祭司のゆえである。

しかし、前述の考えに賛同できない点を挙げてみよう:

1. セブンスデー・アドベンチストの調査審判という教理は、福音派に救いの確証を持たない哀れなクリスチャンというイメージを与えることから、セブンスデー・アドベンチストの大事な使命が希薄にされている。一度キリストを受け入れる告白をし、クリスチャンとなったなら、キリストにある確信はさばきに対する備えを無意味なものにするだろうか。「救われた」と思い込んで、偽りの確信を持って当然み国に入れてもらえる人が、最後に救いからもれるということがあるだろうか。

イエスは言われた:わたしにむかって『主よ、主よ』と言う者が、みな天国にはいるのではなく、ただ、天にいますわが父の御旨を行う者だけが、はいるのである。その日には、多くの者が、わたしにむかって『主よ、主よ、わたしたちはあなたの名によって預言したではありませんか。また、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの力あるわざを行ったではありませんか』と言うであろう。」マタイ 7:21,22

「刈入れの時は過ぎ、夏もはや終わった、しかしわれわれはまだ救われない」(エレミヤ 8:20)ということもあることを覚えていなければならない。「彼らは、『主は生きておられる』と言うけれども、実は、偽って誓うのだ。」(エレミヤ 5:2)。古代イスラエルの民も偽りの安心感、確信で北(バビロン)からの災いを刈り取った(エレミヤ 5:12,13 ; 14:14 ; アモス 9:10 ; ミカ 3:11)。「致命的な安心感」を我々は警戒しなければならない(大争闘下 317)。

2. さばきの厳粛さをクリスチャンから奪い去る思想である。さばきは単なる監査、確認だけなのだ、もう救われているのだから安心せよ、セレブレーション(祝典)だという考えである(1テサロニケ 5:3)。祝典は、さばきが終わり、神の民の罪が除去され、後の雨で満たされ、印された後に起こることである(ゼパニヤ 3:17)。我々は今、あがないの日の実体に住んでいる。さばきの時に住んでいる。まもなく、永遠の運命が決定される生ける者のさばきに移ろうとしている。イスラエルの民はあがないの日にどんな過ごし方をしたであろうか。特別に魂を悩まし、深い心の探索に入ったのである。

「われわれは、今、大いなる贖罪の日に生存している。型としての儀式においては、大祭司がイスラエルのために贖罪をなしている間、すべての者は、主の前に罪を悔い改め、心を低くすることによって、身(魂、欽定訳)を悩まさなければならなかった。もしそうしなければ、彼らは、民の中から絶たれるのであった。それと同様に、自分たちの名がいのちの書にとどめられることを願うものはみな、今、残り少ない恩恵期間のうちに、罪を悲しみ、真に悔い改めて、神の前に身を悩まさなければならない。われわれは、心を深く忠実に探らなければならない。多くの自称キリスト者がいっている軽薄な精神は、捨て去らねばならない (旧大争闘は軽佻浮薄な精神と訳している)。われわれを打ち負かそうとする悪癖に勝利しようとする者は、みな、はげしく戦わなければならない。準備は、一人一人がしなければならない。われわれは、団体として救われるのではない。一人の者の純潔と献身は、これらの資格を欠く他の人の埋め合わせにはならない。すべての国民が神の前で審判を受けるのであるが、しかし神は、あたかもこの地上にその人一人しかいないかのように、厳密に一人一人を審査されるのである。すべての者が調べられねばならない。そして、しみもしもそのたぐいのものがいっさいあってはならないのである。」大争闘下 224

「これは、なんと厳粛な思想であろう。毎日毎日が永遠の中に過ぎ去り、その日のことが天

の書に記録される。一度口に出した言葉、一度行なった行為は、二度と取り返すことができない。天使は、善悪ともに記録しているのである。この世のどんなに偉大な征服者でも、ただ一日の記録さえ取り消すことはできない。われわれの行動、言葉、そして極秘の動機でさえも、みな、われわれの運命を禍福いづれかに決定する重要な役割を持っている。

たとえわれわれが忘れていても、それらは、義とするかそれとも罪に定めるかの、証言を立てるのである。芸術家のよく磨かれた金属板に、人間の顔かたちが正確に反映されるように、人の品性も天の書物に、そのまま描写されている。にもかかわらず人々は、天の存在者たちに見られねばならないその記録について、憂慮することのなんと少ないことであろう。もし、見える世界と見えない世界とをへだてている幕が取り除かれて、人々が、審判において再び直面しなければならないすべての言行を、天使たちが記録しているのを見ることができれば、日ごとに語られるどれだけ多くの言葉が、語られずにすみ、どれだけ多くの行為が、なされずにすむことであろう。」同 219-220

こういう靈感の言葉は、「救われた」という自己過信に人を導かないはずだ。それだからと言って救いの確かさを失わせるものではない。「あなたは救いの確証を持っていますか」と聞かれたら、私は悔い改めたペテロのように、「それは主がご存知です。主はご自分に来る者を決して拒まれないことを知っています。キリスト・イエスは罪人を救うためにこの世に来られました。私は罪人のかしらです」と言いたい。

前述の著者は続けて次のように言っている：

「キリストのもとに来て救われる時に経験するあがないあるいは救済は、病院から退院することに似ている。入院中、患者の体温、血圧、脈拍などをチェックし、それらを1日数回記録する。患者がよくなって退院して家に帰っても、これらの記録は病院の診療記録保管室に残る。よくなった患者にとって、これらの記録は決して気にならない。

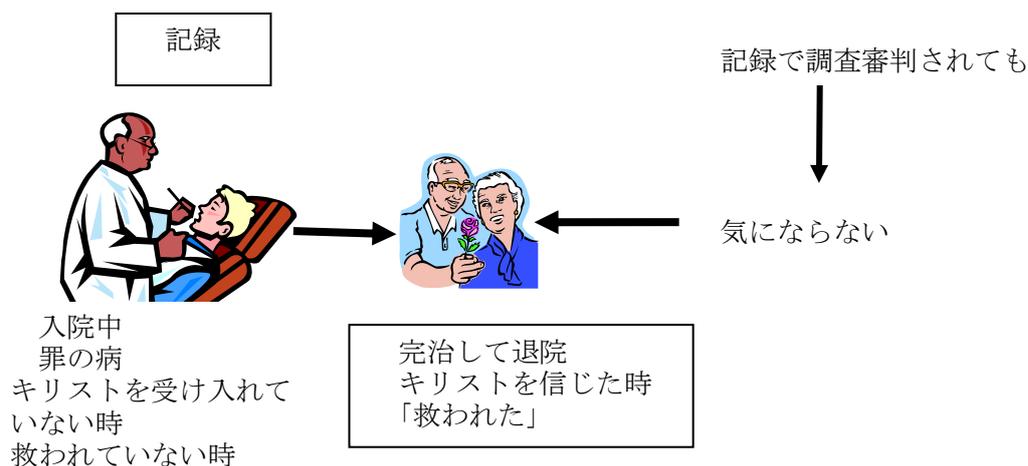
同じように、その生涯をキリストに捧げた人は、彼に関する限り東が西から遠いようにそれらは消し去られ遠ざけられていることを知って、罪の赦しと永遠の生命を喜ぶのである。

....

完治した患者にとっては、病院の記録(カルテ)は何の不安材料にもなりません。しかし不治の病を持っている患者にとっては、病院の記録は死を意味するのです。同じように、救われている者、すなわち罪を赦された者にとっては、再臨前審判は何の恐れを与えるものではありません。しかし、救われていない者、すなわち罪を赦されていない者にとっては再臨前審判は死の宣告となるのです。」

こういうふうにはセブンスデー・アドベンチストが一般クリスチャンに説くなら、何の反対もなく仲間だと受け入れられるであろう。検証してみよう：

1. 「良くなった患者」「完治した患者」にとって病院の記録は何の不安材料にもならない。



2. 罪の記録は残っている。罪は犯したとき記録される。そして告白した時に天の聖所に移される。それは、調査審判まで残る。何時までも残るのではない。

キリストを信じ受け入れた時、もう救われているだろうか。それはキリストにあって、終わりまで耐え忍ぶならばという条件付きである。それは神が約束を守らないからではない。人間の変わりやすい、気まぐれな心の故である。公義なる神は宇宙の前で正式に安心させるさばきをなさって決定されるのである。

3. キリストを信じ受け入れた時、罪の病から完治するのではない。

「たとい人が教会に連なっている、神の印が押されるまでは人は救われていないことを主は教えておられる。」7 BC969(スタディバイブル新 577)

靈感は、最後まで、永遠の運命が決定されるさばきの時まで耐え忍ぶ者は救われると教えているのである。いつ罪の病から完治するのであろうか。

4. 完治して永遠に安全な者とされるのは、裁かれて罪が除去された後である(国指下 196)。キリストが天の至聖所で仲保の働きをしておられる間に、そして大いなる悩みの前に罪が永久に除去され完治するのである(大争闘下 396,7)。
5. 「救われた」と主張することは、聖所、至聖所、日毎のあがない、年毎のあがないに関する無知から来るのである。多くのセブンスデー・アドベンチストは、「特別なあがない」「最後のあがない」「罪の除去」「婚姻」「聖所の清め」の教えを見失いつつある。サタンの策略である。なぜなら、「万事がかかっている大真理」だからである(大争闘下 221)。
6. 我々は、厳粛な調査審判に特別に備えることも、大いなる悩みに特別に備える必要も、生きて主を迎えるための特別な備えと経験も見失っているのではないだろうか。死んで主を迎えることと生きて主を迎えることとの違いが分からなくなっているのではないだろうか。特別な使命、特別な選民であることを誇りとしなくなってしまったのではないだろうか(人あ下 265 ; 国上 115)。

救いの確証を持つことと、救いの不安は矛盾しないのではないだろうか。平安と魂を悩ますこととの緊張が我々の内に共存して主のご再臨であがなわれるまで続くのではないだろうか。

ほんとうのリバイバルが起きる時には、聖なる神の前に恐れおののくのが特徴であった。

「神の言葉が忠実に説かれたところではどこでも、それが神から出たものであることを証明する結果が伴った。神の霊が、神のしもべたちのメッセージに伴い、その言葉には力があつた。罪人は、良心が目ざめるのを感じた。『すべての人を照らすまことの光があつて、世にきた。』その光が、彼らの心の密室を照らし、隠された暗黒のことをあらわした。彼らの心は、深い感動を受けた。彼らは、罪と義と、来たるべきさばきとについて、目を開かれた。彼らは、主の義を認め、自分たちの罪と汚れのまま、心をさぐられるかたの前に出ることを恐れた。彼らは、苦悶の声をあげて、『だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか』と叫んだ。」大争闘下 187

「神の計画は、罪人を喜ばせたり、へつらったりするために使者をお送りになることではない。神は清められていない人々に現世的安心感を抱かせる平和の言葉をお語りにならない。神はそのかわりに、悪を行う者の良心に重荷を負わせ、認罪の鋭い矢で彼の魂をつきさされるのである。奉仕の天使たちは、彼に恐るべき神の刑罰を示し、必要感を深め、『わたしは救われるために、何をすべきでしょうか』という苦悶の叫びをあげさせるのである（使徒行伝 16:30）。しかし、ちに伏させて恥をこうおらせ、罪を譴責し、誇りと野心とをはずかしめる手は、悔い改めて打ちひしがれた者を引き起こす手なのである。懲らしめがくだることを許されるおかたは、深いあわれみをもって、『あなたは、わたしに何をしてもらいたいのか』とおたずねになるのである。」 国指下 54,55；希望上 105

生ける者の調査審判に神の民が臨む時の経験は大争闘下巻 28 章「天における調査審判」に書かれているが、一般教会の「救われた、安心せよ」の考えではない。国と指導者下巻 193-196 はくわしく同じ場面を描写しているので引用しよう。それはもう罪の病が完治したから罪の記録は決して気にしないという考えとはほどとおい：

「ヨシユアとみ使いに関するゼカリヤの幻は、贖罪の大いなる日の、最後の場面における神の民の経験に、特別に当てはまる。その時、残りの教会は大きな試練と苦悩に陥る。神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持っている者に対して、龍とその軍勢は激しい怒りを発する。サタンは世界を自分の家来だと思っている。彼は多くの自称キリスト者たちさえ支配してしまった。しかしここに、小さい群れが彼の主権に抵抗しているのである。もしサタンが、彼らを地上から一掃することができるならば、彼の勝利は完璧となる。サタンは異教諸国を動かしてイスラエルを滅ぼそうとしたように、近い将来、地上の邪悪な国々を扇動して、神の民を滅ぼそうとするのである。人々は神の律法に背いて、人間の布告に服従するように要求されるのである。」

この時の民の魂の苦悩、罪の認識の深さに留意せよ！ 決して決して罪の病から完治して品性の完成を意識していない。否むしろ、罪の意識が絶頂に達するのだ。

「神に忠実に服従する人々は、脅かされ、攻撃され、追放される。彼らは、『両親、兄弟、親族、友人にさえ裏切られ』、殺されるであろう(ルカ 21:16)。神のあわれみだけが、彼らの唯一の希望である。祈りが彼らの唯一の防御である。ヨシユアがみ使いの前で嘆願したように、残りの教会は、心へりくんだり揺るがぬ信仰をいだいて、彼らの助け主イエスによって、赦しと救出を嘆願するのである。彼らは自分たちの生活の罪深さを、十分認めている。彼らは自分たちの弱さと無価値さを知っている。そして、今にも絶望するばかりである。」

「...誘惑者サタンは、ヨシユアのそばに立ったように、彼らのそばに立って告発する。彼は、彼らの汚れた衣、彼らの品性の欠陥を指摘する。彼は、彼らの弱さと愚かさ、忘恩と罪、彼らがキリストと似ておらず、贖い主の栄えを汚したことを示す。彼は、彼らの状態は絶

望的で、彼らの罪のしみは洗い去ることができないと思わせて、恐怖に陥れようとする。彼は彼らの信仰を失わせて、彼の誘惑に屈服させ、神への忠誠から引き離そうと望むのである。」

「サタンは自分が神の民に犯させた罪を、正確に知っている。...

しかしキリストに従った人々は、罪を犯しはしたけれども、全的に降伏してサタンの手下たちに支配されてはいなかったのである。彼らはその罪を悔い改めて、謙遜と悔恨の念をもって主を求めた。そして助け主であられるイエスは、彼らのために嘆願されるのである。彼らの忘恩によって最もひどい取り扱いを受けられたかた、また彼らの罪を知るとともに、その悔い改めをも知っておられるかたが言われる。『サタンよ、主はあなたを責めるのだ。わたしはこの人々のために、わたしの生命を与えた。彼らは、わたしのたなごころに彫り刻まれている。彼らの品性に不完全なところがある。彼らは、努力して失敗したこともある。しかし彼らは悔い改めた。そしてわたしは、彼らを赦し受け入れたのである』。

サタンの攻撃は強烈で、その欺瞞は陰険である。しかし主の目は、神の民を見ている。彼らの苦難ははなはだしく、炉の火は今にも彼らを焼きつくすかのように思われる。しかしイエスは、彼らを火で練られた金のように取り出される。彼らは、世俗的なところが取り去られて、キリストのかたちを完全に表すようになるのである。

時には主はご自分の教会の危機と、敵が教会に与えた被害を忘れたかのように思われることがある。しかし、神はお忘れになったのではない。この世において、教会ほど神にとって大切なものはない。世俗的政策によって教会の記録が腐敗することは、神のみこころではない。神はご自分の民が、サタンの誘惑に打ち負かされるままに放置されない。神は、神を誤り伝える人々を罰せられるが、心から悔い改めるすべての者に対して恵み深いのである。力とキリスト者的品性が啓発されることを、神に叫び求める者に、神はあらゆる必要な助けをお与えになるのである。

終末の時にあって、神の民は地に行われる憎むべきことを、嘆き叫ぶのである。彼らは涙を流して、神の律法をふみにじる危険について悪人たちに警告を発し、言語に絶した悲しみをもって、主の前にへりくだり罪を悔いる。悪人たちは彼らの悲しみをあざけり、彼らの厳粛な訴えを嘲笑する。しかし、神の民の苦悩と屈辱とは、罪の結果失われた品性の力と高貴さを、彼らが回復しつつある間違いのない証拠である。彼らが罪のはなはだしい邪悪さをはっきり認めるのは、彼らがキリストに近づき、彼らの目がその完全な純潔さを凝視するからである。...」

「神の民が神の前で心を悩まし、心が純潔になることを嘆願するときに、『彼の汚れた衣を脱がせなさい』という命令が出される。そして、『見よ、わたしはあなたの罪を取り除いた。あなたに祭服を着せよう』という励ましの言葉が語られる(ゼカリヤ書 3:4)。キリストの義というしみのない衣が、試練と誘惑に耐えた忠実な神の民に着せられる。さげすまれた残りの民は栄光の衣を着せられ、世俗の腐敗に二度と汚されることはないのである。彼らの名は小羊の命の書に書き留められて、各時代の忠実な者の中に加えられるのである。彼らは、欺瞞者の策略に抵抗した。彼らは龍がほえても、忠誠を失わなかった。今や彼らは、誘惑者の計略から、永遠に安全なものとなった。彼らの罪は、罪の創始者の上に移された。『清い帽子』が彼らの頭にかぶせられた。」

なお、神の民は不完全で汚れた衣＝罪の記録のゆえに心の純潔を嘆願するのである。罪の記録、罪深さに圧倒される。これが今日の実体のあがないの日の経験である。

「サタンが告発をしていたときに、目には見えないが、聖天使たちがあちこち行きめぐって、忠実な人々に生ける神の印を押していた。この人々は、その額に父なる神の名を記されて、小羊とともにシオンの山に立つのである。彼らはみ座の前で新しい歌を歌うが、それは地上から贖われた 144,000 人のほかは、だれも学ぶことができない。」国指下 193-196

彼らは大いなる悩みの時もお救いの確かさについて不安で心の探索をするのである。

「サタンが、神の民をその罪のゆえに責めるときに、主はサタンが、彼らを極限まで試みることを許される。神に対する彼らの信頼、彼らの信仰と堅実さが、激しく試みられる。彼らは、過去をふりかえると、望みを失ってしまう。なぜなら、その全生涯の中に、よいところをほとんど見るができないからである。彼らは、自分たちの弱さと無価値とを十分に自覚している。サタンは、彼らの状態は絶望的で、彼らの汚れたしみは洗い去ることができないと思わせて、彼らを恐怖に陥れようとする。サタンは、彼らの信仰をくじいて、彼らを彼の誘惑に負けさせ、神に対する忠誠を放棄させようと望むのである。」大争闘下 391,392

自己過信がペテロを滅びの海に静めてたことを覚えていなければならない。我々は自分のうちに確信を見いだそうとしてはならない。我々の信仰に救いの確信の根拠を置いてはならない。キリストとその功績と、そのみ言葉にだけ救いの確信の根拠を置くべきである。バビロンを真似てはならない。一般諸教会は 1840 年代にキリストが至聖所に移られた時、主についていかなかったその時に自分たちの功績に頼って第一天使の使命を拒んでしまった。それ以来、「救われた、救われた」を合唱するようになっている。そして至聖所における「最後のあがない」「特別な清め」の教理を攻撃してくるのである。

「諸教会が、第一天使の使命を受けることを拒んだときに、彼らは、天からの光を拒否し、神の恵みを失った。彼らは、自分たち自身の力に頼った。」初代文集 391-392

「第二天使が諸教会の墮落を宣言して以来、諸教会は、ますます墮落していったことを、わたしは見た。彼らはキリストの弟子であると称している。しかし、彼らを世俗から区別することはできない。牧師たちは、神の言葉から聖句を引用はするが、人の耳に聞きよいことを説教する。肉の心は、それに対してなんの反対もない。肉の心が憎むものは、真理の霊と力とキリストの救いだけである。一般牧師の説教には、サタンを怒らせ、罪人を震えさせるものはない。また、切迫した恐るべき審判の現実を人々の良心に訴えるものはない。悪人たちは一般に、真の敬神の伴わない信心深い様子を喜び、このような宗教を支持するのである。」初代文集 443

つまり、自分たちの状態に満足してキリストについていかなかったために自分たちの功績に頼ることになり、イエスを見失ってしまったのである。

靈感の書は一般諸教会のことを次のように描写している：

「調査審判の警告、光を拒否して 1844 年以来急速に墮落してしまった。」「我々の運命を決定する現代の真理に対する無関心」「霊的暗黒、神からの離反」(大争闘下 92)。「大いなる暗黒の中にいる」同 321。「カトリック教会は、今日存在しているプロテスタントによく類似している。それはプロテスタントが、宗教改革の時代以後、ひどく墮落してしまったからである。」同 329

「第一の使命を拒んだ者は、第二の使命からも益を受けることができなかった。夜中の叫びによって、人々は、信仰によってイエスとともに天の聖所の至聖所に入る準備をなすべき

であったが、その夜中の叫びも役には立たなかった。初めの二つの使命を拒んだために、理解力の暗くなった彼らは、至聖所に至る道を照らしている第三天使の光を見ることができなかった。名目的諸教会は、ユダヤ人がイエスを十字架につけたように、これらの使命を十字架につけ、そのために彼らは、至聖所へはいる道を知らず、そこにおられるイエスの仲保の恵みを受けることができないことを、わたしは見た。彼らは、無益な犠牲をささげていたユダヤ人のように、イエスが去ってしまわれた部屋に向かつて、彼らの無益な祈りをささげている。』初代文集 423,424

偽のリバイバルとエキュメニカル(教会合同運動)で興奮する時が来ている。諸教会は神が共におられると言って興奮する。これは、後の雨の降る前に起こることを覚えていよう。我々は、巧妙なサタンの策略に目覚めなければならない。

「そして、この欺瞞に満足したサタンは、宗教的性格を装って、彼の力としるしと奇跡を行い、これらの自称クリスチャンたちの心を、彼自身に引きつけ、しっかりと彼のわなに捕らえてしまうのである。彼は、ある者はある方法で欺き、他の者はまた別の方法で欺く。彼は、さまざまな性質の人々を陥れるために、さまざまな欺瞞を用意している。ある人々は、ある欺瞞は嫌悪しながらも、他の欺瞞はやすやすと受け入れる。サタンはある人々を心霊術で欺く。彼はまた、光の天使を装って現れ、偽りの改革によって、彼の勢力を地上に拡大する。教会は、意気盛んになって、神が彼らのために驚くべき働きをしておられると考えるのであるが、それは、別の霊の働きなのである。興奮はさめて、世界も教会も、以前よりはさらに悪化した状態に陥るのである。

わたしは、神が、名目的再臨信徒たちと、墮落した教会の中に、心の正しい人々を持っておられるのを見た。そして、牧師や信者たちが、災害が、くだされる前に、これらの教会から呼び出されて、喜んで真理を受け入れることをわたしは見た。サタンは、この事を知っている。第三天使の大いなる叫びがあがる前に、サタンは、これらの宗教団体に、興奮を起こさせ、真理を拒んだ人々に、神が彼らと共におられると思わせるのである。サタンは、心の正しい人々を欺いて、神がなお教会のために働いておられると彼らに思わせたいと願っている。しかし、光が輝き出る。そして、心の正しい人はみな、墮落した諸教会を去り、残りの民に加わるのである。」同 424

7. アドベンチストの調査審判における罪の「記録の除去」は天の記録からの除去であって、神の民の経験と何の関わりもないというのがあの著者の考えである。これは致命的な誤りである。このことは、別に取り扱うことにする。

**4. 罪を赦されたキリスト者は調査審判においてまた、特別な清めの経験を
するだろうか。それとも罪を赦された者は、調査審判において監査、確認を
するだけなのだろうか。**

検証:

我々は、調査審判だけを説いて、「罪の除去」のすばらしさを説き忘れてしまったのではないだろうか。「罪の除去」を単なる天の記録の書からの除去、法的な行為としか捉えていなかった為に、我々に何のインパクトも与えていないというのが現状であろう。

調査審判と信者の経験について三つの考えがある。

見解1. 罪から完全に清められていなくても、キリストとの関係を持っている限り、再臨の時に完全に罪がなくなるのだから、何も心配はない。さばきはキリストとの関係を確認し監査するだけである。これはセブンスデー・アドベンチストの根本教理、三天使の使命からはずれる自由主義の考えである。それは聖書の教えでもない。

見解2. 調査審判の前に完全な品性になって神の印を受けていなければならない、さばきは完全に変わった者を確認し監査するだけである。これは、保守派の考えである。

見解3. たとい神の民は、すべての罪を告白して赦されていても、聖化の道に忠実に歩んでいても、なお自分たちの無価値さと罪深さと欠点を深く意識する。彼らは、絶望的な魂の苦悩のうちにさばきの座に出る。このさばきの時に、彼らはなお心の純潔を懇願する。唯一の希望はイエスの憐れみだけである。さばきは完全を監査、確認するのではない。さばきにおいて罪が永久に除去され、最後のあがないを経験するのである。

どれが正しい見解であろうか？

見解1と見解2は、調査審判は単なる監査、確認だけとする点では同じである。見解1は完全に間違いだが、我が教会にかなり広がっている考えである。見解2も熱心で誠実な人々が持つ考えである。靈感の言葉で検証してみよう：

「すべてその日に魂を悩まさない者は、民のうちから断たれるであろう。」レビ 23:29(欽定訳)

「シオンでラツパを吹きならせ。断食を聖別し、聖会を召集し、民を集め、会衆を聖別し、...主に仕える祭司たちは、廊と祭壇との間で泣いて言え、『主よ、あなたの民をゆるし、あなたの嗣業をもろもろの国民のうち、そしりと笑い草にさせないでください。どうしてももろもろの国民に、『彼らの神はどこにいるのか』と言わせてよいでしょうか。』」ヨエル 2:15-17

「人々は、地上の法廷の判決に深い関心を示すのであるが、しかしそれも、いのちの書にその名を記された人々が、全地の審判者の前で調査される時の天の法廷における関心とは、とうてい比較にならない。...

イエスが、彼の恵みに浴する人々のために嘆願される一方において、サタンは、彼らを罪人として神の前に告訴する。大欺瞞者サタンは、彼らに疑惑を抱かせ、神に対する信頼を失わせ、神の愛から彼らを引き離し、神の律法を犯させようとしてきた。そして今度は、サタンは、彼らの生涯の記録を指摘し、品性の欠陥、贖い主のみ栄えを汚したところの、キリストに似ていない点、そして、彼が誘惑して彼らに犯させたすべての罪を指摘して、これらのことのゆえに彼らは自分の臣下であると主張するのである。

イエスは、彼らの罪の弁解はなさないが、彼らの悔い改めと信仰を示して、彼らの許しを主張なさり、天父と天使たちの前で、ご自分の傷ついた両手をあげ、わたしは彼らの名を知っている、わたしは彼らを、わたしのなごころに彫り刻んだ、と言われるのである。

『神の受けられるいけにえは砕けた魂です。神よ、あなたは砕けた悔いた心をかるしめられませんか』(詩篇 51:17)。そして、ご自分の民を訴える者にむかって、『サタンよ主はあなたを責めるのだ。すなわちエルサレムを選んだ主はあなたを責めるのだ。これは火の中か

ら取り出した燃えさしではないか』と宣言される(ゼカリヤ 3:2)。キリストは、忠実な人々に、ご自分の義の衣を着せて、父なる神の前に『しみも、しわも、そのたぐいのものがないっさいなく、清くて傷のない栄光の姿の教会』として立たせてくださる(エペソ 5:27)。彼らの名は、いのちの書に書きとめられる。....」大争闘下 216

国指下 193-196 に似たような記事がある。主の僕、はさばきの時の神の民の経験をもっと生々しく描写している:

「神のあわれみだけが、彼らの唯一の希望である。祈りが彼らの唯一の防御である。ヨシユアがみ使いの前で嘆願したように、残りの教会は、心へりくんだり揺るがぬ信仰をいだいて、彼らの助け主イエスによって、赦しと救出を嘆願するのである。彼らは自分たちの生活の罪深さを、十分認めている。彼らは自分たちの弱さと無価値さを知っている。そして、今にも絶望するばかりである。

...誘惑者サタンは、ヨシユアのそばに立ったように、彼らのそばに立って告発する。彼は、彼らの汚れた衣、彼らの品性の欠陥を指摘する。...

神の民が神の前で心を悩まし、心が純潔になることを嘆願するときに、『彼の汚れた衣を脱がせなさい』という命令が出される。そして、『見よ、わたしはあなたの罪を取り除いた。あなたに祭服を着せよう』という励ましの言葉が語られる(ゼカリヤ書 3:4)。キリストの義というしみのない衣が、試練と誘惑に耐えた忠実な神の民に着せられる。さげすまれた残りの民は栄光の衣を着せられ、世俗の腐敗に二度と汚されることはないのである。彼らの名は小羊の命の書に書き留められて、各時代の忠実な者の中に加えられるのである。彼らは、欺瞞者の策略に抵抗した。彼らは龍がほえても、忠誠を失わなかった。今や彼らは、誘惑者の計略から、永遠に安全なものとなった。彼らの罪は、罪の創始者の上に移された。「清い帽子」が彼らの頭にかぶせられた。」 国指下 193-196

さばきにおいてなお、神の民は不完全で汚れた衣(罪の記録)のゆえに心の純潔を嘆願するのである。罪の記録、自分の罪深さに圧倒される。これが実体のあがないで日である今日の経験である。

初代文集 437-440 にも同じく魂を悩ます光景が描写されている:

「わたしは、深い信仰と苦悶の叫びをあげて、神に嘆願している人々を見た。彼らの顔は青ざめ、深い憂いの色を帯びていて、彼らの内的苦悶を表していた。その表情には、堅忍不拔の精神と非常な熱心さとがあらわれていた。彼らの額からは、大きな汗のしずくが落ちた。彼らの顔には、時々、神の嘉納のしるしが輝くのであったが、また、元の同じ厳粛で熱心と憂慮に満ちた表情にもどるのであった。」

調査審判についての重要な観察:

- ▲神の民はすべての罪を捨ててはいるが、調査審判において完全になった者として立ってはいない。
- ▲神の民はさばきにおいて自分たちの欠点を十分に意識している。
- ▲そのために彼らは魂を悩まし彼らの罪深さと無価値さを告白している。
- ▲ただ悔いた砕けた心だけがさばきの前に出る資格を与える。
- ▲イエスが御自分の民のために立たれるとき、イエスは彼らの完全をごらんにならない。彼らの悔い改めと信仰を示して、神の前で彼らのために仲保なさる。御自分の流した血とご自分の

完全を提示される。

▲彼らのために特別な清めをなし、永遠の義の衣をもって彼らを覆い印される。これが**最後のあがない**、あるいは**特別なあがない**と呼ばれる至聖所の清めなのである。レビ 16:30 ; マラキ 3:1-3 ; 初代文集 410,413,415 ; 大争闘下 136-137,211

見解1のバビロンの考え、見解2のセブンスデー・アドベンチストの保守的な考えが間違っていることが明白だろう。

調査審判と最後のあがない

1. 調査審判の日には特別な清めが用意されている。型である聖所の奉仕によると、日毎の奉仕では特別なあがないは得られなかった。どんなに忠実に日毎の奉仕の祝福にあずかっている、年毎の奉仕の特別な清めを必要としたのである。「この日(贖いの日)にあなたがたのため、あなたがたを清めるために、あがないがなされ、あなたがたは主の前に、もろもろの罪が清められるからである。」レビ 16:30

そのように実体においても、キリストは 1844 年に(ダニエル 8:14) 神の民のために特別な清めを提供するために天の至聖所に入られた。「彼は銀をふきわけて清める者のように座して、レビの子孫(神の民)を清め、金銀のように彼らを清める。そして彼らは義をもって、ささげ物を主にささげる。」マラキ 3:3 (大争闘下 140,141)

2. この**特別な清め**は日毎の**罪責**からの清めではない。この**最後のあがない**にあずかる者はすべての罪をさばきに前もって送っていなければならない。その清めというのは、**罪の記録からの清め**なのである。

① **天の聖所において:**「天の書物の中に我々の生涯は写真家の感光板上の写真のように、正確に写されている。」7 BC987(スタディバイブル新 598)「神はすべての人の**品性の完全な写真**をおもちである。」5 BC1085(スタディバイブル新 47)

最後にそれを消し去ることによって聖所のためにあがないをなさるのである。レビ 16:33 ; ヘブル 9:23 ; 大争闘下 220,214-217

② **魂の聖所において:**罪のほんとうの記録は魂の宮にあるのである (TM447,希望中 8) 天の記録の書は罪が品性にもたらしたほんとうの記録の写真にしかすぎない。だからサタンは、さばきの時に「彼らの生涯の記録、品性の欠陥を指摘する」のである。さばきの時、神の民は「自分たちの罪深さを十分に意識し、....自分自身を見ると今にも絶望するかのようである。....サタンは彼らの汚れた衣、品性の欠点を指して絶望」させようとする。しかしキリストは「彼らの汚れた衣(罪の記録)を脱がせなさい」と言われ、ご自分の純潔な品性を永遠にご自分の民に着せられるのである。彼らは永遠に印されるのである。

このように罪の除去は、単に天の書物から罪の記録を清めるだけのものではないのである。罪は我々の心から清められるのである。これを「特別なあがない」と言う(初代文集 410)。

「真に悔い改めた者の罪が、**最後のあがない**において、天の記録から消されて、もはや思い出すことも心に浮かぶこともなくなる.....。」人あ上 422,423

「わたしこそ、わたし自身のために、あなたがたのとがを消す者である。わたしは、あなたの罪を心にとめない。」イザヤ 43:25

「主は言われる、その日その時には、イスラエルのとがを探しても見当らず、ユダの罪を探してもない。それは、わたしが残しておく人々を、ゆるすからである。」エレミヤ 50:20

「彼らの罪は、前もってさばかれて、消し去られている。彼らは罪を思い出すことができない。」大争闘下 393

3. 最後のあがないにおいて提供される清めは、永久的なものである。至聖所のあがないに入る者は「決して外へ出ることはない。」(黙示録 3:8,12)「さげすまれた残りの民は世俗の腐敗に二度と汚されない輝かしい衣を着せられる。」国指下 196

この経験を聖書では婚姻と言っている。キリストは今この経験にご自分の民を招いておいでになる。「すべての用意ができました。さあ、婚姻においでなさい。」マタイ 22:4

4. この**最後のあがない**の働きは、調査審判の働きをも含んでいる。「だれが悔い改めとキリストに対する信仰によってご自分のあがないの恵みを受ける資格があるかを決定するために、記録の調査がなされねばならない(大争闘下 136)。**婚姻**に先立って**調査審判**が行われる(同 145)。調査審判は、監査、確認だけではない。その後にはすばらしい祝福を与えるためである。

さばきにおける祝福とは:

- 罪とサタンからの永久的な救い、解放
- イエスとの永久的な結合=婚姻

このことが信者の内に実現されるのは、主のみ前からくる慰め—後の雨の満たしによるのである(TM506)。

これが**セブンスデー・アドベンチストの至聖所の最後のあがないのすばらしい教理**なのである！これこそ他教派の知らない「女の残りの子ら」に与えられた遺産である。これこそサタンが最も憎む大真理である(大争闘下 221)。教会外からだけでなく、教会内からこのすばらしい真理を崩そうと試みられてきた真理である。このことが理解されないために、後の雨／大いなる叫びという祝福は遠のいて、今日多くの人々がアドベンチストの焦燥の中であえいでいるのではないだろうか。

5. 罪はいつ罪人から除去されるのか？罪を告白した時か、さばきの時にいてか？再臨の時か？

検証:

再臨の時に完全に罪が取り除かれると思っている人は少なくはない。こんな思想は元々セブンス

デー・アドベンチストにはなかった。

神学者の K 先生はこう言っている。牧羊 1993 春号:

「(仲保者なしの悩みの時について)クリスチャンは、本質的な罪も、行為としての罪も愛してはいない。しかし、完全に罪がなくなった状態ではない。悩みの時に試練の火を通して清められ、再臨のときに罪なき完全な状態にされるのである。」

悩みの時に罪があったらどうなるだろう？再臨の時に罪が完全になくなると聖書と証の書は教えているのだろうか？

同じ著者の K 先生はこうも言っている。アドベンチスト・ライフ特集 1995 11月号:

「私たちがキリストのもとに行くとき、罪は直ちにゆるされ、罪の記録がクリアされます。」

「私たちはこの世で神のように罪なき姿になることは決してありません。人類は罪深く、心は敗れています。私たちはいつでも救い主キリストが必要で再臨のとき、心も体も回復されるのです。」

M 先生のプリント「罪と完全について」 p 24:

「この神様への姿勢が要求されているのであり、完全な罪のない状態を要求されているのはありません。」

A 先生は牧羊(何年何月号か不明)に次のように書いておられる:

「我々は罪深い性質がある故に、罪のない完全な品性はこの地上では持つことができない。
.....

我々の性質に罪の結果が残っている限り、我々は罪なしとは言われぬ。それ故に、再臨の時までキリストのように罪のない完全には達しない。....」

靈感の書は何と言っているか？

「キリストがおいでになるとき、我々の品性は変えられない。これらの汚れた肉体は変えられ、キリストの輝かしいお体のように形づくられるであろう。しかし、その時、我々の内に道徳的变化は起こらない。」 RH8/7/1888

「キリストもまた、多くの人の罪を負うために、一度だけご自身をささげられた後、彼を待ち望んでいる人々に、罪を負うためではなくに二度目に現れて、救を与えられるのである。」ヘブル 9:28 ※「罪を処理するためではなく」ヘブル 9:28 (原語)

「品性の変化は、キリストの再臨前に起こらねばならない。我々の性質は、純潔で聖くなっていなければならない。」 OHC278

「イエスをながめることによって、いっそう明らかに神を見ることができるようになり、わたしたちは、ながめることによって変えられる。同胞に善を行ない、彼らを愛することは、わたしたちにとっては自然に行なう本能となる。そして、神の品性と全く同じ品性 counterpart 写しを自分たちの中に形成する。」実物教訓 331

罪が除去されるのは、

- ① 罪を告白した時ではない。罪が告白されたら、天の聖所に移されるのである。罪責はないが、記録は心の聖所にも残っている。さばきの時まで。

- ② 再臨の時でもない。
- ③ 正しいのは調査審判の時である。

6. どうしてセブンスデー・アドベンチストは、十字架であがないは完成したのに「最後のあがない」とか「特別なあがない」とかという言葉を使うのか。十字架でのあがないは不足であったのか。

検証:

十字架で成し遂げられたイエスの犠牲のあがないが不完全ということはありません。イエスのあがないの犠牲は完全であった。しかし、セブンスデー・アドベンチストにのみ与えられたユニークなあがないの教理を忘れてはならない。

古代の幕屋の奉仕は日毎の奉仕と年毎の奉仕に分かれていた。

「これらのものが、以上のように整えられた上で、祭司たちは常に幕屋の前の場所にはいつて礼拝をするのであるが、幕屋の奥には大祭司が年に一度だけはいるのであり、しかも自分自身と民とのあやまちのためにささげる血をたずさえないで行くことはない。」ヘブル 9:6,7

日毎の奉仕においては、外庭で流された血が第一の部屋である聖所に注がれた。年に一度第二の部屋、至聖所に注がれた。この血の聖所における適用が「型としての日毎のあがないと年毎のあがない」と呼ばれた(1 SM344)。流された血だけでは誰も救われない。その血は幕屋に注がれなければならなかった。

「あがない」という言葉が外庭の流された血に適用されるが、しばしばそれは幕屋そのものの中における実際の血の奉仕を描写して用いられた(レビ 10:17,18; 16:27)。アドベンチストにとって、天の聖所のことを言っているとの理解は当然であった。その事は、十字架上で完全な犠牲を否定することではない。確かに、まず神が、御子を通してなされた神と人との間の和解は完全なものであったという点で「あがないの完成」(教理への質問英文 p 664)ということとは妥当かもしれない。

しかしながら、問題は贖いのもう一つの局面—キリストの生涯と死を信者に適用することについてである。

地上の聖所において血の適用が二つあったように、天の聖所においてイエスの血が適用される場合、明確な二つの適用がある。第一の部屋で血を注ぐことによって、罪の赦しを表わし(レビ 4章)、第二の部屋に血を注ぐことは、最終的に罪の除去のためになされることであった(使徒 3:19; 人あ上 421,422)。

「一年間にわたってささげられた罪祭によって、罪人に代わるものが受け入れられてきた。だが、いけにえの血が罪に対する完全な贖いを果たしたのではなかった。それは、ただ、罪が聖所に移される手段を提供したにすぎない。罪人は血をささげることによって、律法の權威を認め、律法に違反した罪を告白し、世の罪を除くおかたへの信仰を表明した。だが、彼は律法の宣告から完全に解放されたのではなかった。贖罪の日に、大祭司は会衆のための供え物を取り、血をたずさえて至聖所にはいり、それを律法の板の上の贖罪所に注いだ。こうして、罪人の生命を求める律法の要求が満たされた。」人あ上 420

「キリストの血は、悔い改めた罪人を律法の宣告から解放したが、しかし、それは罪を消し

去るものではなかった。罪は最終的な贖罪の時まで聖所の記録に残るのである。そのように象徴においても、罪祭の血は悔い改めた者から罪を取り除いたが、罪は贖罪の日まで聖所に残った。」 同 422

アドベンチストにはダニエル 8:14 に関する特別な光が与えられ至聖所におけるキリストの最後の執り成しという局面に関する理解が与えられた。預言の霊では、「最後の贖い」「特別な贖い」と呼ばれている。

真のアドベンチストの立場は、罪からの解放はあがないの日までは完全に永久になされるものではないということを知っている。ゆるしの恵みに反して歩いた場合、その罪は、彼が悔い改めたことはなかったものとして本人にまた戻ってくるのである。(マタイ 18:23-35 ; 実物教訓 227)

一般教会は、この神の罪の処置の仕方を知らないために、「救われた」「あがないは十字架で終わった」「さばきは何も気にすることはない」と叫ぶのである。

「地上の聖所の清めのために、祭司が、一年に一度至聖所にはいったように、イエスは、ダニエル書 8 章の 2300 日の終わり、すなわち、1844 年に、天の至聖所にはいり、彼の仲保の働きによって恵みにあずかるすべての者のために最後の贖いをなし、こうして、聖所をお清めになるのであった。初代文集 413

「イエスは、失望した人々の心を至聖所におけるために、彼の天使たちをお送りになった。彼は、聖所を清め、イスラエルのために特別な贖いをするために、そこに入られたのである。」 同 410

我が教会の聖所の権威者であった、M.L. アンデレアセンは、主の僕が「最後の」あるいは「特別な」あがないという表現を 20 回以上も用いていることを発見した(Letters to the Churches, p58)。この他にエレン・ホワイトはあちらこちらで最後の働きのことを言っている。

多くのアドベンチストは、信者のためのあがないは十字架で完成したのであって、至聖所のあがないがどうしても必要なのかを理解していないようである。大争闘下 221 の「我々が最もよく知っていなければならない働きそのものについて、我々に考えさせまいとしている。...人々の心をそらそうとしている」という預言の成就だろうか。

「天の聖所における、人類のためのキリストのとりなしは、キリストの十字架上の死と同様に、救いの計画にとって欠くことのできないものである。キリストは、ご自分の死によって開始された働きを、復活後、天において完成するために昇天されたのである。」大争闘下 222

7. アブラハム、ノア、ダビデ、アサ、ヨブ、ダニエル、ヨハネ、パウロは完全ではなかったか？創世記 6:98(全き人)、17:1(全き者)、歴代志上 28:9(全き心)、列王上 15:14(全き真実)。「聖書的完全」はそういう意味ではないか？

検証:

我が教会の聖所研究の大家、M. L. アンデレアセンは言う:

「聖書は『全き（完全）』という言葉を用いて二つの意味で使っている――完全の段階だが未完成という意味と完成した完全の意味。ピリピ 3:12 に『わたしがすでにそれを得たとか、すでに完全な者になったか言うのではなく、ただ捕えようとして追い求めているのである。そうするのは、キリスト・イエスによって捕えられているからである』と語り、15 節に『だから、わたしたちの中で全き人たちは、そのように考えるべきである』と言っている。..パウロは絶対的な完全を主張しなかった。...相対的な完全を主張しているのである。...しかし、そのような人間の領域で（絶対的な完全）段階に到達する人がいるのであろうか。我々はそう信じる。黙示録 14:4,5 の描写を読んできたい。...これは、完全に到達しようとする者を失望させるために書かれたのではなく、完全に到達したと主張する者を思いとどまらせるために書かれたのである。』へブル書の研究 466-468

ここでいう「絶対的完全」というのは、クリスチャン生活の一步一步において完全の段階を「相対的完全」とした場合（キリストの実物教訓 43）、最後のあがないで到達する完全、品性上のことを言っているのである。もし、神の領域のことを「絶対的完全」と言うなら、人間の領域での完全を「相対的完全」と呼ぶであろう。パウロが使っている意味で使おう。各時代の聖徒たちは「全き」人であったという場合、罪なき完全な品性を言っているではなかった。正しい、誠実、堅実、道徳的に立派であるという意味である。聖書は彼らは罪なき状態の人々という意味で言っているのではない。「善を行い、罪を犯さない正しい人は世にいない」（伝道の書 7:20）。「だれが『わたしは自分の心を清めた、わたしの罪は清められた』ということができようか」（箴言 20:9）。人は罪を犯さない者はないのです」（列王紀上 8:46）。「わたしたちは皆、多くのあやまちを犯すものである（ヤコブ 3:2）。

「使徒や預言者たちの中には、だれも罪がないと主張したものはいない。神に最も近く生きた人々、知っていて悪い行ないをするよりは命を犠牲にしようとする人々、神が聖なる光と権能をもって賞賛した人々は、自分たちの性質の罪深さを告白してきた。」患難下 264

「ヨハネは真の聖化を楽しんだ。しかし、注意していただきたい。使徒は罪がないと主張しなかった。神のみ顔の光を歩むことによって完全をもとめていたのである。」SL48

8. 「パウロはキリスト・イエスにあって人として道徳的に完全な身の丈まで達した。彼の魂はどのような過程を通して発達したか？彼の生涯は絶えざる困難、戦い、労苦の連続であった」（7BC 903）と書いてあるではないか。

検証:

著者は決してパウロは罪がなかったことを言っているのではないことが次の文から分かる。「パウロは悪の傾向が勝利することのないようにいつも見張っていた。彼は食欲、欲情、悪の傾向をよく見張った。」6BC1089

パウロ自身次のように言っている:

「わたしがすでにそれを得たとか、すでに完全な者になっているとか言うのではなく、ただ捕えようとして追い求めているのである。そうするのは、キリスト・イエスによって捕えられているからである。...だから、わたしたちの中で全き人たちは、そのように考えるべきである。しかし、あなたがたが違った考えを持っているなら、神はそのことも示して下さるであろう。」ピリピ 3:12,15

この聖句で、パウロは最初に「完全」を否定し、次に「全き」を是認している。「完全な人」というのは、ヘブル 5:14にあるような成熟した「成人」という意味である。クリスチャン経験の各段階で完全とみなされる、相対的な完全の状態である。この状態は我々がさばきの前に持たなければならない「完全」である。

「わたしは夢の中で一人の見張りが重要な建物の入り口に立っているのを見た。その人は入ってくる一人一人に「あなたは聖霊を受けたか？」と聞いた。測り縄が彼の手にあって、建物にはいるのを許されたのはごくわずかであった。彼は言った:あなたの人間としてのサイズは取るに足らない。しかし、あなたが持っている知識に従って、イエスキリストにあって十分な身の丈に達しているなら、あなたは小羊の婚宴でキリストと共に座する約束をいただける。」 1SM109-110

「イエス・キリストにあって十分な身の丈」というのは罪のない完全を言うのではない。次の文を見ていただきたい。「人は生きた頭であられるキリストに向かって成長する。それは一瞬の働きでなく、一生の働きである。神の生命に日毎に成長するが、その人の恩恵期間が閉じるまでは、キリストにあって完全なみ像に到達しないのである。」 4T 367

「ヨハネは真の聖化の祝福を楽しんだ。…しかし、注意していただきたいことは、彼は罪のないことを主張していないし、完全を求めているのである」JSL65

9. 最後のあがないが 144,000 を完全にするという教えは、神は他の時代の人々からその経験を差し控えていたのか？

検証:

まず第一に、聖書は 144,000 を初穂と呼んでいる。つまりはじめて完熟することを強調している(黙示録 14:4)。彼らは他のどのグループも経験したことの無い経験をする。聖所に仲保者なくして生き、死を見ないで天に移されるのである。かれらは神のみ国で特別な誉れにあずかるのである(黙示録 14:3 ; 1SM66)。

第二番目は、神が「後の者が先になる」と決められることについて神の知恵と正義を疑うとは一体我々は何ものなのだろうかということである。「ああ人よ。あなたは、神に言い逆らうとは、いったい、何者なのか造られたものが造った者に向かって、「なぜ、わたしをこのように造ったのか」と言うことがあろうか」(ローマ 9:20)。神は仰せにならなかつたか? 「待っていて 1335 日に至る者はさいわいです」(ダニエル 12:12) と。(それは聖所の清めの時までのことを意味する)。

第三番目は、特定の世代の者だけが生きている間に最後のあがないを受けると、神が独断的に定められたのではないということである。エノクとエリヤは死なないで天に移されたではないか? 歴史の中で、「神の約束の時」が近づいたが、神の民は応答に失敗したのである。聖所の清めが始まる時がこんなに長引くように神が予定されていたのではなく、神の民は 2300 年経るまでは、準備ができないことを予見なされたのである。

10. エノクとエリヤは聖所の清めの時が来る前に天に移されたではないか。なぜ我々は最後のあがないの経験が必要なのか？

検証:

規則には例外がつきものである。モーセが天にいるからすべての死んだ聖徒たちは天にいるという理屈は通るだろうか。エノク、エリヤは死を見ずして生きたまま主を迎える人の型であり、モーセは死んでから復活して主を迎える人の型であった。

「モーセは、キリストの再臨の時に死から甦えらされる人々を代表してそこに立ち会った。死を経験しないで天に移されたエリヤは、キリストの再臨のときに不死のからだに変わって、死を経験しないで天へ移される人々を代表していた。」初代文集 283

エノクもそうであった(8T330)。

「このメッセージを信じるすべての者の心は、至聖所に向けられる。イエスはそこで箱の前に立って、恵みがなお与えられているすべての人々と、知らずして神の戒めを破った人々のために最後の仲保をしておられるのである。この贖罪は、生きている義人とともに、死んだ義人のためにも行われる。」初代文集 414,415

それ以外の人は死んでさばき＝最後のあがないを受け(ヘブル 9:27)、天に移されるというのが定めである。死なないで主を迎える人々は、生きている間にそれを経験する。調査と罪を除去する働きは 1844 年から始まった(大争闘下 219)。調査審判までは罪が除去されることは不可能である(大争闘下 218)。

イエスは民を完成するために至聖所に入られたのである(初代文集 414-415)。しかし、例外として神が、再臨の前にある聖徒たちを復活させることがお出来になるなら、エノク、エリヤ、モーセ、その他の者に最後のあがないの祝福を受ける神の大権を拒むことができようか？

11. さばきは、もうすでに聖化の過程で品性を完成した者を確認、監査するだけだ。

さばきの前に完全な品性に到達していなければならないのではないか。

検証:

確かにすべての信者はさばきの前にキリストにあって完全であることが要求されているが、だれもさばきの前に絶対的な完全に到達することはない。

「人は生きた頭であられるキリストに向かって成長する。それは一瞬の働きでなく、一生の働きである。神の生命に日毎に成長するが、その人の恩恵期間が閉じるまでは、キリストにあって完全なみ像に到達しないのである。」4T 367

人の恩恵期間はいつ閉じるであろうか。ある人にとっては死ぬ時である。生きて主を迎える人にとっては、さばきに直面する時である。さばきの時に永遠の運命が決定されるのである。生ける者のさばきは日曜休業令から始まる(21 番参照)。ということは、調査審判の前には絶対的な完全な品性はあり得ないということである。

ゼカリヤ 3 章を解説している国と指導者下 193-196 と大争闘下 216 に、神の民がさばきにおいて、いかに永久に、絶対的な完全の品性の衣を着せられるかを見るであろう。

さばきにおいて、神の民は、永久に罪の記録が消し去られ、後の雨で活気付けられるのである(使徒 3:19 ; 初代文集 437-440)。

各時代、神は先の雨を与えて人々をさばきに備えてきた。神が人を取り扱われる方法は同じである。先の雨は、イエスにある信者を清めるために与えられる。神は最後の世代に後の雨を注がれるのである。先の雨によって聖化された者たちを完全にするためである。さばきにおいて与えられるこの後の雨が信者の魂のうちに神の恵みを完成するのである(TM506)。

※ ここで言っている絶対的完全とは、品性の不完全さが無いという意味で使っている。信仰、知識の完全な発達のことを言っているのではない。

12. 日曜休業令と完全な品性の関係。

完全な品性は日曜休業令の前に完成されなければならない。日曜休業令は 100 点(完全)になった人がパスする最後のテストだから。日曜休業令が發布されてからなお、不完全であるなら、パスできない。

検証:

- 生ける者のさばきは日曜休業令から始まる。その引用文と論理性は 21 番で扱っている。
 1. 永遠の運命が決定されるのは日曜休業令の時である。
 2. それは永遠の分離の時であり、さばきの時である。
 3. 生ける者のさばき、それは獣の刻印か神の印かを人類が決定する時である。

この生ける者のさばきの時に、「主よ、私はおかげさまで清められました。あの取税人のようでないことを感謝します。安息日もきちっと守ってまいりました。改革も、命じられた活動もみんなしてまいりました。」という態度で出頭したなら、どうであろう？主は「わたしはあなたを知らない。」と言われないだろうか？自分の義に頼って出頭するなら永遠の命を失うことになる。

- 生ける者のさばきの時、神の民が経験することを見よう。

国と指導者下 193-196

「ヨシユアとみ使いに関するゼカリヤの幻は、贖罪の大いなる日の、最後の場面における神の民の経験に、特別に当てはまる。その時、残りの教会は大きな試練と苦悩に陥る。神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持っている者に対して、龍とその軍勢は激しい怒りを発する。サタンは世界を自分の家来だと思っている。彼は多くの自称キリスト者たちさえ支配してしまった。しかしここに、小さい群れが彼の主権に抵抗しているのである。もしサタンが、彼らを地上から一掃することができるならば、彼の勝利は完璧となる。サタン

は異教諸国を動かしてイスラエルを滅ぼそうとしたように、近い将来、地上の邪悪な国々を扇動して、神の民を滅ぼそうとするのである。人々は神の律法に背いて、人間の布告に服従するように要求されるのである。

これは、あきらかに日曜休業令が強要される時のことである。この時の民の魂の苦悩、罪の認識の深さに留意せよ！ 決して決して 100%、品性の完成を意識していない。否むしろ、罪の意識が絶頂に達するのだ。

「神のあわれみだけが、彼らの唯一の希望である。祈りが彼らの唯一の防御である。ヨシユアがみ使いの前で嘆願したように、残りの教会は、心へりくんだり揺るがぬ信仰をいだいて、彼らの助け主イエスによって、赦しと救出を嘆願するのである。彼らは自分たちの生活の罪深さを、十分認めている。彼らは自分たちの弱さと無価値さを知っている。そして、今にも絶望するばかりである。」

「...誘惑者サタンは、ヨシユアのそばに立ったように、彼らのそばに立って告発する。彼は、彼らの汚れた衣、彼らの品性の欠陥を指摘する。彼は、彼らの弱さと愚かさ、忘恩と罪、彼らがキリストと似ておらず、贖い主の栄えを汚したことを示す。彼は、彼らの状態は絶望的で、彼らの罪のしみは洗い去ることができないと思わせて、恐怖に陥れようとする。彼は彼らの信仰を失わせて、彼の誘惑に屈服させ、神への忠誠から引き離そうと望むのである。」

神の民はすでに罪ゆるされて、勝利したはずであるが、彼らの完全が提示されるであろうか。

「悪人たちは彼らの悲しみをあざけり、彼らの厳粛な訴えを嘲笑する。しかし、神の民の苦悩と屈辱とは、罪の結果失われた品性の力と高貴さを、彼らが回復しつつある間違いのない証拠である。彼らが罪のはなはだしい邪悪さをはっきり認めるのは、彼らがキリストに近づき、彼らの目がその完全な純潔さを凝視するからである。...」

この時、神の民は 100%の品性完成を主の前に提示するだろうか？ 絶対にそんなことはない！ 心の貧しさ、罪を悲しむことは、神の憐れみ、義を受ける方式なのである。「世にあるうちも、世を去る時も、知らぬ黄泉にも、さばきの日にも、ちとせの岩よ、わが身をかこめ」なのである。その時、「完全で十分な許しと義認」(大争闘下 216)、罪の除去が与えられる。「イエスは、彼らの罪を弁解はなさらないが、彼らの悔い改めと信仰をごらんなる(大争闘下 217)。その祝福の内容は何だろうか？

「神の民が神の前で心を悩まし、心が純潔になることを嘆願するときに、『彼の汚れた衣を脱がせなさい』という命令が出される。そして、『見よ、わたしはあなたの罪を取り除いた。あなたに祭服を着せよう』という励ましの言葉が語られる(ゼカリヤ書 3:4)。キリストの義というしみのない衣が、試練と誘惑に耐えた忠実な神の民に着せられる。さげすまれた残りの民は栄光の衣を着せられ、世俗の腐敗に二度と汚されることはないのである。彼らの名は小羊の命の書に書き留められて、各時代の忠実な者の中に加えられるのである。彼らは、欺瞞者の策略に抵抗した。彼らは龍がほえても、忠誠を失わなかった。今や彼らは、誘惑者の計略から、永遠に安全なものとなった。彼らの罪は、罪の創始者の上に移された。『清い帽子』が彼らの頭にかぶせられた。』

なお神の民は、不完全で汚れた衣＝罪の記録のゆえに心の純潔を嘆願するのである。日曜休業令＝生ける義人のさばきの時に、自分の義に頼り、自分の罪深さや無価値さを認識しないで、完全な品性になったから当然パスすると考える人は、144,000 には入れない。あがないの日に魂を悩ます

ことをしなければ「民の中から絶たれるのであった。」大争闘下 224

「サタンが告発をしていたときに、目には見えないが、聖天使たちがあちこち行きめぐって、忠実な人々に生ける神の印を押していた。この人々は、その額に父なる神の名を記されて、小羊とともにシオンの山に立つのである。彼らはみ座の前で新しい歌を歌うが、それは地上から贖われた 144,000 人のほかは、だれも学ぶことができない。」

日曜休業令という最後のテスト＝生ける者のさばきは忠実な者たちにこんなすばらしい祝福が与えられる時なのである。新しい契約が完全に成就する時なのである。これが、福音でなくて何であろう？

● 恩恵期間が閉じるまでは完全でない。

「すべての生きたクリスチャンは、神の生命に日ごとに進んでいく。完全に向かって進んでいくとき、彼は毎日回心を経験する。そしてこの回心は、完全なクリスチャン品性の完成に到達するまでは終わらない。それは最後の不死の仕上げの完全な準備となる。」2T505

「人は生きた頭であられるキリストに向かって成長する。それは一瞬の働きでなく、一生の働きである。神の生命に日毎に成長するが、その人の恩恵期間が閉じるまでは、キリストにあって完全なみ像に到達しないのである。」5T367

「法令が発布されて印が押される時、彼らの品性は永遠に清く、しみのない者となるであろう。」5T216

後の雨／大いなる叫び、144,000 の神の印、完全な品性が日曜休業令＝生ける者のさばきの前に経験することが神のシナリオの順序であると明らかに書いてあるなら、「そのようにこの身になりますように」と信じよう。しかし、最後のテストで教会は完全に震われ、清められて神の祝福が与えられ、神の栄光がみ民イスラエルに与えられるとはっきり書いてあるならそのとおりに信じる者は幸いである。後の雨の特定の日時は定められていない。しかし、事件の順序はハッキリしているはずである。

「預言が、起こると予告したことはすべて、現在まで歴史のページをさかのぼることができるのであるから、これから起こることもすべて、その順序どおりに成就するものと確信してよいのである。」国指下 144

13. 聖所の清めは天の聖所の清めであり、天にある記録の書からの法的な清めである。神の民の特別な清めではない。

ある人たちは、贖いの日には幕屋だけが清められたのであり、民が特別な清めを経験するのではないと言う。指導者たちの言葉を引用しよう：

「レビ 16:30 を、今天で進行中である実体の大いなる贖いの日にあてはめ、神の民の清めに適用し、肉において道徳的完全になると読むのは聖書の曲解である。」RH7/30/1964,p13 (R.F.コットレル)

「聖書と証の書のどこにも天の聖所の記録の書から罪が除去されるということ、信者の生涯

から除去されるということが同時に起こるとの主張を証拠立てるものはない。」
RH9/10/1964 (L.C.ネーデン)

「主は、聖所の罪の記録から取り除かれるのであって、神の民から罪を除かれるのではない。
...神の民から罪を除くことはすでに起こっているのである。」RH9/17/1964(L.C.ネーデン)

「(裁かれ、罪が除去され、印される働き) これらは天の聖所で起こる法的な出来事であって、
魂の宮で起こることではない。」Ministry10/1968,p21 (W.P.ブラドレー)

検証:

しかし、あがないは全聖所と同じように民のためになされたのであった。

「イスラエルの人々の汚れと、そのとが、すなわち、彼らのもろもろの罪のゆえに、聖所の
ためにあがないをしなければならない。また彼らの汚れのうちに、彼らと共にある会見の
幕屋のためにも、そのようにしなければならない。彼が聖所であがないをするために、は
いった時は、自分と自分の家族と、イスラエルの全会衆とのために、あがないをなし終え
て出るまで、だれも会見の幕屋の内にはならない。この日にあなたがたのため、あな
たがたを清めるために、あがないがなされ、あなたがたは主の前に、もろもろの罪が清め
られるからである。彼は至聖所のために、あがないをなし、また会見の幕屋のためと、祭
壇のために、あがないをなし、また祭司たちのためと、民の全会衆のために、あがないを
しなければならない。」ルビ記 16:16,17,30,33

マラキ 3:1-4

国指下 193-196 引用文は 3 番を参照。

大争闘下 396,7

14 番を参照。

14. 「罪なき完全な品性はこの地上では不可能なことである。罪が完全に取 り除かれるのは、再臨の時である。」

この問題は、5 番目の問題でも扱った。「罪なき完全な品性は再臨前に、この地上では不可能」と
いう神学者の思想が、今日の霊的イスラエルに災いをもたらしている。

神学者たちはどのように言っているだろうか？

E・ヘッペンストール「古い人は我々の死、またはキリストの再臨まで我々の内に残る」「この原罪
は、クリスチャンと非クリスチャンに、彼らが死ぬ時、あるいは昇天する時まで残る。」「ここ
に、この地上での罪なき品性に関して最も厳粛な警告がある。クリスチャンは彼の内になお
悪の泉、墮落した性質が残っていることを知っている。」Definitions of Righteousness 18,
ST 12-1963

T・バンチ「我々はイエスが来られる時にのみ完全にされることを覚えるべきである。」The Ministry,
12-1965

S・ワッツ「我々はこの世では罪なき完全には到達できない。」RH/5/19/1966

D・フォード「我々の古い性質は、主が再臨なさる時に栄化され、ついに滅ぼされるのである。その時、我々の中に、我々の上に罪がなくなるのである。」ST(オーストラリア)、12-1963

検証:

靈感の書は何と言っているだろうか？

至聖所の最後のあがないの働きで、罪が除去されて、罪なき完全な品性が与えられる。そして再臨に備えるのである。

ダニエル 8:14、レビ 16:30「もろもろの罪から清められる」

「品性の改変は主が来られる前に起こらねばならない。我々の性質は純潔で清くなければならない。」OHC278

「キリストがおいでになる時、我々の卑しい体は変えられ、彼の輝かしい体のようにされる。しかし、その卑しい品性は、その時、清くされることはない。品性の改変は、彼がおいでになる前に起こるのである。我々の性質は純潔で清くなければならない。我々の魂にご自分のみ像が反映されるのを主が喜びをもってごらんになるために、我々はキリストの心を持たなければならない。」JOHC 278

「今、われわれの大祭司がわれわれのために贖いをしておられる間に、われわれは、キリストにあって完全になることを求めなければならない。救い主は、その思いにおいてさえ、誘惑の力に屈服されなかった。サタンは、人々の心の中に、なんらかの足場を見つける。心の中に罪の欲望があると、サタンはそれを用いて誘惑の力を表わす。しかし、キリストはご自身について、『この世の君が来る……。だが、彼はわたしに対して、なんの力もない』と宣言された（ヨハネ 14:30）。サタンは、神の子の中に、彼に勝利を得させるなんのすきも見つけることができなかった。神のみ子は、天父の戒めを守られた。そして、サタンが自分に有利に活用することのできる罪が、彼の中にはなかった。これが、悩みの時を耐えぬく人々のうちになければならない状態なのである。」大争闘下 397

「キリストに対する信仰によって神の戒めのすべてに従う者だけが、アダムが罪を犯す前に生きた罪のない状態に到達するであろう。彼らは、神の律法のすべてに従うことによってキリストに対する愛を証するのである。」6 B C 1118

「残りの民は栄光の衣を着せられ、世俗の汚れに二度と汚されることはない。... 今や彼らは、誘惑者の計略から永遠に安全なものとなった。... 聖天使たちが生ける神の印を押ししていた。」国下 196

「我々は彼に満ち満ちているもの、我々の前に置かれている目標—キリストの品性の完全—を求めているであろうか。主の民がこの目標に到達するとき、彼らはその魂に印されるのである。聖霊に満たされて、彼らは、キリストにあって完全になり、記録の天使が「完了した」と宣言する。」RH6/10/1902（スタディバイブル新 426）

「『実がいと、すぐにかまを入れる。刈入れ時がきたからである。』キリストは、ご自分の教会の中に、ご自身をあらわそうと熱望しておられる。キリストの品性が完全にキリストの民の中に再現されたときに、彼らをご自分のところに迎えるために、主はこられるのである。」実物教訓 47

「イエスをながめることによって、いっそう明らかに神を見ることができるようになり、わたしたちは、ながめることによって変えられる。同胞に善を行ない、彼ら愛することは、わたしたちにとっては自然に行なう本能となる。そして、神の品性と全く同じ品性 (counterpart 写し)」を自分たちの中に形成する。」実物教訓 331

※ C.マービン・マックスウェルも「罪なき完全」を信じていた。

「フィッチやストックマンやミラーは再臨運動のピークの時に最後のラッパの鳴り響くときを待って休みに入った。彼らは復活のために備えができていたが、この文のメッセージによると(大争闘下 141)彼らは昇天には備えができていなかった。...

キリストの義の衣に覆われていたこれらの初期のアドベンチストたちは、聖書の英雄たちのように「全き」者であったことには疑いがない。...

死んで復活して主を迎える者たちと生きて主を迎える者たちの明確な違いをマックスウェル先生はこんこんと説いている。最後の民は、最後のあがない、聖所の清めの経験で「罪なき完全な者」とされることを説いている。(Perfection 142~180 参照)

15. 「キリストを信じる者たちは、神の恵みによって救われるのであって、過去の聖徒たち以上の特別なきよめの経験は必要ではない。」

検証:

天でのキリストの仲保がなくて、悩みの時を通過して主を迎える者たちは、今持っていない特別な清めの経験をする。

「かつてなかったほどの悩みの時が、まもなくわれわれの前に展開する。それだからわれわれには、一つの経験——今われわれが持っておらず、また多くの者が怠けて持とうとしない経験——が必要なのである。現実の困難というものは、予想したほどではないということがしばしばある。しかし、われわれの前にある危機の場合は、そうではない。どんなに生々しく描写しても、この試練の激しさには、とうてい及ばない。この試練の時に、人間は、みな、自分で神の前に立たなければならない。「主なる神は言われる、わたしは生きています、たといノア、ダニエル、ヨブがそこにいても、彼らはそのおすこ娘を救うことができない。ただその義によって自分の命を救いうるのみである (エゼキエル 14:20)。」大争闘下 397

その特別な経験とは何であろうか?

「今、われわれの大祭司がわれわれのために贖いをしておられる間に、われわれは、キリストにあって完全になることを求めなければならない。... 神のみ子は、天父の戒めを守られた。そして、サタンが自分に有利に活用することのできる罪が、彼の中には罪がなかった。これが、悩みの時を耐えぬく人々のうちにななければならない状態なのである。」大争闘下 397

「しかし、人々は、まだ主に会う準備ができていなかった。まだ、彼らのためになされねばならぬ準備の動きがあった。彼らは、まず光を受けて、天にある神の宮に心を向けねばならなかった。そして彼らが、そこで奉仕しておられる彼らの大祭司に、信仰によって従っ

ていくときに、新しい義務が示されるのであった。もう一つの警告と教への使命が、教会に与えられるのであった。

「しかし、人々は、まだ主に会う準備ができていなかった」と言われている人々はどんな人々であつたらうか？初代文集 393 にこう書いてある：「その時、神の民は、神に受け入れられた。彼らの中には、イエスのお姿が反映されていたので、イエスは、喜びをもって彼らをごらんになった。彼らは、完全な犠牲と全的献身をしており、不死の姿に変えられることを期待していた。」聖所の聖化の経験だけでは主を迎えることはできなかったのである。

大争闘にもどる。

「預言者は語っている。『その来る日には、だれが耐え得よう。そのあらわれる時には、だれが立ち得よう。彼は金をふきわける者の火のようであり、布さらしの灰汁のようである。彼は銀をふきわけて清める者のように座して、レビの子孫を清め、金銀のように彼らを清める。そして彼らは義をもって、ささげ物を主にささげる』（マラキ書 3:2,3)。天の聖所におけるキリストのとりなしがやむとき地上に住んでいる人々は、聖なる神の前で、仲保者なしに立たなければならない。彼らの着物は汚れがなく、彼らの品性は、血をそそがれて罪から清まっていなければならない。キリストの恵みと、彼ら自身の熱心な努力とによって、彼らは悪との戦いの勝利者とならなければならない。天で調査審判が行なわれ、悔い改めた罪人の罪が聖所から除かれているその間に、地上の神の民の間では、**清めの特別な働き**、すなわち**罪の除去**が行なわれなければならない。この働きは、黙示録 14 章の使命の中にさらに明瞭に示されている。

この働きが成し遂げられると、キリストの弟子たちは、主の再臨を迎える準備ができるのである。『その時ユダとエルサレムとのささげ物は、昔の日のように、また先の年のように主に喜ばれる』（マラキ 3:4)。その時、主が再臨されてご自分のもとに受け入れられる教会は、『しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、清くて傷のない栄光の姿の教会』である（エペソ 5:27)。また、その教会は、『しののめのように見え、月のように美しく、太陽のように輝き、恐るべき事、旗を立てた軍勢のような者』である（雅歌 6:10)。」
大争闘下 140,141

16. 「キリストはアダムの墮落前の性質を取られた。我々の身代わりであつて、我々が罪を犯さないで生きられるという模範ではない。」

キリストは墮落後の性質を取られた。我々も罪を犯さないで生きられることの模範である。どうしてキリストの取られた性質について正しい考えを持つことが大事なのだろうか？キリストはアダムが罪を犯す前の性質を取られたというのと、キリストはアダムが罪を犯して後の墮落した性質を取られたということはどんな結論に導くだろうか？

1. キリストはアダムが罪を犯す前の性質を取られたのだ。我々と違うのだから、キリストのように完全に罪に打ち勝ち、罪のない生涯を送ることは不可能である。
2. キリストはアダムが罪を犯した後の墮落した性質を取られた。「わたし自身では何一つできない」立場に御自身を置かれた。彼は天父に依存して罪なき生涯を送られた。我々の模範である。我々もキリストに依存して生きるなら、罪に打ち勝つ勝利の生活ができる。キリストの完全は、我々の模範である。招請であり約束である。144,000 はキリストのみ像を完全に再現する。

「彼はご自分の罪なき性質の上にわれわれの罪深い性質をおとりになった。それは試みられている者をいかにして助けるかをお知りになるためである。」(メディカル・ミニストリー - 181 英文)

「人性の衣をつけて、神のみ子は、彼が救おうとなさる人々の程度にまで下られた。彼の中には何の偽りも罪深さもなかった。しかし、彼はわれわれの罪深い性質をおとりになった。」(レビュー・アンド・ヘラルド 1896年12月15日 英文)

「キリストは人間の罪深さではなく、(人間の) 性質をおとりになることによって人類の頭という立場を取られた。」 7 B C 925

「注意しなさい。キリストの人性を瞑想する方法について注意しなさい。彼を罪の傾向をもった人のように人々の前に教えてはならない。」 5 B C 1128

「キリストに墮落のしみ、または傾向があったとかある程度彼は墮落に屈したとかいうようなわずかの印象でも人々の心に残してはならない。」 (5BC p1128-1129 英文)

「イエスの一生は、われわれもまた神の律法に従うことができることを証明している。」 (希望 上 9)

「人性が神性と結合するとき、罪を犯さないということとその生涯は物語っている。」 (ミニストリー・オブ・ヒーリング 156)

「キリストは人間の形をとってこられて、人性に神性が結合するとき、人は神の戒めのあらゆる点に従うことを、その完全な従順によって立証なさった。」 芥実 294

「キリストに対する信仰によって神の戒めのすべてに従う者だけが、アダムが罪を犯す前に生きた罪のない状態に到達するであろう。彼らは、神の律法のすべてに従うことによってキリストに対する愛を証するのである。」 6 B C 1118

「救い主は、何のためにご自分の神性が人性と結合しているかを弟子たちが理解するように熱望された。キリストは、神の栄光を示し、その回復力によって人が高められるようにこの世にこられた。神はキリストのうちにあらわされたが、それはキリストを通して神が人々のうちにあらわされるためであった。イエスは、人がイエスに対する信仰を通して持つことのできないような特性をあらわしたり、能力を働かせたりされなかった。キリストの完全な人性は、キリストに従うすべての者が、キリストと同じように神に服従するときに所有することのできるものである。」 希望下 147

17. 1888年の信仰による義のメッセージに関して「1888年にわが教会で一時反対があったが、教会は受け入れたので今日の繁栄がある。信仰による義認は、他教派も共有するものである。」

検証:

二つに分けて考えてみよう。

1. 我々は、民として1888年の信仰による義認を受け入れたのではなく、拒んでしまったというのが事実である。その結果我々は背教の危機的状況にある。

使徒時代以来目撃したことのない大リバイバル、後の雨—大いなる叫びをもたらすはずであった、1888年の信仰による義認のメッセージを教会は拒んだ結果、かつてないほどの深刻なラオデキヤ状態に陥った。チャンスを逸したのである。

E.G.ホワイト:

1890:「私はミネアポリスの集会の時以来、かつてないほどのラオデキヤ状態の教会を見せられた。」RH8/26/1890

なぜ、1891年世界総会はホワイト夫人をオーストラリアに送ったか?

1895:「なぜそんなにジョーンズとワゴナー兄弟を憎むのか... あなたがたがこれらの人々の伝えたメッセージを拒む時、そのメッセージを与えられたキリストを拒んでいるのです。」手紙 51-A,1895

1896:「指導者の強情心が... 反抗させた。聖霊の特別な力を締め出してしまった... 世界中を栄光で照らす光は拒まれ、我々の兄弟たちの行動によって締め出された。」1 SM234, 235

1902:「ミネアポリスの世界総会での恐るべき経験は、現代の真理を信じるものの歴史の中で最も悲しい章の一つであることが示された。」Letter179,11/19/1902

「私の生涯中最も悲しい経験」The Ellen G. White 1888 Materials.179

A.T.ジョーンズ:

1893:「では、兄弟たちは、ミネアポリスで何を拒んだのでしょうか? (会衆の応答)「大いなる叫びです」... 「それでは、彼らが立っていた恐ろしい立場にいた兄弟たちはミネアポリスで何を拒んだのでしょうか?」 (会衆の応答)「彼らは後の雨、すなわち第三天使の使命の大いなる叫びを拒んだのです。」世界総会研究7

▲ アドベンチスト・ライフの勝利説を見よ。

A.G.ダニエルス(元世界総理在職 25年):

1926:「そのメッセージは、決して受け止められなかったし、宣べ伝えられることもなかった。また、その中に含まれていた計り知れない祝福が何の妨げもなく伝えられるということはなかった」Christ our Righteousness, (キリスト我らの義 p41), (1941版)(1926初版)

単純な論理:

- ① 1888年のメッセージを受け入れていたら、「サタンの力は、我々の内に打ち砕かれていたであろう」。
- ② 1888年のメッセージを受け入れていたら、教会は後の雨—大いなる叫びに入っていたであろう。み業は「山火事のような早さで」「いなずまのごとく」短期間に終わって、み国に入っていたはずである。

2. 1888年の信仰による義認のメッセージは、他教派とは共有しないユニークなメッセージ

である。

信仰による義認は、原則的には永遠から同じである。しかし、時代背景、舞台によって信仰の働かせかたが違う。受ける祝福が違うのである。

旧約時代は、やがて来られる神の小羊、救い主に対する約束を信じる信仰によって義認され、罪の赦しと清めを頂いた。キリストの時代は、キリストご自身と十字架に死なれたキリストを信じる信仰によって赦しと清めを頂いた。新約時代は、十字架と復活されて、天の聖所で仲保の働きをなさるお方を仰いで義認された。1844年以後、大祭司なるキリストが天の至聖所に移られたら、至聖所のキリストを仰いで義認されるのである。

信者から永久に罪が除去され、罪なき完全な品性を与えるという約束は、キリストが至聖所に入るまでは成就しなかった。「完全で十分な許しと義認」は与えられないのであった。(大争闘下 216)

ヘブル 11:13 これらの人はみな、信仰をいだいて死んだ。まだ約束のものは受けていなかったが、はるかにそれを望み見て喜び、そして、地上では旅人であり寄留者であることを、自ら言いあらわした。

11:39 さて、これらの人々はみな、信仰によってあかしされたが、約束のものは受けなかった。

注意: 他教派の信者は救われないのだろうか？与えられた光に従って歩んでいるなら、救われる。知らないでいる場合、神は「見過ごしにされる」(使徒 17:30)。「光を知らされてから後」、真理に歩まないなら、救いから漏れるであろう。「バビロンを構成する諸教会は、霊的暗黒と神からの離反に陥っているにもかかわらず、その中にはまだ、真のキリスト者がいる。」(大争闘下 92)

プロテスタント諸教会の信仰による義認の考え方とどう違うのか？

「第三天使の使命は、信仰による義認そのものである」(1 SM327)。信仰による義認は他教派と共有するものであるとすると、他の教会も第三天使の使命をもっていることになる。

「第三天使の使命は、至聖所に人々の心に向けさせる」(初文 414)。とすると、他教派も至聖所にいます大祭司に人々の心に向けさせているだろうか。セブンスデー・アドベンチストの信仰による義認は、最後のとりなしをされる大祭司イエスに向かって信仰を働かせるように導くのである。

「イエスの仲保による祝福(benefits)にあずかる者は、贖罪の大事業をなさるイエスに、信仰によって従っていく人々である。一方、この働きに関する光を拒む者は、その祝福にあずかることができない。キリストの初臨の時に与えられた光を拒み、彼を世の救い主として信じなかったユダヤ人たちは、彼によるゆるしを受けることができなかった。イエスが昇天して、ご自分の血によって天の聖所に入り、弟子たちにご自分の仲保による祝福を注ごうとされたとき、ユダヤ人たちは全くの暗黒の中に取り残されて、彼らの無益な犠牲と供え物を続けたのであった。型と影の奉仕は終わっていた。これまで人が神に近づいていた扉は、もはや開かれてはいなかった。ユダヤ人は、彼を見いだし得る唯一の道、すなわち、天の聖所における奉仕を通して彼を求めることを、拒んだのであった。

したがって彼らは、神との交わりを見いだすことができなかった。彼らに対して、扉は閉められた。彼らは、キリストが真の犠牲であり、神の前の唯一の仲保者であることを知ら

なかった。そのために彼らは、彼の仲保の祝福にあずかることができなかった。」大争闘下 147-148

「すべての者は、自分たちの大いなる大祭司キリストの立場と働きについて、自分で知っている必要がある。そうしなければ、この時代にあって必要な信仰を働かせることも、神が彼らのために計画しておられる立場を占めることもできなくなる。」大争闘下 222

「わたしは、キリストの最初の降臨が宣布された当時のことを示された。イエスのために道を備えるために、ヨハネがエリヤの霊と力をもってつかわされた。ヨハネの証言を否定した人たちは、イエスの教えから何の益も受けなかった。キリストの来臨を予告する使命に反対だった者たちは、キリストがメシヤだという最大の証拠すら容易に信じることができなかった。サタンは、ヨハネの使命を拒んだ人たちを、さらに深みへひっぱりこみ、キリストを拒んで十字架につけさせた。ペンテコステの祝福は、人々に天の聖所へ至る道を教えるはずだったが、キリストに反対した人々は、その祝福を受けることのできない立場に、われとわが身を追いやった。神殿の幕が裂けたことは、ユダヤ人の犠牲と儀式がもはや神に受け入れられなくなった証拠であった。大いなる犠牲であられるキリストがささげられて、神に受け入れられたのであった。そして、ペンテコステの日にくだった聖霊によって、弟子たちの心は地上の聖所から天の聖所へ向けられた。イエスはご自身の血によってそこへ入り、贖いの恩恵を弟子たちにそそがれるのであった。しかし、ユダヤ人は、真つ暗闇の中にとり残された。彼らは、救いの計画について光をもつことができずだったのに、それらの光を全部失って、依然として無用な犠牲とささげものに頼っていた。天の聖所が地上の聖所に代わったのに、彼らは、その変更について何も知らなかった。したがって彼らは、聖所におけるキリストの仲保によって、何の恩恵も受けることができなかった。...

第一の使命を拒んだ者は、第二の使命からも益を受けることができなかった。夜中の叫びによって、人々は、信仰によってイエスとともに天の聖所の至聖所に入る準備をなすべきであったが、その夜中の叫びも役には立たなかった。初めの二つの使命を拒んだために、理解力の暗くなった彼らは、至聖所に至る道を照している第三天使の光りを見ることができなかった。名目的諸教会は、ユダヤ人がイエスを十字架につけたように、これらの使命を十字架につけ、そのために彼らは、至聖所へ入る道を知らず、そこにおられるイエスの仲保の恵みを受けることができなことを、わたしは見た。彼らは、無益な犠牲をささげていたユダヤ人のように、イエスが去ってしまわれた部屋に向かって、彼らの無益な祈りをささげている。そして、この欺瞞に満足したサタンは、宗教的性格を装って、彼の力としるしと奇跡を行い、これらの自称クリスチャンたちの心を、彼自身に引きつけ、しっかりと彼のわなに捕らえてしまうのである。彼は、ある者はある方法で欺き、他の者はまた別の方法で欺く。彼は、さまざまな性質の人々を陥れるために、さまざまな欺瞞を用意している。ある人々は、ある欺瞞は嫌悪しながらも、他の欺瞞はやすやすと受け入れる。サタンはある人々を心霊術で欺く。彼はまた、光りの天使を装って現れ、偽りの改革によって、彼の勢力を地上に拡大する。教会は、意気盛んになって、神が彼らのために驚くべき働きをしておられると考えるのであるが、それは、別の霊の働きなのである。興奮はさめて、世界も教会も、以前よりはさらに悪化した状態に陥るのである。

わたしは、神が、名目的再臨信徒たちと、墮落した教会の中に、心の正しい人々を持っておられるのを見た。そして、牧師や信者たちが、災害が、くだされる前に、これらの教会から呼び出されて、喜んで真理を受け入れることをわたしは見た。サタンは、この事を知っている。第三天使の大いなる叫びがあがる前に、サタンは、これらの宗教団体に、興奮

を起こさせ、真理を拒んだ人々に、神が彼らと共におられると思わせるのである。サタンは、心の正しい人々を欺いて、神がなお教会のために働いておられると彼らに思わせたいと願っている。しかし、光が輝き出る。そして、心の正しい人はみな、墮落した諸教会を去り、残りの民に加わるのである。」初代文集 422-424

至聖所におけるキリストの仲保の「祝福」「恩恵」は、罪の除去である(大争闘下 215-222)。
それは、次のようにも表現されている:

「キリストは、ご自分の民のために完全で、十分な許しと義認だけでなく、彼らが、ご自分の栄光にあずかり、ともにみ座につくことを求められる。」

「新しい契約の成就」「罪の除去」(大争闘下 216-217)

「この働きが成し遂げられると、キリストの弟子たちは、主の再臨を迎える準備ができるのである。」大争闘下 141

1888年の信仰による義認のメッセージについて預言者は何と言ったか？

「主は大いなる憐れみのうちにワゴナー及びジョーンズを通して、ご自分の民に最も尊い使命を与えられた。その使命は、上げられた救い主、全世界の罪のための犠牲をさらに顕著に世界に示すものであった。それは、保証人であられるキリストを信じ信仰を通して与えられる義認を提示した。それは神の全ての律法への服従に表されるキリストの義を受け入れるように民を招くものであった。多くの者は、イエスを見失ってしまった。彼らの目は神としてのお方、功績、人類家族に対する不変の愛に向けられるべきであった。すべての力は彼のみ手に与えられ、そして彼はその尊い賜物を人に分け与え、無力な人間の器にご自分の義の比類なき、尊い賜物を与えられるはずであった。これが神が世界に与えようとなさったメッセージである。それは大いなる叫びで、大量の御霊の注ぎを伴って宣伝されるところの第三天使の使命なのである。」牧師への勧告 91,92

- セブンスデー・アドベンチストの働きは、「人々を主の大いなる日に備えさせること」(9 T 19)である。
- セブンスデー・アドベンチストの使命は「人々を王の来臨のために備えるところの第三天使の使命」(9 T 98)である。
- 第三天使の使命は「信仰による義認そのものである」。
- 第三天使は、人々の目を至聖所の大祭司イエスに向けるものである。
- 至聖所におけるイエスの仲保は、「罪の除去」「後の雨＝聖霊の完全な満たし」の祝福を与えるものである。
- 信仰による義認は、すべての律法への服従に表されるキリストの義を受け入れるように民を招くものである。

そうであるなら、セブンスデー・アドベンチストの説くべき信仰による義認の使命は他教派も共有するものであろうか。

もし、そうであるなら、一般諸教会に「バビロンは倒れた」と言い得るだろうか？

そもそも信仰による義認の原則は、ローマ書に最も顕著に説かれている：

- | | |
|----------------------------------|------------|
| 1. 信仰による義認—無償で与えられる赦しの賜物—— 3-5 章 | 第一天使の使命の原則 |
| 2. 信仰による義認—罪からの清め、解放、自我に死ぬ—6,7 章 | 第二天使の使命の原則 |
| 3. 信仰による義認—服従を伴う—第三天使の使命—— 8 章 | 第三天使の使命の原則 |

1. 2. 3. の経験は分離できない。罪からの解放、清め、自我に死ぬ経験が伴わなければ、義認ではない。服従が伴わなければ義認ではない。福音は「信仰の服従に至らせる」のである（ローマ 1:15；16:25）。この三つの経験はセットである。義認は“radical change”「大いなる変化」「徹底的変化」をもたらす。聖化とは、この義認の経験の持続であり、更なる深い経験へ進歩することなのである。ということは、もっと深い悔い改め、更なる信仰によってイエスに依存することである。なぜなら、キリストに近づけば近づくほど、その純潔さがはっきり見えるようになり、ますます自分の罪深さに気がつき、イエスへの依存度が高くなる。

さばきの時には、完全に十分に最も強く罪深さが意識される。そして最も深い悔い改めへと導かれる。イエスの功績に完全に頼る経験である。自分は0に、キリストが100%になったときが完全な状態である。その結果、罪の除去、神の印を受けるのである。

ルシファーの罪は、自分に依存し、キリストに依存する必要がないと思ったときから生じた。イエスが罪を犯さなかったのは、「わたし自身からは何事もすることができない」「肉の生活の時には、激しい叫びと涙とをもって、ご自分を死から救う力のあるかたに、祈りと願いとをささげ、そして、その深い信仰のゆえに聞き入れられたのである」（ヨハネ 5:30；ヘブル 5:7,8）。イエスは信仰によって、霊によって義とされたのである（1テモテ 3:16）。完成された最後の民は、その意味で「神の戒めを守り、イエスの信仰を持ちつづける」と表現されているのである。

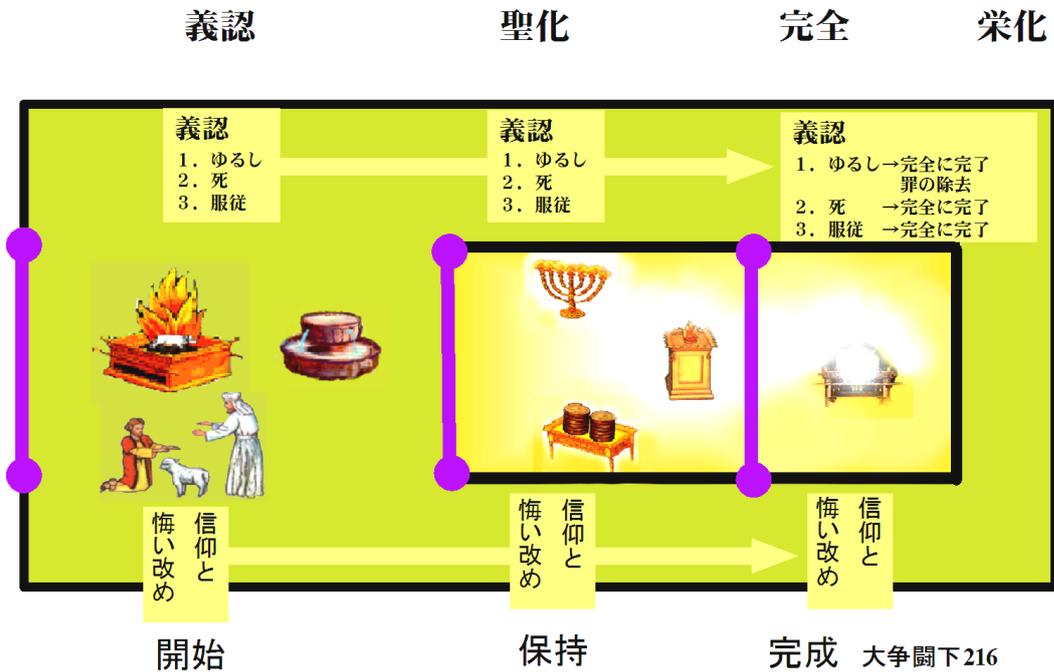
至聖所のあがないは信仰による義認の完成である。なぜなら、神の印を受けた者は、永久に罪が除去されるからである。「さげすまれた残りの民は栄光の衣を着せられ、世俗の腐敗に二度と汚されることはない」「今や彼らは誘惑者の計略から、永遠に安全な者となる」のである（国下 196）。罪がないから悔い改めが終わっているのである。「すべての生けるクリスチャンは、神がお与えになる生命に預かり日々前進する。彼が完全に向かって前進するとき、彼は毎日神への回心を経験する。そして、この回心は不死の仕上げのために完全な準備となるクリスチャン品性の完成に到達するまでは、終わることがないのである。」2T505；4T366 参照。

だから、第三天使の使命は、

1. 信仰による義認—無償で与えられる赦しの完全にして十分な経験である。
2. 信仰による義認—罪からの清め、解放、自我に死ぬ完全にして十分な経験である。
3. 信仰による義認—服従の完全にして十分な経験である。

至聖所での経験は、「完全で十分な赦しと義認」である（大争闘下 216）。

信仰による義認は、永遠の福音である。原則は永遠から変わらない。アブラハムも信仰によって義認された。パウロも、ルターも同じ原則を説いた。



しかし、1888年の信仰による義認のメッセージはどこが違うのであろうか。背景は至聖所である。祝福は永久に罪が除去され、キリストの品性が神の民のうちに再現されることである。神の律法との完全な調和、神の律法の擁護、神の御品性の擁護である。

一般キリスト教会は、それを拒んだので、彼らはいいによる義に陥った。

「諸教会が、第一天使の使命を受けることを拒んだときに、彼らは、天からの光を拒否し、神の恵みを失った。彼らは、自分たち自身の力に頼った。」初代文集 391

つまり、諸教会は、引き続きイエスの功績に頼ることをしなかったので、自分の行いによる義に陥ったと言っているのである。

「プロテスタント教会は大いなる暗黒の中にある。」大争闘下 321

「プロテスタントは、宗教改革者の時代以後、ひどく墮落してしまった。」大争闘下 329

「プロテスタント諸教会は世の関心を求めたために、誤った愛がその目を見えなくした。彼らは、どんな悪の中にも善いものがあると信ずることは正しいことである、と思い込んでいる。だからその必然的な結果として、ついにはすべての善いものの中に悪なるものを信ずるようになるのである。かつて聖徒たちに伝えられた信仰を守って立とうとしないで、彼らは今や、いわばローマに対して無情な意見を抱いていたことを陳謝し、自分たちがかたくなであったことに対して許しを求めているのである。」同。



生きて主を迎える
聖徒達の経験
復活して主を迎える
聖徒達の経験

「第三の天使は、「ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある」と言って、メッセージを終わっている。彼は、この言葉を繰り返したときに、天の聖所を指さした。このメッセージを信じるすべての者の心は、至聖所に向けられる。」
初代文集414



三天使の使命

「その時、教会は、再臨使命の光を拒否したために、道徳的墮落を経験したのであったが、しかしその墮落は、全面的なものではなかった。諸教会は現代に対する特別な真理を拒否しつづけてきたために、ますますひどく墮落してしまった。... 世俗と妥協する精神と、われわれの運命を決定する現代の真理に対する無関心とが、すべてのキリスト教国のプロテスタント諸教会内で力を得ている。こうした教会も、第二天使の厳粛で恐るべき告発のなかに含まれる。しかし、背教の活動は、まだその頂点に達していない。」大争闘下92

※ カトリックとルーテル教会が信仰による義認で合意した。SDA と他教派が信仰による義認を共有するとするならば、カトリックとの距離はどのようになるであろうか。

18. 他教派との関係—エキュメニカル(キリスト教合同運動)へ？

検証:

我々もキリスト教の仲間という考えが、しいてセブンスデー・アドベンチストでなくてもいいという考えを持つ信者に行っていることは否めない。ある人は、アドベンチストのアイデンティティー(独自性)を見失って再臨信仰の破船にあっていてる。

「サタンは、霊魂不滅と日曜日の神聖化という二つの重大な誤りを通して、人々を彼の欺瞞のもとに引き入れる。前者は心靈術の基礎を置き、後者はローマとの親交のきずなを作り出す。合衆国の新教徒は、率先して、心靈術と手を結ぶために淵を越えて手を差しのべる。彼らはまた、ローマの権力と握手するために深淵を超えて手を差し出す。この三重の結合による勢力下に、アメリカはローマの例にならって良心の権利をふみにじるのである。...

カトリック教徒は、奇跡を真の教会の一つの確証として誇っているので、不思議なことを行なうこの力に容易にだまされる。また新教徒も、真理のたてを投げ捨ててしまったので、同じように惑わされるであろう。旧教徒、新教徒、それに世俗の人たちもみな同じように、

力のない形だけの敬虔を受け入れるであろう。

そして彼らはこの合同の中に、全世界を改心させるための一大運動と、長く待ち望んでいた福千年期の先触れを認めるのである。」大争闘下 350,351

紀元2000年、ローマはエルサレムで「大聖年」「大ヨベルの年」「大祝典」を計画し、福千年の発端の年として計画していた！新世界秩序構築が目前に迫っている！

最近のヨハネ・パウロ2世の、全世界の聖職者たちに対する緊急メッセージを見て頂きたい！

大いなる、恐るべきことがやってくる！全宗教を一つに束ねて、「電光のような速度で走っている列車」（初代文集 176、426）を預言者は見せられた。

三天使の使命を拒む諸教会を、聖書はバビロンと呼んでいる。

セブンスデー・アドベンチストが「レムナント＝女の残りの子ら」であることを明確にして始めて、バビロンの諸教会に「バビロンは倒れた」「わたしの民よ、彼女から離れ去って、その罪にあずからないようにし、その災害に巻き込まれないようにせよ」と叫ぶのである。我々は単なるキリスト教の一教派ではない。

これは「過度な選民意識」ではない。過度な選民意識とは、自分たちだけ救われて他を軽蔑する排他的精神である。正しい選民意識がある。それを失ったために多くのセブンスデー・アドベンチストはアイデンティティー（独自性）を失ったのではないだろうか。正しい選民意識について人類のあけぼの下に次のように書いてある：

「イスラエルの政治は、神の名とその権威のもとに行なわれた。モーセと七十人の長老、つかさと士師たちの務めは、単に、神がお与えになった律法を実施することであった。彼らには、国家の法律を制定する権はなかった。これが、イスラエルの国家としての存在のあり方であり、そのように継続すべきものであった。どの時代においても、神の靈感を受けた人々が送られて、民を教え、律法の実施の指示を与えた。

主は、イスラエルが王を要求するようになることを予見なさったが、国家制定の原則が変化することを許可なさらなかった。王は、至高者なる神の代理人であるべきであった。神を国家の首長と認め、神の律法を国の最高の法律として、実施しなければならなかった。

イスラエルの人々が、最初にカナンに定住したとき、彼らは、**神権政治の原則**を認めた。そして、国家は、ヨシユアの指導のもとに繁栄した。しかし、人口の増加と他国との交渉がそれに変化をもたらした。人々は、隣接する異邦の風習を数多くとり入れ、彼ら自身の特異性と清い性質とを大部分犠牲にした。彼らは、徐々に、敬神の念を失い、神の選民であることを誇りとしなくなった。彼らは、異邦の諸王の外見の壮麗さに心をひかれ、自分たちの簡素なことにあき果てた。部族間には、ねたみやそねみが起こった。内部の紛争が、彼らを弱くした。

彼らは、絶えず異邦の敵の侵入の危険にさらされていた。人々は、国家間における彼らの地位を保持するためには、部族を強力な中央政権のもとに統一する必要があると痛感するようになった。彼らは神の律法に従わなくなり、天の神の支配からのがれたいと望んだ。こうして、王を要求する声がイスラエル全土に広がった。」

「イスラエルが最も繁栄した時代は、彼らが、主を彼らの王として認め、神が制定された律

法と統治を、他のすべての国々の統治よりもすぐれたものとみなしたときであった。」人あ
下 265-268

「我々の唯一の安全は神の特殊な民として立つことである。」5 T 7 8

「初代のキリスト者たちは、実際、特殊な民であった。」大争闘上 3 9

「サタンは、神の民と世俗とをへだてている壁を取り壊すことによって、神の民に打ち勝とうと絶えず努めている。」大争闘下 247

「人類の敵がその目的を達成するために着々と働き続けているのに、人々は「寛大」という叫びによって、サタンの策略に目をくらまされている」大争闘下 265

注意:

ローマ・カトリック制度、プロテスタント諸教会組織がバビロンであって、真のプロテスタントは法王制度を嫌悪するが、バビロンには「多くの神の民がいる」（大争闘下 84,92,190）ことを覚えていなければならない。全世界の人を「強力な欺瞞」でとりこにしようとする法王教の悪を暴露するように我々は召されている（牧師への証 117-118、大争闘下 328 参照）。

「祈りをもって聖書を研究するとき、プロテスタントは法王制の本性を知り、法王制を嫌悪しそれを避けるようになる。」大争闘下 330

「政治的また宗教的自由に対するこの最も危険な敵の進出に反対するように、人々は目ざめる必要がある。」大争闘下 322

「神のみ言葉はこのさし迫った危険について警告を与えてきた。これが顧みられないならば、プロテスタントの世界は、ローマ教会の目的が実際に何であったかを知ったときには、もはや手遅れになってそのわなを逃れることができないであろう。」大争闘下 341

「キリストの愛がわたしたちに強く迫って」（Ⅱコリント 5:14）、妥協するのではなく、「イエスにあるがままの真理」を伝え、警告を発しなければならない。

第三天使の使命は、二つの柱で立っている:

1. 恐るべき威嚇の**警告**と
2. すばらしい**希望**—すなわち至聖所のイエスの仲保（初代文集 414～）の使命である。

福音には警告と希望が含まれている（黙示録 14:6）。警告しなかった場合、どんな恐ろしい責めが人々から返ってくるだろうか？（初代文集 455 を参照）。

19. キリストの仲保の働きは再臨まで続くか？恩恵期間で終わるのか？

恵みの期間が閉ざされるとき、キリストの仲保なしに、完全な者として立つことができなければ、悩みの時を通り抜けることはできないといった強調は誤りであるか？

検証:

これは、S先生著、2001年3期、安息日学校聖書研究ガイド、プラスのp64に書いてある。
同じ思想がアドベンチストライフ 1994年11月号 p15のK先生の記事にもある。

「多くの人々は仲保者なしに立つという言葉が誤解していると思います。『仲保者なし』
ということは『救い主なし』という意味ではありません。神のみが完全なお方です。私たちは
この世で神のように罪なき姿になることは決してありません。人類は罪深く、心は破れてい
ます。私たちはいつでも救い主が必要で、再臨のとき、心も体も完全に回復されます。」

誠に巧妙なイエズス会士的な表現である。仲保者なしとは、救い主なしという意味ではない、神の
みが完全である、体の回復は再臨の時だと言って、大事な靈感の真理、すなわち、最後のあがない
で心は完全に回復されて、悩みの時には仲保者なしに立つことの真理を覆すのである。

M先生は「罪と完全について」のプリント p 22 に ST1895年5月23日の引用文を挙げて、ホ
ワイト夫人は「キリストの民のための執り成しの働きは再臨まで止むことがない。」と書かれてい
る。「悩みの時にも本質的な罪や気づかずに犯す罪は問題ではない」と言うのである。罪なき完全
は再臨の時に実現するということを言いたいのである。

「彼(ヨハネ)のメッセージは喜びのメッセージであり、キリストは墓におられるのではなく、
高きに上げられたよみがえられた救い主であり、彼は(キリスト)の民のために彼が再び戻
られ彼の所に連れ帰る時まで、執り成しをなされる方である事実を述べ伝えるのである。」

我々は靈感の書を解釈する時に、一つの重要な原則を覚えていなければならない。

救い主の一つの言葉をもって、他の言葉が無意味にしてはならない。大争闘下 69

1800年代の再臨運動に反対するために、最もひんぱんに持ち出された議論は「その日、その時は
誰も知らない」という聖句であった。どうして1844年に再臨があると時を定める異端を教えるのか
ということであった。

使徒 10:14,15 を読んで神が何でも清めたのだから何でも食べていいと我々は解釈しないはずで
ある。

上記の再臨の時まで執り成しをなされるという表現は証の書に一度だけ出てくる。

「彼(ヨハネ)のメッセージは喜びのメッセージであり、キリストは墓におられるのではなく、
高きに上げられ、よみがえられた救い主であり、彼(キリスト)の民のために、彼が再び戻
られ彼のところに連れ帰る時まで、とりなしをなさる方である事実を述べ伝えるのであ
る。」サインズ 5/23/1895

しかし、他の靈感の書にも耳を傾けよう。そして全体を見て解釈しよう:

「イエスが至聖所から歩いてこられると、衣の鈴が鳴るのが聞こえた。そして外へ出られる
と、暗黒の雲が地上の住民をおおった。その時は、もう、不義な人類と神の怒りとの間には
仲保者がおられない。イエスが神と不義な人類との間に立っておられた時には、地上の
住民は抑制されていた。しかしイエスが、人類と天父との間からしりぞかれた時に、その

抑制はとり除かれ、サタンは、最後まで悔い改めない人々を完全に支配するようになった。イエスが聖所の中で奉仕しておられる間は、七つの災害を地上に注ぐことはできなかった。しかし聖所におけるイエスの働きが終わり、その執り成しが終わると、もう神の怒りをとどめる何もものなく、それは、これまで救いを軽んじ、譴責を憎んできた不義な罪びとの、おおいなき頭上にはげしく破裂した。イエスの執り成しが終わった後の、恐ろしい時に、聖徒たちは、仲保者なしで、聖なる神の御目の前に生きていた。初代文集 452,453

「キリストが恵みの御座の前でしておられる仲保の働きを離れ、刑罰の衣をまとわれるまで続く。教会への勧告下 431

仲保の働きが悩みの時も続き、再臨まで続くと考える人々の言いたいことは次のことを認めたくないのである。

「わたしは、また、悩みの時に、聖所に大祭司がおられないで神のみ前に生きるためにはどのような状態でなければならないかを悟っていない人が多くあるのを見た。生ける神の印を受け、悩みの時に保護される人々は、イエスのかたちを完全に反映していなければならない。

わたしは、多くの人々が、必要な準備をおろそかにしていながら、主の日に立ち得て神のみ前に生きるにふさわしいものとなるために、『慰めの時』と『春の雨』(後の雨)とを待っているのを見た。ああ、わたしは、なんと多くの人々が、悩みの時に、避け所がないのを見たことだろう。彼らは必要な準備を怠った。だから、彼らは、聖なる神の前に生きるのに適したものと彼らをするためにすべての者が持たなければならない慰めを、受けることができなかった。預言者に切り刻まれることを拒み、すべての真理に従って、魂を清めることをしない者、そして、自分たちは、実際よりは、はるかによい状態にあると思込んでいる人々は、災害がくだるときになって、自分たちが建物に合わせて切り刻まれ、四角にされなければならないことを悟るのである。しかし、その時には、そうする時間もなく、天の父の前で彼らの執り成しをしてくださる仲保者もおられない。」初代文集 149

「『かつてなかったほどの悩みの時』が、まもなくわれわれの前に展開する。それだからわれわれには、一つの経験—今われわれが持っておらず、また多くの者が怠けて持とうとしない経験—が必要なのである。現実の困難というものは、予想したほどではないということがしばしばある。しかし、われわれの前にある危機の場合は、そうではない。どんなに生々しく描写しても、この試練の激しさには、とうてい及ばない。この試練の時に、人間は、みな、自分で神の前に立たなければならない。『主なる神は言われる、わたしは生きている、たといノア、ダニエル、ヨブがそこにいても、彼らはそのおすこ娘を救うことができない。ただその義によって自分の命を救いうるのみである』(エゼキエル書 14:20)。

今、われわれの大祭司がわれわれのために贖いをしておられる間に、われわれは、キリストにあって完全になることを求めなければならない。救い主は、その思いにおいてさえ、誘惑の力に屈服されなかった。サタンは、人々の心の中に、なんらかの足場を見つける。心の中に罪の欲望があると、サタンはそれを用いて誘惑の力を表わす。しかし、キリストはご自身について、『この世の君が来る。だが、彼はわたしに対して、なんの力もない』と宣言された(ヨハネ 14:30)。サタンは、神の子の中に、彼に勝利を得させるなんのすきも見つけることができなかった。神のみ子は、天父の戒めを守られた。そして、サタンが自分に有利に活用することのできる罪が、彼の中にはなかった。これが、悩みの時を耐えぬく人々のうちになければならない状態なのである。」大争闘下 396,397

これらの誤りはどこからくるのだろうか？それはなぜ、イエスは聖所から至聖所に入られたかと

いう理解がないこと、死んで主を迎えることと、生きて主を迎えることとの違いを理解しないことからきているのである。

20. 後の雨／大いなる叫びが今あるところでは起こっている。日曜休業令に備えさせるために降るのか？

検証:

セブンスデー・アドベンチスト改革運動教会にも我がセブンスデー・アドベンチスト教会内にも混乱がある。後の雨を日曜休業令の前に置くのと日曜休業令の後に置く意見がある。

タイミングはどうでもいいことだろうか。神はそのタイミングについて明らかな啓示を与えておられるだろうか。もし、神が明らかに啓示されておられるなら、タイミングを間違えたら救いに関わってくるのではないだろうか。

「おまえとその内にいる子らとを地に打ち倒し、城内の一つの石も他の石の上に残して置かない日が来るであろう。それは、おまえが神のおとずれの時を知らないでいたからである。」ルカ 19:44

「彼が来られるその日、その時はだれも知らないが、われわれは、それが近づくと時について教えられており、また、それを知るように求められている。さらにまた、神の警告を無視し、主の再臨が近いことを知ることを拒み、またおろそかにすることは、ノアの時代の人々が洪水の来るのを知らなかったのと同様に、われわれにとっても致命的であることが教えられている。」大争闘下 69

「人間は、神があわれみのうちにお与えになった警告を拒否して無事ではあり得ない。ノアの時代に天からの使命が世に送られた。そして、彼らの救いは、彼らがその使命をどう受けるかにかかっていた。彼らが警告を拒否したために、神の霊は罪深い人類から退き、彼らは洪水によって滅びた。アブラハムの時代に、恵みは、ソドムの邪悪な住民に訴えることをやめた。そして、ロトと彼の妻と二人の娘のほかは、みな、天から降った火で焼き尽くされた。キリストの時代でもそうであった。神のみ子は、その時代の不信なユダヤ人に、「おまえたちの家は見捨てられてしまう」と言われた（マタイ 23:38）。同じ無限の力のおかたは、最後の時代をながめて、「自分らの救となるべき真理に対する愛を受けいれなかった」者について、「そこで神は、彼らが偽りを信じるように、迷わす力を送り、こうして、真理を信じないで不義を喜んでいたすべての人を、さばくのである」と宣言しておられる（テサロニケ第二 2:10-12）。彼らが神の言葉の教えを拒否するときに、神はみ霊を取り去って、彼らを、彼らが好む惑わしのなかに捨てておかれる。」大争闘下 149

では、後の雨／大いなる叫びは日曜休業令に備えるために成就するのだろうか。

1992年ウィリアム・ギャリー先生が小グループの指導に来られことがあった。K先生との対談で次のような発言をされた。

「私たちは日曜休業令が国際的に発布される前にでも、後の雨の祝福にあずかることができるのである。なぜなら、日休業令のときの危機に備えをする必要があるからである。...

世界各地で神の霊の力によって目覚ましい伝道の働きがなされている。これがまさに後の雨の結果なのである。」 アドベンチスト・ライフ 1992年7月号

後の雨がすでに降っていると言った指導者たちが何人か現れたことは事実である。

大争闘下 218 に次のように書いてある:

1. 調査審判と罪の除去

調査審判と罪をぬぐい去る働きは、主の再臨の前に完了しなければならない。死者は、書物に記録されたことによって裁かれるのであるから、彼らが調査されるその審判が終わるまでは、彼らの罪はぬぐい去られることはできない。しかし、使徒ペテロは、はっきりと、信者の罪は、「主のみ前から慰め〔原文では refreshing (活気づけ、回復の意)〕の時が」くるときにぬぐい去られる。そして、「キリストなるイエスを、神がつかわして下さる」と言っている（使徒行伝 3:19 参照。同 20 節）。調査審判が終わると、キリストは来られる。そして、たずさえて来た報いを、それぞれの人の行ないにしたがってお与えになるのである。」

※ 1888年版では、〔調査審判において〕と付加されている。

「主のみ前から慰めの時がきて」というのは、ギリシャ語では「慰め(活気、回復)のために、in order that refreshing」となっている。

つまり、使徒行伝 3:19 の事件の順序はこうなる:

1. 悔い改めと回心（調査審判の）一何のために？ → 罪が拭い去られるために。
2. 罪の除去（罪を思い出さなくなる）一何のために？ → 後の雨が注がれるために。
3. 後の雨（大争闘下 382）一何のために？ → キリスト再臨に備えるために。
4. キリストの再臨 一何のために？ → 永遠のみ国に連れて行くために。

後の雨は、さばきや日曜休業令や大いなる叫びに備えさせるものではない。では何に備えさせるのであろうか？

「その時に、『後の雨』すなわち、主のみ前から慰めの時が来て、第三天使の大きな声に力をそえる。そして、最後の災害が下る時に、聖徒たちが立つことができるように準備を与える。」初代文集 173

「この天使の働き（黙 18:1）は、最後の大いなる働きにおいて第三天使の使命が大いなる叫びとなって盛り上がるちょうどその時に始められる。神の民はこのようにして、まもなく遭わねばならない誘惑の時に立つ準備ができるのである。」初代文集 448

「神の民には天来の力がやどり、彼らは働きを完成して、目の前の試練の時に対する備えができていた。彼らは、後の雨、すなわち神のみ前より来る慰めを受け、生ける証が復活していた。」初代文集 451 ※目の前の試練とは、大いなる悩みの時のこと。大争闘下 385

「... 彼らは後の雨を受けて、そして昇天に適する者となった（用意ができた）。」1T187

「季節の終わり近くに降る後の雨は、穀物を熟させ、刈り入れに備える（再臨のこと）。」TM506、黙 14:14

「後の雨が... 教会を人の子の来臨に備えるのである。」JTM506

「彼らは、聖なる神の前に生きるのに適した者とするために、... 慰め(後の雨)を受けることができなかった。」初代文集 149

「第三天使の使命が大きな叫びへと高まり、大きな力と栄光が最後の働きに伴うにつれて、忠実な民はその栄光にあずかるであろう。それが彼らを生き返らせ、悩みの時を通過させるために力を与える後の雨である。」J7BC 984(スタディバイブル新 594)

後の雨は、死なないで大いなる悩み(七つの災害)を経験し、生きてキリストの再臨を迎える備えのためである。

1. 後の雨は罪が除去されてから聖霊に満たされる経験である。
2. 罪が除去されるのは調査審判の時である。
3. 後の雨は生きて主を迎える人々の経験だから、生きている間に調査審判を経験する。
4. 生ける者のさばきは、日曜休業令から始まる。(この証明は 21 番で扱う)
5. 故に、後の雨は日曜休業令の後に降るのである。

2. 黙示録 18:1 大いなるみ使いの栄光＝大いなる叫び

後の雨と大いなる叫びとは切り離せない同じ事件である。イエスが天父の栄光を現したのは、聖霊に満たされていたからである。神の民が栄光で充たされてイエスのみ像を完全に反映するのは、聖霊—後の雨に満たされるからである。大いなる叫びは後の雨による(初代文集 440)。それが全地を照らす栄光なのである。

「第三天使の使命も、このようにして宣布される。それが非常な力で伝えられる時が来るならば、主は謙遜な器を通して働かれ、主の奉仕に献身した人々の心を導かれる。働き人は、学歴ではなくて、聖霊を注がれることによって資格を与えられる。信仰と祈りの人は、聖なる熱意に燃えて出て行き、神から与えられる言葉を宣言せざるをえなくなる。バビロンの罪は暴露される。教会の法令を政権によって強制することの恐るべき結果、心霊術の侵入、法王権のひそかではあるが急速な発展などが、みな暴露される。」大争闘下 376

大争闘下 376、377 によると大いなる叫びがなされてから日曜休業令が発布されるのではないか？

そう解釈するのは、セブンスデー・アドベンチスト改革教会ばかりではない。

後の雨／大いなる叫びの後に日曜休業令が発布されると証明するために、大争闘下 377 を引用する。「日曜休業運動が、ますます大胆に、ますます断固として推進されるにつれて、戒めを守る人々に対して法令が発布される。」これは、376 頁の後の雨による大いなる叫びの後に起こると主張するのである。この法令が発布されるという言葉は、invoke(インボーク)という言葉で、法の力に訴える、効を発する、履行するという意味である。つまり、日曜休業令はすでに発布されていて(enact 発布する、制定する)、争闘が新しい分野に及ぶにつれ、すでに制定された法律に訴えるという意味である。大争闘下 36 章でそれは制定されていて、38 章は大いなる叫びを描写しているのである。

黙示録 18:1-5 の文脈

黙示録 18:1「地が彼の栄光によってあかるくされる」のは、大いなるバビロンが完全に倒れてから(道徳的墮落)、ローマが全世界を支配してからのことである。

『彼女の罪は積み積って天に達しており、神はその不義の行いを覚えておられる』と宣言されている(黙示録 18:5)。バビロンはその罪のます目を満ちし、破滅するばかりになっている。しかし神は、まだバビロンの中にご自分の民を持っておられる。そして、神の刑罰が下る前に、これらの忠実な人々を呼び出して、彼らがその罪にあずからず、『その災害に巻き込まれないように』しなければならないのである。そこで(hence ここから)、この天使一天から下って来、栄光をもって地を照らし、力強い声でバビロンの罪を知らせる天使一によって象徴されているところの運動が起こる。」大争闘下 372

3. 黙示録 13:11-18

アメリカ合衆国において日曜休業令が先に発布される。何が日曜休業令に導くのであろうか。13節の偽リバイバル—偽後の雨である。本当の後の雨のことは書いていない。大争闘下 350-357 を読んでいただきたい。三重の結合(ローマ、プロテスタント、心霊術)の華々しい合同運動によって、日曜日遵守を強制する法律を求めるように宗教界の指導者が働き、大衆が扇動され、大衆の要求に為政者が屈服するのである(大争闘下 349,350,357)。

大争闘下 190,191 にこの偽大リバイバルについてこう書いてある:(初代文集 424 も参照)

「魂の敵は、この働きを妨害しようとする。そして、こうした運動が起こる前に、偽物を提示することによってそれを妨害しようとする。彼は、自分の欺瞞の力のもとに置くことのできる諸教会において、神の特別な祝福が注がれているかのように見せかける。」

大いなる宗教的関心と思われるものが現われる。多くの人々は、神が彼らのために驚くべきことをしておられると喜ぶが、それは、別の霊の働きなのである。宗教的装いのもとに、サタンは、キリスト教世界に自分の勢力を広げようとする。」

アメリカの道徳退廃、災害の続発、経済不況、偽リバイバル(大争闘下 350-351)が、日曜休業令の必要を説く世論を作り、為政者はついに屈服するのである(大争闘下 357)。これが第 36 章である。その時、神は後の雨／大いなる叫び(第 38 章)をもって介入なさるのである。

ダニエル 11:40-44

ダニエルの終わりの時の預言でも、北の王(ローマ法王)が全世界を制覇したときに「東と北からの知らせ」、すなわち日の出る方からの神の印と北の方、神のみ座からの後の雨によって大いなる叫びがなされるのである。

イザヤ 59:19-60:3 敵が押し寄せて来る時、主の霊は旗を掲げるのである。

詩篇 119:126 「彼らはあなたのおきてを破りました。今は主のはたらかれる時です。」

人間の窮地は神の好機であることが歴史の中に幾度も表されてきた。

「神は...事態が危機におちいるのをお許しになる。」実物教訓 159

「この国は法律家たちによってプロテスタントの原則を放棄し、神の律法を踏みにじることによってローマのように背教する。その時、罪の人(不法の者)の最後の働きが現されるであろう。プロテスタントはその感化と力を法王教側に投げすて、偽りの安息日を、国家権力によって強要するであろう。彼らはローマの腐敗した信仰に生命と活力を与え、その暴政と圧制を復活するであろう。その時、ご自分の真理を擁護なさるために大いなる力を持って働かれる時である。.....その時、神の民の窮地は、天と地の統治者は誰であるかが示されるチャンスである。」サインズ 6/12/1893

黙示録 13 章によると日曜休業令の前に偽リバイバルが起こり、それが日曜休業令へと導くのである。大争闘下 348-357 によると、決して本物の後の雨／大いなる叫びが日曜休業令に備えるのではない。

21. 生ける者のさばきに移る時は誰も知らないはずだ。どうして日曜休業令から始まると言えるのか？

検証:

大争闘下 224 に次のように書いている:

「審判は今、天の聖所において進行中である。長年にわたって、この働きは続けられてきた。間もなく—その時がいつかはだれも知らないが—生きている人々の番になる。」

だから、生ける者のさばきにいつ移るか誰も知らないと主張する人たちがいる。勿論、その日、その時は誰も知らない。1844 年 10 月 22 日のように何年何月何日とは誰も知らない。そのような (definite time, 特定の時) はそれ以後はないと預言者は言っている(1 SM 1 8 8)。日曜休業令が何年何月何日に発布されるか誰も分からない。

「この警告を心にとめている者は、暗黒のうちに取り残され、その日が不意に彼らを襲うことはない。しかし、目をさましていない者にとっては、「主の日は盗人が夜くるように来る」のである (テサロニケ第一 5:2,3-5 参照)。」大争闘上 27

まず、誤訳から指摘しよう。原文では how soon 「どれほどすみやかに生ける人の番になるか分からない」となっている。「いつ生ける者の番になるかは誰も知らない」という意味ではない。

「間もなく」ということは、大争闘の本が預言者によって最後にチェックされた時は、1911 年であった。ということは、1911 年の時点でまだ生ける者のさばきに移っていなかったのである。「間もなく」ということは未来を指している。

主の僕は生ける者のさばきは、いつも未来においている:

「今や、まもなく生ける者のさばきという大いなる働きが始まろうとしている時に (is about to begin)、我々の清められないままの野心が心を占領し、この危機に備える必要な教育を怠るように導かれていだろうか？ どの場合においても、獣の刻印、あるいはその像を受ける(shall 未来)か、それとも神の印を受けるか(shall 未来)という一大決心がなされなければならない(is to be made 未来)。」6T 130,1900 年

日曜休業令から生ける者のさばきが始まることが次の文で明確であろう。

「両方とも収穫まで育つままにせよ。その時、主が毒麦を集めて焼き、また麦を天の倉に集めるためにご自分の刈り取る者を送られる。さばきの時は最も厳粛な時である。その時に主はご自分の民を毒麦から集められる。同じ家族の者が分かたれる。義人には印が与えられるであろう。…交わっていた者(悪人)は神からの永遠の分離の印が押されるであろう。」ITM 234,235

この分離のときというのは、日曜休業令の時である。神の印が、獣の刻印を受ける最後のテストのときである (大争闘下 374,375)。

論理的に考えても分かる:

- ① 永遠に運命が決定されるのはさばきにおいてである。
- ② 日曜休業令において神の民の運命が永遠に決定される。

「主は私に、恵みの期間が閉じられる前に、獣の像が形作られるということをはっきり示された。なぜなら、それは神の民のための大いなるテストだからである。それによって彼らの永遠の運命が決定されるであろう。… [黙 13: 11-17 を引用] …

これは神の民が印される前に受けなければならないテストである。」Letter 11,1890 スタ
ディバイブル (新) 585,586

- ③ 故に生ける者のさばきは日曜休業令から平行して始まる。

生ける者のさばきについての全く根拠のないうわさ。

「去年の冬(1888 - 1889)、ミネアポリス総会の間、わたしは次のよううわさを聞いた。『ホホワイト夫人は、1844 年以来死んだ義人のさばきが続いていたが、今や生ける者に移ったことを示された』と。このうわさは真実ではない。同じよううわさが、約 2 年間も広まっていた。スイスのバーゼルからカリフォルニアの牧師にあてて手紙を書いた。要点は次のようなことであった。『死んだ義人のさばきが 40 年以上も続いてきた。それが生ける者にどれほど速やかに移るかは、我々は分からない』と。手紙はいろいろな人に読まれ、不注意に聞いた者たちが生ける者のさばきに移ったと聞きまちがえて伝え始めた。これがことの始まりである。うわさはミネアポリスから、また手紙の引用から、同じ影響を及ぼした。これほどはなほだしい根拠のないうわさはない。』1888,E・G・ホホワイト資料 323



「生ける者のさばきが日曜休業令から始まると証の書に書いてあるのですか」との質問は何回も聞かれる。

そういう言葉の使い方は聖書と証の書のどこにもない。しかし、その真理は説明してきた通りハッキリしている。「三位一体」という言葉は聖書のどこにもない。「安息日は第七日目の土曜日である」とは聖書に書かれていない。「1844 年 10 月 22 日からあがないの日が始まった」とはどこにも書いてない。

22. 144,000 の印される働きは 1844 年から始まったか？

検証:

1844 年から 144,000 の神の印が始まったとする SDA 改革教会は次の言葉を引用する:

「わたしは、第三天使を見た。わたしと一緒にいた天使は言った。『彼の任務は、恐るべき任務である。彼は、麦を天の倉に入れるために、麦を毒麦からよりわけて印をおし、たばねる。われわれは、こうしたことに全身全霊をかたむけ、すべての注意を向けなければな

らない』。初代文集 221 第三天使の使命は 1844 年から始まった。

エゼキエル 20:20 安息日は神のしるし(印)

「彼らは、第四条の安息日が生ける神の印であることを知る。」大争闘下 418

したがって、1844 年から安息日の真理を受け入れた者は、生ける神の印を受け、144,000 を構成するのだと結論づける。

検証:

主の僕は 144,000 について次のように言っている:

「み言葉の中で教えられていないこと、彼の民が推測しなければならないことを提示するのは、神のご計画ではない。霊的に彼らの助けにならないような問題、**144,000** を構成しているのは誰であろうかというような問題について、彼らが論争するようになるのは、神のみ心ではない。神の選ばれたこれらの人々が誰であるかは、近いうちに疑いもなく分かるであろう。」 MS 26,1901 (スタディバイブル新 588)

1. 第三天使の使命には、獣とその像とその刻印に対する警告が含まれている。しかし、獣の刻印か神の印かのテストは 1844 年から始まっているだろうか。大争闘下 374-375 にこう書いてある:

「各世界は、恐ろしい結果をもたらす問題に直面しようとしている。地の権力者たちは、合同して神の戒めに逆らって戦い、「小さき者にも、大いなる者にも、富める者にも、貧しき者にも、自由人にも、奴隷にも、すべての人々に」、偽りの安息日を守ることによって教会の習慣に従うよう命じるのである(黙示録 13:16)。これに従わない者はすべて、法律上の刑罰を受ける。そして、ついには、彼らは死刑に値する者であると宣告される。他方、創造主の安息日を守ることを命じる神の律法は、それに対する服従を要求し、その戒めを犯すすべての者に神の怒りを警告する。

こうして問題点が明らかに示されるとともに、だれでも神の律法をふみにじって人間の法令に従うものは、獣の刻印を受ける。彼は、神の代わりに服従することを選んだその権力に対する忠誠のしるしを受けるのである。....

安息日は、特に論争点となっている真理であるから、忠誠の大試金石となる。最後のテストが人々を襲うとき、神に仕える者と神に仕えない者の区別が明らかになる。第四条の戒めに反して、国家の法律に従って偽りの安息日を守ることは、神に敵対する権力に忠誠を尽くすという表明であり、一方、神の戒めに従って真の安息日を守ることは、創造主に對する忠誠の証拠である。一方は、地上の権力に服従するしるしを受け入れることによって、獣の刻印を受け、他方は、神の権威に対する忠誠のしるしを選んで、神の印を受けるのである。」

救い主の一つの言葉をもって、他の言葉を無意味にしてはならない。大争闘下 69

2. 第三天使の使命は確かに 1844 年からはじまった。しかし、麦を毒麦からよりわけて印をおす働きも始まったのであろうか。いつ麦と毒麦が分かたれるのであろうか?

「両方とも収穫まで育つままにせよ。その時、主が毒麦を集めて焼き、また麦を天の倉に集め

るためにご自分の刈り取る者を送られる。さばきの時は最も厳粛な時である。その時に主はご自分の民を毒麦から集められる。同じ家族の者が分かたれる。義人には印が与えられるであろう。…交わっていた者(悪人)は神からの永遠の分離の印が押されるであろう。JTM 234,235

観察:

1. 麦と毒麦は収穫の時まで育つ。
2. 義人は神の印、悪人は分離の印を受ける。

収穫の時とはいつのことだろうか？

「すべての魂にテストがやってくる時は、そう遠くはない。獣の刻印が我々に強要されるであろう。……この時、教会の中で金が金屑から分かたれるであろう。」5 T81

3. 日曜休業令が出てから神の民は印される。

「主は私に、恵みの期間が閉じられる前に、獣の像が形作られるということをはっきり示された。なぜなら、それは神の民のための大いなるテストだからである。それによって彼らの永遠の運命が決定されるであろう。… [黙 13: 11-17 を引用] …

「これは神の民が印される前に受けなければならないテストである。」 Letter 11,1890 (スタディバイブル新 585,586)

「兄弟方よ、この備えの大いなる働きの際にあなたがたは何をしているだろうか？世と結合している者たちは、世の型を受け、獣の刻印に備えているのである。自己に頼らないで神のみ前で謙遜に、真理に従って魂を清める者は、天の型を受け、彼らの額に神の印を受ける準備をしているのである。法令が発布されて印が押される時、彼らの品性は永遠に清く、しみのない者となるであろう。」5T216

「今や、まもなく生ける者のさばきという大いなる働きが始まろうとしている時に (is about to begin)、我々の清められないままの野心が心を占領し、この危機に備える必要な教育を怠るように導かれていだろうか？ どの場合においても、獣の刻印、あるいはその像を受ける(shall 未来)か、それとも神の印を受けるか(shall 未来)という一大決心がなされなければならない(is to be made 未来)。」6 T130,1900 年

「獣とその像のしるしを拒む者たちに救出のしるしが与えられるであろう。」 5T451,452

「最後の試み(テスト)が世界に臨み、神の戒めに忠実であることを示した者はみな『生ける神の印』を受けたのである。」大争闘下 385,386

国と指導者下巻 193-196をよく読んでいただきたい:

1. 近い将来、人間の布告(日曜休業令)に服従するように要求される。(p193)
2. 神の民は深い内的苦悩に入る。今にも絶望するばかりである。
3. 神の民は神の前で心を悩まし、心が純潔になることを嘆願する。(p196)
4. 罪が除去される。
5. 栄光の衣が着せられ、世俗の腐敗に二度と汚されることがない、誘惑者の計略から永遠に安全な者となる。
6. 天使が生ける神の印を押す。144,000の誕生。

獣の刻印または、神の印を受けている者はまだ誰もいない！今、我々はどちらの印を受けるといふ事件に準備をしているのである！

「兄弟方、あなた方は大いなる準備の働きにおいて何をしているだろうか。世と妥協している者は、世の型を受け、獣の刻印を受ける準備をしている。自己に頼らないで神の前で謙遜に、真理に従って魂を清める者は、天の型を受け、彼らの額に神の印を受ける準備をしている。法令が発布されて印が押される時、彼らの品性は永遠に清く、しみのないものとなるのである。」5 T 216

観察:

1. 獣の像は大いなるテスト。永遠の運命を決定する事件である。
2. 神の民が印される前に受けるテスト。
3. 法令が発布される時は印される時であり、印された神の民の品性は永遠に清く、しみがない。
1844 年以来、安息日を受け入れて死んだ義人たちは、その品性が完成されていたであろうか。彼らは「死んで後、さばきを受け」(ヘブル 9:27)、さばきの時に罪は除去される。彼らは「キリストに似た者となって」よみがえる(1 ヨハネ 3:2)。
4. 生きて主を迎える者たちは、生きている間にさばきを受け、罪の除去を経験し、死なずして仲保者なしぬ悩みの時を生き抜くのである (大争闘下 386)。
5. 日曜休業令から生ける者のさばきが始まる。それは獣の刻印を受けるか、神の印を受けるかの運命を決する。したがって日曜休業令と生ける者のさばきは平行する事件であると考えられる。
6. 今、生ける神の印を受けている者は誰もいない。受ける準備をしているのである。

23. 証の書に 1844 年以来三天使の使命、安息日を受け入れた者が印されたと書いてある。死んだ義人たちも含まれる。

検証:

ある人たちは、証の書に次のような証拠があると言うのである:

- ハスティングス夫人は印された。
- 90 歳以上の老人たちが印された。
- ジェームス・ホワイトの言明。
- ラフボロウの言明。

これらの証拠といわれている文章を検証しよう。

改革教会の用いる引用文:

- ① 「わたしは彼女 (ハスティングス夫人) が印されたこと、また神の声でよみがえり、地の上に立って、14万4千と共にいるのを見た。彼女のために悲しむ必要はない。彼女は悩みの時の間休むのである。ただ我々にとって悲しいのは、彼女が我々の仲間から去っていったことである」2 SM263
- ② 「地上には 90 歳を過ぎた人々 が生きている。当然の結果として、老齢の彼らには弱さが見られる。しかし、彼らは神を信じ、神は彼ら愛しておられる。神の印が彼らの上に押されている。彼らは、主が「主にあって死ぬ死人はさいわいである」と言われた者のう

ちに数えられるであろう。彼らはパウロと共に、「わたしは戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした。今や、義の冠がわたしを待っているばかりである。かの日には、公平な審判者である主が、それを授けて下さるであろう。わたしばかりではなく、主の出現を心から待ち望んでいたすべての人にも授けて下さるであろう」と言うことができる。戦いをりっぱに戦いぬき、信仰を守りとおした故に、主が尊ばれる多くの白髪の人々がいる (Letter 207, 1899 年)。

③ 「次に、わたしは、第三天使を見た。わたしと一緒にいた天使は言った。「彼の任務は、恐るべき任務である。彼は、麦を天の倉に入れるために、麦を毒麦からよりわけて印をおし、たばねる。われわれは、こうしたことに全身全霊をかたむけ、すべての注意を向けなければならない。」 初代文集 221

④ 「第三天使の使命を受け入れて死んだ人たちは **144,000** の一部であり、この人たち以外に **144,000** があるのではなく、彼らはその数を満たすのである。彼らはキリストの再臨の直前に朽ちる命をもってよみがえらされて、キリストの再臨の時朽ちない命に変えられるのである。」ジェームズ・ホワイト RH9/23/1880 by James White.

⑤ 「よみがえった安息日遵守者たちが **144,000** の中に数えられるということになお疑いが残るのなら、1909 年にホワイト姉妹が語られた次の言葉を考えてみてください。1909 年の世界総会の時にアーヴィン長老はホワイト姉妹を訪ねるのに、速記者を一人同行させた。彼は彼女に、幾つか尋ねたいことがあったのであるが、質問の言葉を正確に残したかったし、解答についても正確な記録が欲しいと考えたのである。いくつかの質問事項の中に、このようなやりとりがあった。『この使命の下に亡くなった人も、**144,000** に入るのですか？』ホワイト姉妹は答えて言われた。『ええ、そうですとも、信仰を持って亡くなられた方々は **144,000** の中に入るのです。このことについてはっきり申し上げます。』以上のことは、アーヴィン兄弟が速記者記録から、わたしに写してもよいとおっしゃった質問と答えそのままのものである。」 Questions on the sealing message by John Norton Loughborough 17)

⑥ 「印する時は、非常に短くやがて過ぎ去ってしまう。四人の天使が四方の風を引き止めている今こそ、われわれの召しと選びとを確かなものにする時である。」 初代文集 130

検証 :

①②に対する反論:

主の僕は確かに、印された人々がいると書いている。しかし、同時に「法令が出て印される」「神の民が印される前に獣の像が立つ」とも言っている。

救い主の一つの言葉をもって、他の言葉を無意味にしてはならない。大争闘下 69

霊感の言葉は矛盾するはずがない。144,000 の受ける神の印について大争闘下 430-431 に次のように書いている:

「み座の前の、水晶のように透きとおった海、あの、火のまじったガラスの海—神の栄光でまばゆく輝いているところの一の上に、『獣とその像とその名の数字とにうち勝った人々が』集まっている。シオンの山の小羊とともに、人々の間から贖われた彼ら、すなわち、**144,000** が、『神の立琴を手にして』立つのである。また、大水のとどろきのような、激し

い雷鳴のような、『琴をひく人が立琴をひく音』のようなものが聞こえる。

そして、彼らは、み座の前で新しい歌をうたう。この歌は、144,000 以外のものは、だれも学ぶことができない。それは、モーセと小羊の歌、すなわち、救いの歌である。**144,000**のほかは、だれもその歌を学ぶことができない。なぜなら、それは彼らの体験—他のどの群れもしたことのない体験—の歌だからである。

……

彼らは、地上から、生きている者の間から、天に移された者たちで、『神と小羊とにささげられる初穂』とみなされる(黙示録 15:2,3 ; 14:1-5)。

『彼らは大きな患難をとあってきた人たちであって』、国が始まって以来かつてなかったほどの悩みの時を通過してきた。彼らは、ヤコブの悩みの時の苦しみに耐えた。

彼らは、神の最後の刑罰がくだる中を、仲保者なしで立った。しかし彼らは、『その衣を小羊の血で洗い、それを白くした』ために、救われた。『彼らの口には偽りがなく、彼らは神の前に、傷のない者であった。』『それだから彼らは、神の御座の前におり、昼も夜もその聖所で神に仕えているのである。』

御座にいますかたは、彼らの上に幕屋を張って共に住まわれるであろう。』彼らは、地上が飢饉と疫病で荒廃し、太陽が激しい熱で人々を焼くのを目撃した。そして、彼ら自身も、苦しみ、飢えかわいたのであった。しかし、『彼らは、もはや飢えることがなく、かわくこともない。太陽も炎暑も、彼らを侵すことはない。御座の正面にいます小羊は彼らの牧者となって、いのちの水の泉に導いて下さるであろう。また神は、彼らの目から涙をことごとくぬぐいにとって下さるであろう』(黙示録 7:14-17)。」

観察:

1. 144,000 は日曜休業令(獣とその像)の事件を経験するグループである。
2. この地上でどの群れも経験したことのない体験をする。
3. 生きて主を迎える人々である。
4. 悩みの時仲保者なくして立つ人々である。
5. 七つの災害を通過する人々である。

1844 年以来、三天使の指名を受け入れて死んだ人々が神の印を受けたとするのはこの 5 つの条項から確実にはずれる。彼らは 144,000 の中に入れたいことは明確ではないか。

では、なぜ、主の僕は、彼らは神の印を受けたと言っているのでしょうか。先の雨の印であるに違いない。

「あなたがたもまた、キリストにあって、真理の言葉、すなわち、あなたがたの救の福音を聞き、また、彼を信じた結果、約束された聖霊の証印をおされたのである。」 エペソ 1:13

「あなたがたは、あがないの日のために、聖霊の証印を受けたのである。」 同 4:30

先の雨は死んで主を迎えさせる準備をさせる。

後の雨は、

1. 完全な品性のしるしである。(RH6/10/1902) スタディバイブル新 426、TM506
2. 大いなる悩みに備えさせる。初代文集 148-149
3. 仲保者なしに神の前に立ち得るようにする。大争闘下 141
4. 全能者の覆いとなって大いなる悩みの日に守る。初代文集 108-109

③はすでに答えた。

④はジェームス・ホワイトの言葉としているが、ホワイト刊行協会に問い合わせてみたら、ユライヤ・スミスの言葉だそうだ。たといのジェームス・ホワイトが言ったとしても、預言者の言葉と矛盾するならば証拠として使うべきではない。1844年以來死んだ義人たちは、特別な復活の時に朽ちる体でよみがえるのではない。大争闘下 415に「第三天使の使命を信じて死んだ者はみな、栄化されて墓から現れる」と書いてある。

⑤ラフボロウ長老の言葉についてホワイト刊行協会に問い合わせた。

次のような返事が届いた：

「1914年にラフボロウ長老は、そのパンフレットに次のように書いている。論争点になっていることに関して発行者は彼らの印刷物に載せてほしくないと言っている。彼は確かに三天使の使命を信じた者たちは、第六の災いの時によみがえって死の法令から救出される者の仲間に入ると言っている。そして1909年の世界総会の時にホワイト夫人との会話が速記されているもののなかに残っている。その18頁から：

『質問の一つはこれである。「三天使の使命の中に死んだ者たちは、144,000に入りますか？」ホワイト姉が答えて「ああ、そうです。信仰のうちに死んだ者たちは、144,000のうちに入りますよ。それに関しては、わたしははっきりしています。」これは質疑応答のときの正確な言葉です。アービン兄弟からその速記の報告を写させてもらったのです。』これは、大争闘下巻のことと相反するものである。たといホワイト夫人が言ったそうだといいうことでも、書かれている靈感の言葉に照らさなければならない。」と。

ホワイト夫人が言ったということがとんでもないうわさとなって語り伝えられることはわざわざである。生ける者のさばきについての全く根拠のないうわさが広がっていたことを21番で述べた。

- 1) 啓示された証拠にまず立つことが重要である。
- 2) 自分の考えを支持する言葉を探すのではない。聖書も証の書も自分の考えを支持する言葉を見つけようと思えばいくらでも不適當な引用ができるものである。

⑥「印する時は、非常に短くやがて過ぎ去ってしまう。四人の天使が四方の風を引き止めている今こそ、われわれの召しと選びとを確かなものにする時である。」初代文集 130

この文章は、1844年から印する働きが進行していて、やがて終わってしまうと解するのである。「印する時は非常に短い」。日曜休業令がいったん始まると後の雨—大いなる叫びで、山火事のような速さ、稲妻のような速さで終わると預言者は言っている。その「印する時」は延ばされている

のである(FLB288)。“will soon be over”の soon はこの場合は「速やかに」という意味である。七つの災害、あるいは日曜休業令による迫害は、速やかに過ぎ去ってしまうであろうという場合、日曜休業令はもう始まっているという意味ではない。

24. 144,000 は 1844 年から印された字義どおりの数であろうか？

「わたしは天使たちが、天をあちこちと飛びまわっているのを見た。墨入れを持ったひとりの天使が、地上から帰ってきて、自分の働きの終わったことを報告した。そこで聖徒の数が**かぞえられて封印された。**」初代文集 452

検証:

もし **144,000** を字義通りの人数であるとするなら、黙示録 7 章の各部族からの 1 万 2 千人も字義通りとしなければならないのではないだろうか？我々は真のイスラエルが字義通りのイスラエル民族であるとは、新約聖書で教えていないことを知っている。真のイスラエルとは、アブラハムの信仰を持ち、新しい契約にあずかる人々である。

次の引用文を見ると **144,000** は字義通りの数のように見える。初代文集 63,64:

「やがてわれわれは(付録参照)、多くの水の音のような神の声を聞いた。その声が、イエスの再臨の日と時とをわれわれに知らせた。**144,000(in number)**の生きている聖徒たちは、その声を知って理解したが、悪人たちは、それを雷鳴と地震だと思った。」

ある人たちは、これは特別な復活の後のことなので生きて主を迎える人々と特別な復活にあずかる者たち合わせて **144,000** とする。

初代文集の初期の頃の幻は詳細を説明していない。来るべき事件を簡単なわずかな言葉で描写しているのである。聖書にもそういうことがある。例えば、ヨハネ 5:28,29 を見てみよう。

「このことを驚くには及ばない。墓の中にいる者たちがみな神の子の声を聞き、善をおこなった人々は、生命を受けるためによみがえり、悪をおこなった人々は、さばきを受けるためによみがえって、それぞれ出てくる時が来るであろう。」

この聖句だけを見ると、義人たちの復活も悪人の復活も同じ時に起こるように見える。しかし、黙示録 20 章を研究すると善人と悪人の復活には 1 千年の隔りがあることが分かる。初代文集のこの文だけを見ると、特別な復活にあずかった義人たちも **144,000** に含まれるように見えるが、大争闘の詳細な描写を見ると **144,000** は日曜休業令のテストと大いなる悩みとを通過し、死を見ないで生きて主を迎える聖徒たちであることが分かる。特別な復活は七つの災害が終わってからであることが明瞭である。

144,000(in number、数の上で、全部で)と表現しているが、必ずしも字義通りのきっちり **144,000** の数とは限らないのではないかと思える。なぜかという、先にも説明したように、**144,000** を字義通りにとると、12,000 のイスラエルも字義通りとしなければならない。戦闘機にも歩兵隊「バタリオン B256」とか「Battalion1,445」と呼ばれるようなものであろうとある人は言っている。**144,000** は $12 \times 12 \times 1000$ で天国の数字ではないだろうか。原語では、数字で 144 と書かれその後、000 は言葉で書かれているとか。144(12×12)神のみ国の完全数であろう。1,000 は 10 キュベットの $10 \times 10 \times 10$ の立方体である至聖所を指すのであろう。つまり、彼らは最後の時代に至聖所で産出さ

れる完全に出来上がった共同体と言えよう。彼らはイエスの「多種多様な」面の品性を表すのであろう(エペソ 3:10)。**144,000** は数字よりも品性の啓示を完全にする人々である。黙示録は啓示の書である。イエス・キリストの啓示をこれらの人々がするのである。

また、ある人たちは、字義通りの **144,000** が先にセブンスデー・アドベンチストから印されて、その人たちが大いなる叫びをして大勢の人々が収穫されると解する。私はそうは思わない。その理由を述べたい。

① 次の文章による:

「わたしは天使たちが、天をあちこちと飛びまわっているのを見た。墨入れを持ったひとりの天使が、地上から帰ってきて、自分の働きの終わったことを報告した。そこで聖徒の数がかぞえられて封印された。すると、それまで十誡の納められている箱の前で奉仕しておられたイエスが、香炉を投げ捨てられるのをわたしは見た。彼は両手をあげて、大きな声で、『事はすでに成った』と言われた。』初代文集 452

この文は、日曜休業令から印する働きが始まって恩恵期間が終了するまで、**144,000** を印する働きが続くことを示している。

② 黙示録 7 章の文脈から見ても、**144,000** は象徴的と思える。『印を押された者の数を聞いた』ら **144,000** と答え(4 節)、見たら(9 節)『数えきれないほどの大ぜいの群集』であった。13 節に『この白い衣を身にまとっている人々はだれか。またどこからきたのか。』と質問されて、14 節にその答えがある。『彼らは大きな患難をとあつてきた人たちである』と。これは疑いもなく、恩恵期間の終了後の大いなる悩みの時のことである。だから、**144,000** と『数えきれないほどの大ぜいの群集』は二つのグループではなく、同じグループのように思われる。

黙示録 13 章の獣の数字、また人間をさすものは **666** と言われている。これが象徴的であるとするなら、黙示録 14 章の **144,000** も象徴的なものと考えられる。

ちなみに、2003 年 4 期の聖書研究ガイド、98 頁に興味深いことが書いてあった。

「イエスは、御自分が『三日三晩』大地の中にいることになる、と言われました。しかし、イエスは金曜日の夕に葬られ、日曜日の朝に復活されました。これはまるまる三日三晩、つまり完全な 72 時間ではありません。このことから明らかなように、『三日三晩』という言葉は自動的に、きっかり 72 時間を意味するわけではありません。むしろ、それは、たとえば(ここでは)金曜日、安息日、日曜日のように、単に三日を意味する慣用句です(ルカ 23:46-24:3, 13,21 参照)。それは必ずしも、完全な 24 時間からなる金曜日、完全な 24 時間からなる安息日、完全な 24 時間からなる日曜日を意味するわけではありません。イエスはまた、ほかのところで、御自分が『三日で』からだの神殿を建て直す(ヨハ 2:19-21)、あるいは『三日目に復活する』と言っておられます(マタ 16:21)。これらの表現も『三日三晩』と同じ意味です。つまり、イエスは三日の期間にわたって十字架にかけられ、復活するという意味です。これらの日のうちで完全な 24 時間は安息日だけです。イエスは金曜日の夕に十字架にかけられ、安息日を墓の中で過ごし、日曜日に復活されました。」

144,000 がセブンスデー・アドベンチストから出て、それから別の大いなる群衆が加わるのではない。日曜休業令のテストを受けて神の印を受ける者は全部 **144,000** に入るのである。

そしていつの時代もすべて信じる者は誰でも(欽定訳)救いに入れるように、最後の時代にも誰

でも選ぶ者は **144,000** の特別なグループに入れるのである。神が独断的に **144,000** の数が満ちたから「しめきり」と宣言なさるはずがない。

初代文集 453 頁に「各人の判決はきまり、宝は数えられた(**numbered**)」という言葉が出てくる。証しの書を **numbered** で調べると加えられる、仲間に入れられるという意味で用いられていることが多い。少しだけ例をあげる。「こうした神のための証人たちは、霊的イスラエルの中に数えられる。」国指下 314「わたしたちもイスラエル人に数えられている。」ミニストリー374「キリストの心に宿っていたような愛がないならば、天国の一員となることはできない(**numbered**)のである。」実物教訓 138

彼らは初穂と呼ばれる。なぜなら「キリストの品性が完全に再現される」最後の熟した者たちだからである(実物教訓 47, TM506)。

「わたしは、また、悩みの時に、聖所に大祭司がおられないで神のみ前に生きるためにはどのような状態でなければならないかを悟っていない人が多くあるのを見た。生ける神の印を受け、悩みの時に保護される人々は、イエスのかたちを完全に反映していなければならない。」初代文集 149

「クリスチャンの生涯は、たえず前進することにある。イエスは、彼の民を精練し、清める者としての役についておられるのであって、彼のみ姿が、彼らの中に完全に反映される時、彼らは、完全で、清くなり、天に移される準備ができるのである。」1T340

そもそも、1844 年からは三天使の使命、安息日を受け入れて眠った聖徒、そして死なずして主を迎える聖徒たちを合わせて 144,000 人しか救われないとするのは、どうしてもガッテンがいかない。「信じる者がひとりも滅びないで永遠の命」を与えようとあらゆる国民、部族、国語、民族に永遠の福音が宣べ伝えられるのである。欽定訳では「信じる者は誰でも」となっている。だれでも選ぶなら 144,000 に入るのである。1844 年以前は誰でも信じる者は救われたが、1844 年以後は 144,000 人だけが救われるというのだろうか？

25. 「カトリック教会は変わったのだ。カトリックのことを悪く言ってはならない。信教の自由も認めたのだ。」

検証:

教団の理事会の席でこんな会話が交わされたそうだ。「カトリックはもう昔と変わりました。すばらしいですよ。」「各時代の争闘には、カトリックは表面的には変わったように見えるが、本質は変わっていないと書いてありますよ。」「各時代の争闘が書かれた時には変わっていませんでした。でも今はもう変わりました」と。

S 先生はアドベンチストライフ 6 月号に次のように書いている:

「SDA 教会は永年にわたって、信教の自由こそ精神の自由の基本であり、それが侵されることがないように『宗教自由部』の働きを通して警告してきました。カトリック教会は第二ヴァチカン会議で信教の自由に関する宣言を採択し、かつて国家権力と結びつき他を弾圧したことを反省、「信仰があらゆる外的な(政治などの)強制からまったく自由でなければならないことを宣言」しました。カトリックは変わったように見せかけるだけで本心は変わっていないという人がいますが、同じキリストにある兄弟の反省の言葉を信じないで疑い続ける精神とはどのようなものなのかと考えさせられます。」

「カトリックを信じることはニネベの人が悔い改めたのと同じで暗にカトリック信者をおとしめながら、預言者の言葉を尊重するSDA信徒を非難するという錯綜した発言である。」と言った人がいたが確かに不可解な発言である。

「法王教の擁護者たちは、この教会が中傷されてきたと言い、プロテスタント側はこの主張を認める傾向がある。」大争闘下 318

プロテスタントがカトリックに限りなく近づいているのは読者もご承知と思う。ルーテル教会がカトリックと信仰による義認理解で合意した。ルーテルが今日いたら鋭く見分けて戦うであろう。

我が教会においても法王に金メダルをプレゼントしたり、法王から金メダルを頂いたり、世界総会に正式にバチカンからオブザーバーを招いたり、カトリックの病院とSDAの病院が提携したりという現象があるが、天はどう見ているだろう。

● 制度としてのカトリックと個人としての信者を一緒に考えてはならない。教会組織としてのセブンスデー・アドベンチストと個人としての信者と別に考えるように。というのは、セブンスデー・アドベンチストは残りの真の教会であるが、その中にいれば救われるということではない。「われわれは、団体として救われるのではない。」大争闘下 224

「ローマ・カトリック教会の中に真のキリスト者たちがいることは事実である。この教会の幾千の者は、自分たちに与えられている最善の光に従って神に仕えている。彼らは、神の言葉を手に入れることが許されていない。だから彼らは、真理に気がつかないのである。彼らは、生きた、心からの奉仕と、単なる形式や儀式のくり返しとの間の、著しい相違に気づいたことがなかった。うわべだけの、満たされない信仰の中で教育されたこれらの人々を、神はやさしいあわれみをもってごらんになる。神は、彼らをとりにまわっている濃い暗黒に光が射し込むようにされる。神がイエスのうちにある真理を彼らに示されるので、やがて多くの者が神の民とともに立つのである。」大争闘下 321

● カトリックは決して変わらない。変わったのは戦略である。

「ローマ教会は決して変わらないということがこの教会の自慢の種であることを忘れてはならない。」大争闘下 340

「自分の目的を達成するのに最も都合のよい性格を身に装うことが、この教会の方針の一つである。しかしカメレオンのように変わりやすい外見の下に、この教会はへびのような不変の毒を隠している。...

カトリック教は以前ほどプロテスタントと広く隔たってはいないという主張が、プロテスタントの諸国において唱えられてきたことには、理由がないではない。そこには変化があったのである。しかしその変化は、法王制の中にあつたのではない。」大争闘下 328

● 信教の自由を認めているだろうか。

「オコンナー司教は、『カトリックの世界に危険を及ぼすことなく反対政策を実施できるようになるまで、信教の自由をがまんしているにすぎない』と言っている。セントルイスの大司教は、かつて次のように語った。『異端や不信仰は犯罪である。だから、たとえばイタリアやスペインのように、すべての人がカトリック教徒であって、カトリック教がその国の法律の不可欠な一部となっているキリスト教国においては、こうしたことは他の犯罪と同様に処罰される』。....

プロテスタント教会は大いなる暗黒の中にある。そうでなければ、彼らは時のしるしを見

分けるはずである。ローマ教会の計画や運営方式には遠大なものがある。この教会は、再び世界を支配するために、また迫害を復活させるために、またプロテスタントが行なったすべてのことを無効にするために、激しい決定的な戦いの準備として、その感化力を広げ、その勢力を強めようと、あらゆる手段を用いている。」大争闘下 320-323

彼らは「時機をまっている。」同 339

- プロテスタント(SDAは最後に生き残っているプロテスタント)はカトリック教会をどう見るべきか。

「今日ローマ・カトリック教は、プロテスタントから、過去の時代よりもはるかに好感をもってみられている。カトリック主義が優勢ではなくて、カトリック教会が勢力を得るために融和的な態度をとっている国々においては、改革主義の教会を法王教から区別する教理に対して、ますます関心が薄らいできている。結局われわれは、主要な点では今まで考えられてきたほど広く隔たっていない、われわれの側のわずかな譲歩によってローマとのより良い理解がもたらされるであろう、という意見が有力になってきている。高い犠牲を払って贖った良心の自由に、プロテスタントが高い価値を置いた時代があった。彼らは子供たちに法王教をきらうように教え、ローマと一致しようとすることは神に対して不忠実であると主張した。しかし今日表明される意見は、なんととはなはだしく異なっていることであろう。」同 318

- キリスト教会の仲間であろうか？

「現在ローマ教会は、その恐ろしい残虐行為の記録を弁解しながら隠し、世界にもっともらしい顔を見せている。この教会はキリストのような衣を装っている。しかし教会は変わっていない。過去に存在した法王制のあらゆる原則は、今日も保持されている。最も暗い時代に案出された数々の教理は、今もなお支持されている。だれも欺かれてはならない。今日プロテスタントが尊敬しようとしている法王制は、宗教改革の時代に世界を支配していたのと同じものである。....

法王制はまさしく、預言の中でこのようになると言われているとありのもの、すなわち終末時代の背教である(テサロニケ第二 2:3,4 参照)。自分の目的を達成するのに最も都合のよい性格を身に装うことが、この教会の方針の一つである。しかしカメレオンのように変わりやすい外見の下に、この教会はへびのような不変の毒を隠している。『異端者もしくは異端の嫌疑ある者との誓約は守ってはならない』と教会は明言している。一千年にわたるその記録が、聖徒の血によって書かれているこの権力が、今日キリストの教会の一部として承認されてよいであろうか。」同 329

「ローマ・カトリック教会は、異教とキリスト教との形式を結合したものである。」同 326

- 法王教(制度)にどう対応すべきか？

「プロテスタントは法王制によけいな手出しをし、後援してきた。彼らは、法王教徒自身が見て驚き、理解しかねるような妥協と譲歩をしてきた。人々は法王制の真の性格、またこの教会が支配権を得たとき心配される危険に対して目を閉じている。政治的また宗教的自由に対するこの最も危険な敵の進出に反対するように、人々は目ざめる必要がある。」同 322

「今日プロテスタントが尊敬しようとしている法王制は、宗教改革の時代に世界を支配していたのと同じものである。その時神の民は、自分の生命の危険をおかして、この教会の悪を暴露するために立ち上がったのであった。」同 328

「我々は罪の人(不法の人)の悪を暴露するために召されている。」EV233

「祈りをもって聖書を研究するとき、プロテスタントは法王制の本性を知り、法王制を嫌悪しそれを避けるようになる。」同 330

26. 最後の時代に神はご自分の民を通してご自分を擁護する必要があるのだろうか？

検証:

「罪、完全について」に M 先生は 26、27 頁に次のように言っている:

「イエス・キリストが律法を守って神のご品性の擁護をすでになさったのなら、なぜさらに最終時代の聖徒がそれをしなければならないのでしょうか。...

まず第一に、イエス・キリストが模範としてなぜ最後の民にだけ特別の意味を持たせなければならないのでしょうか。逆に、イエスの時代により近く、また、直接まじわった人々の方がキリストに似た品性を造るのに、より有利な環境にあったのではないのでしょうか。第二に、イエス・キリストが律法を守って神のご品性の擁護をすでになさったのなら、なぜさらに最終時代の聖徒がそれをしなければならないのでしょうか。罪を犯さなかった方のほうが、しばしば罪を犯す私たちよりもその問題に解決を与えることができるのではないのでしょうか。人の罪のなさはキリストの完全な擁護になにか付け加える程にすばらしいものなのでしょうか。第三にキリストの生涯は不十分であったとの結論もでてしまうのです。最後の民の方がキリストよりもさらに優れた事ができるとの思いやりにつながる大それた事なのです。もしこの問題の中心点が律法を完全に守るという点であるなら、罪を一度も犯したことのない方のほうが最後に罪をようやく犯さなくなった人よりもその問題に対する最善の答えでないのでしょうか。つまりキリストの模範が安っぽいものとなってしまふのです。キリストの模範は罪を犯すのをようやくやめるようになれる人間の模範でしかあり得なくなってしまう。」

確かにキリストによって完全に神の律法、ご品性は擁護された。そして更にご自分の民にもその役割を与えておいでになるのだろうか？各時代、神のみ名を擁護する聖徒たちがいた。確かに、最後の時代の民は品性を造るのに弟子たちより不利な環境にある。しかし、どんなにすばらしい環境にあらうとも、神の計画なされた至聖所における最後の罪の除去、特別なあがないを経験しなければ完全な品性は不可能である。彼らは完全な品性に到達していなかった。ゆえに完全に神のご品性を擁護する祝福にあずかることはなかった。最後の民は、罪の除去を経験し、完全な品性をもって最後に神のみ名を完全に擁護するのである。大争闘の終結は 144,000 の出現にかかっているのである（黙示録 14 章）。

「わたしは諸国民の中で汚されたもの、すなわち、あなたがたが彼らの中で汚した、わが大いなる名の聖なることを示す。わたしはあなたがたによって、彼らの目の前に、諸国民はわたしが主であることを悟ると、主なる神は言われる。」エゼキエル 36:23

「全天は、神の律法(品性)は聖にして正しく、良いものであることを擁護するのを聞こうと待っている。この働きをする者はどこにいるだろうか？神は、ご自分の民が神のご計画と律法にさらに深い洞察を持つように召しておられる。」JRH4/16/1901

「教会は、キリストの恵みの富の倉庫である。主は教会を通して、ついにはもろもろの支配、

権威に対しても、愛を最終的に、完全に表わすのである。』YI7/13/1893

「救い主は父の愛を表わすことによってキリストの栄光をあらわすのであった。そのようにみ霊も、キリストの恵みを世にあらわすことによってキリストの栄光を表わすのであった。神のみかたちが人間のうちに再現されるのである。神の栄え、キリストの栄光は、神の民の品性の完成に含まれている。」希望下 157

「ご自身の民を通して世の前にご自身の栄光を現わすのが神の目的である。』J9T21

「神の律法は変えられていないし、これからも変えられないことを宣言する責任が彼ら（神の民）に任されている。』RH4/16/1901

「今日、世界は、ご自分の聖徒たちを通してキリスト・イエスの啓示を緊急に必要としている」同 3/31/1909

「もし、天からの絶えず増し加えられる光を必要としている民があるとするなら、それは神の民である。この危機の時に、神は彼らを、聖なる律法の保管者として、世に神の品性を擁護するために召されたのである。」5 T746

「『実がいると、すぐにかまを入れる。刈入れ時がきたからである。』キリストは、ご自分の教会の中に、ご自身をあらわそうと熱望しておられる。キリストの品性が完全にキリストの民の中に再現されたときに、彼らをご自分のところに迎えるために、主はこられるのである。」 実物教訓 47

私は、「厳正な信仰を軽視する自由主義」に賛成できない。神の義を神の慈悲から引き離す「新神学」に賛成できない。神学によって信徒の生活が形作られていく。指導者の言動は信徒に多大な影響を与えることを考えると、今は黙すべき時ではないと思ひ、あえてはっきり書くことにした。そうすれば、信徒は各自与えられた光に応じて判断していくことと思ふ。「わたしたちひとりびとりは、神に対して自分の言いひらきをすべきである。」（ローマ 14:12）生ける者のさばきが非常に近づいている。正しい律法観、福音観を持たずに、さばきと直面したなら時すでに遅しとなるからである。

1950年にサンフランシスコでセブンスデー・アドベンチストの世界総会が開かれた。「キリスト中心の説教」が強調された総会であった。1888年から62年経過していた。1888年の「信仰による義」のリバイバルとも見える様相であった。み業完成が遅れていることを痛感し、何か新しいものに飢えていた。代議員たちは、この「キリスト中心」の宣教こそ後の雨、大いなる叫びをもたらすものではないかとの思いに満ちていた。多くの教役者たちを感動させた。

しかし、アフリカから、世界総会のために、一時帰国していた二人の宣教師が鋭い観察をしていた。ロバート・ウィーランド氏とドナルド・ショート氏であった。彼らは、この熱狂振りを「バアル礼拝」だと痛烈に批評した。「キリスト中心」の説教は、「反キリスト中心」の説教だと言った。彼らは、世界総会の役員に236ページの「1888年再吟味」という論文を提出した。それは後に信徒の手にも入るようになった。私もはじめてわが教会で1888年に重大なことが起こったことを知った。1888年にミネアポリス世界総会で起こったことは、ちょうど古代イスラエルがカデシ・バルネアで数日のうちに「乳と蜜の流れる地」に入るか、あるいは、40年の荒野の流浪かを決定したように、現代の霊的イスラエル、セブンスデー・アドベンチストにとって重大事件であった。ウィーランド、ショートによる、1888年のエピソードやメッセージについて、井深姉妹によって翻訳され、関係文書が出されていることはありがたいことである。

1950年代のようなことが今日もまた起きているように思われる。「キリスト中心」「十字架を説教し、歌い、祈れ」というモットーのもとに、神の律法、至聖所における最後のあがない、教理の研究、預言の研究、教会の標準などが軽視され、セレブレーション的な礼拝に傾いていることは、セブンスデー・アドベンチストを最後の教会としてこよなく愛している私の心を痛めている事実である。

イエスの十字架を掲げるのであって、律法十戒を掲げるべきではないという表現は、多くの信者に真の福音を曲解させる。それでこの記事で、律法と福音、十字架と十戒の関係を考えてみたいと思った。

キリスト、キリストの叫び！

「今日、クリスチャンと自称する者たちは、キリスト、キリストこそが我々の義であると叫ぶが、律法を退ける。彼らは、キリストが、天父の律法を無効にするためにこの墮落した世界にこられたかのように話したり、行動する。……牧師達は、贖いが神の律法を破り、罪を犯す自由を与えたと説き、また、キリストを通して恵みと憐れみが示されたことを賛美しながら、一方では神の律法をさげすむのである。」RH5/ 6/ 1875 par. 15

十字架だ、イエスだ、福音だと言って神の律法を軽視することは一般キリスト諸教会、すなわちバビロンのすることである。しかし、この風潮が我々セブンスデー・アドベンチスト教会でも聞かれるようになってきているのである。

「ここにキリストがおられる、ほらここにキリストがと人々は叫ぶ。しかしそこにキリストはおられるのだろうか？ その足で戒めを踏みつけるとき、キリストはこう言われる。『誰でも、戒めの一つでも破る者は、天に認められないであろう。天地が滅び行くまでは、律法の一点、一画もすたることはないのである。』ある人はマックナイト氏に言った、『あなたはどうしてそんなに律法について語るのですか、なぜもっとイエスについて語らないのですか』と。我々が律法について語るとき天父と御子をあがめるのである。天父は律法を与えられ、御子はそれを拡大し、尊ぶべきものとするために死なれたのである。」ISAT 20

ユダヤ人の大きな罪、キリスト教会の大きな罪！

「ユダヤ人の大きな罪は、彼らがキリストを拒んだことであつた。キリスト教会の大きな罪は、天地を支配する神の統治の基礎である神の律法の拒否ということである。主の戒めは、軽べつされ、無視されるのであつた。」大争闘上 8

愛がなければならぬとの叫び！

「われわれは、キリストのうちにとどまっていると主張しながら、神の律法を犯す生活をしている人々に対して、愛されたヨハネと同じ判断をする権威を認められている。初代の教会の繁栄をおびやかしたような悪が、この終わりの時代にも存在する。ゆえに、こうした点についての使徒ヨハネの教えを、慎重に心にとめていなければならない。『愛がなければならぬ』は、どこでも聞かれる叫びである。特に、きよめられたと言っている人たちから聞かれる。しかし、真の愛は純粹であつて、告白されていない罪をおおい隠すことはできない。キリストが身代わりとなられた魂を愛しているかぎり、悪と妥協しないようにしなければならない。われわれは反逆者と手を結んで、これを愛と呼ぶべきではない。神は現代の世界にいる神の民たちに、ヨハネが魂を破壊する過ちに反対して立ったように、

正義のために断固として立つよう要求されている。」患難下 258

「われわれはクリスチャンの親切を示さなければならないが、罰や罪人をそれとはっきり言う権威も与えられている、そして、これは真の愛と矛盾しないと、使徒ヨハネは教えている。」同

聖書解釈の原則が守られていないために混乱が見られる。その原則とは、①文脈からはずれてはならない。②象徴や比喩が用いられていないかぎり、その明瞭な意味に従って解釈する。そしてもう一つは、何回も引用する次の原則である：

救い主の一つの言葉をもって、他の言葉を無意味にしてはならない。大争闘下 69

パウロは、「わたしたちの主イエス・キリストの十字架以外に、誇とするものは、断じてあってはならない」（ガラテヤ 6:14）と言っている。彼は、「あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である」と強調している（エペソ 2:8）。しかし、同時に彼は「すると、信仰のゆえに、わたしたちは律法を無効にするのであるか。断じてそうではない。かえって、それによって律法を確立するのである。」（ローマ 3:31）とも強調しているのである。

「カルバリーの十字架を掲げること、これこそパウロの言葉と行動を起こさせる動因、彼を全く夢中にさせる動機であった。」患難下 178

「パウロは、常に神の律法を高く掲げた。」患難下 77

福音と律法を切り離すことはできない。

「敵はいつでも、律法と福音を分離するために働いてきた。それらは切っても切れない関係にある。」MS 11, 1893年（スタディバイブル新 332）

福音と律法

我々が、神の律法、神の愛を最も明瞭に見ることができるのはどこであろうか？

「我々は律法について語る時、御父とみ子を共に崇めるのである。御父は我々に律法を与え、み子はそれを大いなるものとし、栄えあるものとするために死なれた。」MS 5, 1885年（スタディバイブル新 332）

「イエス・キリストの義をつかまない限り、エホバの律法を高めることは、我々には不可能である。」MS 5, 1889年（スタディバイブル新 332）

「エホバの律法は木であり、福音はその芳しい花、またそこに実る果実である。」Letter 119, 1897年（スタディバイブル新 332）

セブンスデー・アドベンチストは神の律法を宣べ伝えるように召されている！

「ほとんど全世界が背教しているこの時代に、神はその使命者たちがエリヤの霊と力をもって、神の律法を宣べ伝えるようにと召しておられる。キリストの初臨に民を備えて、十戒に彼らの注意を向けたバプテスマのヨハネのように、我々も、『神を恐れ、神に栄光を帰せよ、さばきの時が来たからである』とのメッセージを、明瞭に伝えねばならない。」（SW1905年、3月21日）スタディバイブル旧 1263

「神の律法を拡大し、掲げることが我々の働きである。」（CWE70）

「責任の地位にあるわが兄弟方よ、キリストのみ国の律法に喜んで従うことによって律法を

掲げなさい。」(FE 511)

「神はご自分の律法を無効にするため、またその律法に取って替えるためにその恵みを用いることはなさらない。...神の恵みとみ国の律法とは完全に調和して、それらは手と手を取り合って歩くのである。」(AG 10)

「もし、第三天使の使命の霊と力が欲しければ、律法と恵みを一緒に提示せよ。なぜなら、それらは、手と手を取って進むのだから。」(GW 161)

三重の使命と律法

我々の働きは、三重の使命を伝えることだと主の僕は言っている。全世界に宣伝される三重の使命の第一天使の使命は、「神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時が来たからである。天と地と海と水の源とを造られたかたを、伏し拝め」(黙示録 14:7) という叫びである。

それは、神を恐れることー神への畏敬の呼びかけである。神を恐れるとは、その命令を守ることである(伝道 12:13)。さばきの時が来たとの叫びは、律法というさばきの標準があるとの宣言である。それは、悔い改めと救い主イエスへの信仰を促すものである。これがパウロの福音であった(患難下 78,使徒 20:21 参照)。

律法が正当な位置に回復されてはじめてリバイバルがおこる！

「神の律法が、その正当な位置に回復されて初めて、神の民と称する人々の間に、初代の信仰と敬虔のリバイバルが起こり得るのである。」 大争闘下 209

エズラ、ネヘミヤのリバイバルは、実にその例であった。

「エズラは心をこめて主の律法を調べ、これを行い、かつイスラエルのうちに定めとおきてとを教えた。」エズラ 7:10

「彼らはその書、すなわち神の律法を明瞭に読み、その意味を解き明かしてその読むところを悟らせた。総督であるネヘミヤと、祭司であり、学者であるエズラと、民を教えるレビびとたちはすべての民に向かって『この日はあなたがたの神、主の聖なる日です。嘆いたり、泣いたりしてはならない』と言った。すべての民が律法の言葉を聞いて泣いたからである。」ネヘミヤ 8:8,9

「あなたの聖なる安息日を彼らに示し、あなたのしもべモーセによって戒めと、さだめと、律法とを彼らに命じられました。」ネヘミヤ 9:14

「シナイ山上でキリストによって語られた十の神聖な規則は、神の品性の啓示であって、神が人間の全財産を管轄しておられるという事実を世に知らせた。人間に提示され得る最も大きな愛を表した十の規則から成る律法は、約束のうちに魂に語りかける天からの神の声である。これを行えばあなたはサタンの主権と支配に屈することはないという約束である。一見否定的に思われるかもしれないが、その律法に否定的な部分はない。それは、行って生きよ、ということに尽きる。」(Letter 89,1898 年)

「我々は、日曜休業令を無効にするために、最善を尽くさなければならない。これをする最善の方法は、神の律法を掲げ、その神聖さのすべてを目立つようにすることである。真理が勝利するためには、それをしなければならない。」(Letter 58, 1906,CW 98)

「神の律法を拡大し、高揚するのは我々の働きである。神の聖なるみ言葉の真理が明らかにされなければならない。我々は、聖書を命の法則として持ち上げなければならない。我々

は、人々に主なる神が天と地の創造主であり第七日が安息日であることを指し示すべきである。」(CW 70)

「我々は、エホバの律法を高揚するために最善を尽くしているだろうか？」(CW 97)

「... 忠実な者たちは、彼らの信仰を隠す時ではなく、エホバの律法を掲げるべきであることを感じる。」(Mar 239)

「目前に迫っている大論争点(日曜休業令の強制)は、神が指名されなかった者たちを一掃するであろう。その時神は、後の雨のために備えられた純潔で真実な、清い牧師たちをお持ちになるであろう。」JSM 385(1886)

「我々は、『神の戒めとイエスの信仰』と記された旗を掲げるべきである。神の律法への服従が大論争点である。それを見えなくさせてはならない。我々は、教会員、また信じて告白しない者たちが天の律法の要求を見て従うよう、彼らを覚醒させることにつとめなければならない。我々は、この律法を拡大し、尊いものとすべきである。」(2SM 403)

律法への服従と救いの関係

「『先生、何をしたら、永遠の生命が受けられましょうか』。この質問は、パリサイ人たちが、キリストのことばの端をとらえてわなにかけるために、律法学者に言わせたものであったので、彼らは、熱心にイエスの答えに耳を傾けた。ところが、救い主は、議論をしようとはなさらずに、質問した当人に答えをお求めになった。『律法にはなんと書いてあるか。あなたはどうか読むか』とお聞きになった。シナイから与えられた律法を、イエスは軽視していると、なおもユダヤ人は、イエスを非難した。ところが、主は、救われるかどうかは、神の律法を守ることにあると言われた。」(キリストの実物教訓 354)

「律法学者は、『心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』また、『自分を愛するように、あなたの隣人を愛せよ』とあります」と言った。キリストはそれに答えて、『あなたの答は正しい。そのとおり行いなさい。そうすれば、いのちが得られる』と言われた。」(同 354)

「キリストは、常に、律法は、一つのまとまったものとして神がお与えになったものであることを教えられた。つまり、一つの原則がその全体を貫いているから、一つのいましめを守って、他を破るということは不可能であることを示された。人間の運命は、律法のすべてに従うことによって決定するのである。」(同 355)

「するとこんどは別な欺瞞が持ち出されることになった。サタンは、あわれみが義を滅ぼし、キリストの死が天父の律法を廃止したと宣言した。しかしもし律法を変えたり、廃止したりすることが可能であったら、キリストは死なれる必要がなかったのである。律法を廃することは、罪とがを不滅なものにし、世をサタンの支配下におくことになる。イエスが十字架上にあげられたのは、律法が不変であったからであり、律法の戒めに従うこと以外に人が救われる道はなかったからである。それなのに、キリストが律法を確立された手段そのものを、サタンは律法を廃するものであると言った。この点について、キリストとサタンとの間の大争闘における最後の戦いが起こるのである。」(希望下 289)

今日、救いは十字架の恵みにより、信仰によって与えられるのであって、律法への服従は、救いとは関係ないという風潮がある。服従は信仰の根拠ではないが、救いと大いに関係があることを覚えよう。

我々が覚えておくべき必須の事実:

1. 永遠の生命の条件は、律法への服従である。
2. 人間は律法を守れない。条件を満たすことができない。
3. キリストの徳と恵みによって守ることができる。

「人にはできないが、神には何でもできないことはない」のである。

最後に、私の大好きな靈感の言葉を引用しよう:

「私どものあがないのために払われた価、私どものためにそのひとり子に死をさえおゆるしになった天の神の測り知れない犠牲を考えると、キリストによって私どもは非常に高潔な状態に到達することができるという観念をおこさずにはおられません。」(キリストへの道 10,11)

27. 「黙示録 13 章の獣は、ローマ・カトリックにだけ特定できない。時代によって、国によって適用は異なる。」「ヒットラーか、スターリンにも適用できるであろう。」「イスラムパワーかもしれない」

たとい、証の書がなかったとしても、この獣はダニエル書と黙示録の研究から、ローマ法王教としか解釈できない。

「この象徴は、たいていのプロテスタントが信じてきたように、かつて古代ローマ帝国が握っていた力と位と権威とを継承した法王権を表わしている。... ダニエル書 7 章の小さい角の描写とほとんど同じであるこの預言は、疑いもなく法王権を指している。」大争闘下 158

「ラビたちは、聖書のみ言葉がある意味にも解釈され、またはそれと全然正反対の意味にも解釈されるかのように、疑いとためらいとをもって語った。聞く者たちは毎日ますます分からなくなった。」希望上 316

「彼らの神秘的な解釈は、神が明らかに示しておれることを不明瞭にした。彼らはつまらない専門用語について論争し、最も本質的な真理を事実上否定した。」希望上 322

28. 「SDA 教会は背教してはいない。成長してすばらしく発展している。」

検証:

昔のセブンスデー・アドベンチスト（神の民）は、背教したのだろうか？キリスト初臨の前の神の民は背教したであろうか？なぜ、神は預言者マラキの後、沈黙しておられたのだろうか？

「我々の歴史とイスラエルの歴史との間には著しい類似点がある。」 4T27

「古代イスラエルの子らの試みとキリスト初臨前の彼らの態度は、キリスト再臨前の神の民の立場を例証することをわたしは幾たびも幾たびも示された。」1 SM406

「わたしは民としての我々の状態を考えると、悲しみに満たされる。主が天を我々に閉ざされたのではない。絶えざる背教が我々と神との間を隔てたのである。... それでいて、教会は栄え、平和と霊的繁栄が教会の至る所にあるというのが一般的な考えである。教会はそのリーダーであるキリストに従うことに背を向けて、着実にエジプトに後退している。」J5 T 217

20世紀の初頭に、わが教会に恐るべき背教が起きた。それを背教のアルファ（初め）と呼んだ。わが教会は大きな打撃を受けた。「まもなくオメガが続くことをわたしは知っていた。そしてわたしはわが民のために身震いした。」シリーズ# 2、50。「だまされてはならない。多くの者は信仰から離れるであろう。... 今我々の前にあるのは、この危険なアルファである。オメガは最も驚くべきものである。」1SM197

「わたしは、ミネアポリスの集会の時以来、かつてないほどのラオデキヤ状態を見せられた。」JRH8/26/1890

背教は深刻になっていき、混乱と危機と沈下が最高に達する時が来る。大いなる試練、ふるいを通して栄光の姿の教会になる。

「教会の清めの日急速に近づいている。神は清い、真実な民をお持ちになるであろう。まもなく起こる大いなる震いにおいて、イスラエルの力が良く分かるであろう。様々なしるしは、主がみ手にうちわをもって、その打ち場（教会）を徹底的にお清めになる時近づいている事を示している。

大いなる混乱と困惑の時代が急速に近づいている。」 5T80

「教会の危機と沈下（不振）が最高の時、光に立っている小さなカンパニー（仲間たち）は地に行われている憎むべき事柄に対して嘆き悲しむであろう。しかし、教会員が世の方法に従っているので、彼らの祈りは特に教会のために立ちのぼるであろう。」 5T208,209

しかし、大変化が来る！それまで教会に二つのグループが発展する。

「わたしは、真の証人のあかしが、その半分も注意されないのを見た。教会の運命がかかっている厳粛なあかしが全く無視されないとしても、軽視されている。このあかしは、深い悔い改めを呼び起こすべきものである。それを真に受け入れるすべての者は、それに従って清められるのである。

天使は、『聞きなさい』と言った。やがて、わたしは、多くの楽器が、完全に調和して、美しい音楽をかなでているのを聞いた。それは、わたしがこれまでに聞いたこともない美しい音楽で、恵みとあわれみに満ち、高尚で聖なる喜びにあふれていた。それは、わたしの全身を感動に震わせた。天使は、『見なさい』と言った。すると、わたしは前に大いにふるわれるのを見たその一団の人々に注目した。わたしは、前に涙を流し、苦悶しているのを見たその人々を見せられた。彼らの回りの守護の天使は二倍に増やされた。そして人々は、頭から足まで、武具をまとっていた。彼らは、兵卒の隊のように、規律正しく動いた。

彼らの顔は、彼らの耐えてきた激しい争闘と経てきた苦悶とを表していた。しかし、彼らの容貌は、激しい内的苦悶のあとがあつたとはいえ、今は、天の光と栄光に輝いていた。

彼らは、勝利を得た。そして、彼らは、深い感謝にあふれ、聖なる喜びにみたまされていたのである。

この一団の数は減少していた。ある者は、ふるい落とされて、途中に残された。勝利と救いを尊んでそのために忍耐強く嘆願し苦悩した人々に加わらなかった不注意で無関心な人々は、それにあずからず、暗黒のうちに取りのこされた。そして、彼らの場所は、真理を信じて隊列に加わる人々によって、直ちに補充された。悪天使たちは、なお彼らの回りにつめ寄ったが、彼らに打ち勝つ力はなかった。

わたしは、武具をまとった人々が力強く真理を語るのを聞いた。それは効果的であった。多くの人々が縛られていた。夫に縛られていた妻もあれば、親に縛られていた子供もあった。真理を聞くことを妨害されていた心の正しい人々は、今、熱心に真理を自分たちのものにした。親族を恐れる気持ちは全くなかった。そして、真理だけが彼らの前で高められたのである。彼らは、飢え渴くように真理を求めていた。真理は、生命よりも愛すべく尊いものであった。わたしは、何がこのような大きな変化をもたらしたのかをたずねた。

『それは後の雨、主のみ前からの慰め、第三天使の大いなる叫びである』と天使は言った。大いなる力が、これらの選ばれた人々と共にあった。」初文 439

29. セブンスデー・アドベンチスト教会は背教し、ラオデキヤになったから、出て分離すべきであろうか。「名目的再臨信徒」から分離すべきであるというのはどういうことであろうか？

検証:

1. ラオデキヤは吐き出されたか？

ラオデキヤは口から吐き出されることは確かである。しかし、SDA ラオデキヤはいつ吐き出されたのであろうか？主の僕はわが教会がラオデキヤであることは、1852年から言っているし、1888年の覚醒の時を逸して、かつてないほどの深いラオデキヤ状態に陥ったと言っている。彼女自身1915年に眠りにつくまでラオデキヤ教会に留まって神がイスラエルを回復するその時と方法に任せたのであった。

1893年に6月11日に主の僕は言った:

「C兄弟へ

主はあなたに、セブンスデー・アドベンチストをバビロンと呼んだり、神の民を、それから出るように招いたりする使命を与えられませんでした。この問題について、あなたが挙げるかもしれない理由は、私には重要なものに思われません。といたしますのは、主が私に、このような使命に反対する明確な使命を与えられたからです。残りの教会 p69

1913年6月12日に次のように言われた。

「私はイスラエルの神がなおご自分の民を導き、いつも彼らと共に、終わりまでいることを知るとき私は励まされ、幸いに思います。」 同上

各時代の神の運動は預言されていた。ダニエル書、黙示録、雅歌書に宗教改革も、再臨運動も預言されていた。黙示録10章にセブンスデー・アドベンチストの誕生を見る。そこから全世界のすべて

の人々にキリストの再臨に備えさせる三天使の使命が誕生した。ラオデキヤになることも預言されていた。

もう一度、大宗教改革運動が起こることは、黙示録に書いてある。神はミネアポリス世界総会の時に、大いなる叫びの宣言のチャンスを与えられた。教会は拒んだ。改革運動教会はその時以来自分たちがその預言された黙示録 18 章の働きであるというのである。しかし、主の僕は明らかにそれを未来に置いている。

「女の残りの子ら」は、セブンスデー・アドベンチスト教会である。「レムナント」である。

しかし、どうして最後の真の教会にこれほどの悪と不義が見られるのだろうか？ これほどの背教と墮落は残りの教会には存在しないはずではないか。ラオデキヤからは分離すべきだと改革運動教会は主張する。

我が教会の伝道、教育、医療は神のみ旨からそれていないだろうか。教会の水準に背信は見られないだろうか。

世界総会安息日学校部長のゴールドスタイン氏は、公にセブンスデー・アドベンチスト残りの教会における罪と不義をその著書に列挙している。引用してみたい。

- ▲ 12 才の子がその父に繰り返しベッドに引きずり込まれた。残りの教会の母は何もしない。
- ▲ 残りの教会の文書を読んだ若い女性が安息日礼拝に出席。誰も挨拶しない。名前も尋ねない。話しかけてくれる人もいない。真珠の首飾りを見て冷笑。
- ▲ 子供が泣いている。両親は両方とも残りの教会の指導者、公でも家庭でもスマイルしながら数年の後に離婚。
- ▲ 若い女性、残りの教会に対する憎しみに燃える。その父は第一長老、安息日学校教師、パスマインダーの指導者。妻と子供に暴行しそして聖書研究に出かける。
- ▲ 残りの教会の牧師が銀行強盗。牧師が！
- ▲ 残りの教会の高校教師が他の妻と寝ているところを逮捕される。相手の夫が激怒し、彼を絞め殺す。
- ▲ ある者は残りの教会の教理を異端と非難、ある者は教理的に逸脱した、背教と譴責。
- ▲ 残りの教会員、安息日にオートバイ店を開く。
- ▲ 残りの教会の学校に犠牲を払って子供らを送り後悔と自責の思いで苦しむ親。子供たちみんな残りの教会の信仰を捨てる。
- ▲ 中絶を行う残りの教会の病院の前に立って「なんじ殺すなかれ」との看板をかかげる。
- ▲ 残りの教会の青年牧師、若い女の子と性的関係で嫌疑を受ける。
- ▲ 南カリフォルニアの残りの教会「アドベンチスト大家族」の医者が患者を殺した容疑で逮捕と雑誌に掲載。この医者はそのコミュニティとセブンスデー・アドベンチスト教会—残りの教会では中心人物。

これらの記事はほんの氷山の一角にすぎないことを述べて、ゴールドスタイン氏は、「近親相姦(罪)、姦淫、殺人が残りの教会の中に？ これでも残りの教会なのだろうか？」との問いに答えてい

る。要約すると次のようになる:

「古代イスラエルを見よ。日の下に見られるあらゆる種類の罪が行われていながら、千年以上も神の残りの民として存続した。旧約の残りの教会の失敗、異端、背教に聖書は泣いている。腐敗、いさかい、妥協、姦淫、律法主義、偽善、異端—過去の残りの教会にこれと同じように、これらすべて存在した。それでいて、その残りの教会の身分を無効にはしなかったのだ!

何千年の背信、罪、墮落、悪にもかかわらず、なお国家としてのイスラエルは神の残りの教会として生き残った。ヘブルの国家、共同体としてのイスラエルがその役割を果たさなくなり、大きな光を受ける、もう一つのグループ(キリスト教会)を呼び出されるまでは、主の残りの教会であったのだ。

残りの教会—神の民という資格は、それが完全に清いかではなく、現代の真理、光が与えられているかということである。

アドベンチストも同じである。この運動の中には偽善、妥協、罪、背教が存在するかもしれない。しかし、どこにこれほどの光が与えられている団体があるだろうか。ラオデキヤの罪にかかわらず、なお神が震い、分離するまでは残りの教会なのである。

『欠点を持った教会員がいること、麦の中に毒麦がいることは残念である...教会の中に悪が存在するが、それは、世の終わりまでそうである...教会は、たとえ弱く欠点があっても、譴責と警告と勧告を必要としていても、キリストが最高の関心を持っている地上における唯一の対象である。』 TM49

残りの教会は、ある人たちが主張するように、忠実な者たちによってのみ構成されているのではない。

『教会は落ちかかるように見えるが、落ちはしない。それは残るのである。シオンの罪人が震い出されるであろう。尊い麦からもみらが分離されるであろう。これは恐ろしい試練であるが、起こらねばならない。』 2 SM380

この分離は獣の刻印が押される時に起こる。

不忠実な者が出て行くのである。

最後まで残る者が残りの教会の「残りの民」である。

セブンスデー・アドベンチストの中のメンバーであるから救われるのではない。セブンスデー・アドベンチストの中の忠実な残りの者が救われるのである。

「すべて主の名を呼ぶ者は救われる。それは主が言われたように、シオンの山とエルサレムとに、のがれる者があるからである。その残った者のうちに、主のお召しになる者がある。」ヨエル書 2:32

「その日、主の枝は麗しく栄え、地の産物はイスラエルの生き残った者の誇り、また光栄となる。そして主が審判の霊と滅亡の霊とをもって、シオンの娘らの汚れを洗い、エルサレムの血をその中から除き去られるとき、シオンに残る者、エルサレムにとどまる者、すべてエルサレムにあって、生命の書に記される者は聖なる者となえられる。」イザヤ 4:2-4
エゼキエル 9 章参照。

「イスラエルの残りの者は不義を行わず、偽りを言わず、その口には欺きの舌を見ない。それゆえ、彼らは食を得て伏し、彼らをおびやかす者はいない。」ゼパニヤ 3:13

背教した教会から出て更に良い教会を見つけるべきだろうか？いつ分離があるのだろうか？

セブンスデー・アドベンチストから出ていることを考えている人たちは十分に気をつけなければならない。なぜなら、出ることによって最後の清めがなされるのではないからである。確かに、キリスト教会はユダヤ教会から出た。プロテスタント教会はカトリック教会から出た。セブンスデー・アドベンチストはプロテスタント諸教会から出た。さて、このような背教したセブンスデー・アドベンチストから出るべきだと考えるのは当然の論理のように見える。しかし、これは危険な結論である。

セブンスデー・アドベンチストから出なければならぬとするなら、その教会はしばらくしてまた背教するであろう。そしてまた出る。永久にこのような繰り返しが続く。主はこの終わりのときに、教会を震い、清める方法を持っておられる。

「試練が我々のまわりに濃くなって来る時、我々の教会の中に分離と一致が見られる。…迫害の嵐が勃発する時、ほんとうの羊は真の羊飼いの声を聞くであろう。失われた者を救う自己犠牲的な働きがなされ、さまよっていた多くの者が大牧者なるお方のもとに帰ってくるであろう。神の民は近く寄り集まり、一致して戦うであろう。同じ危機に直面し、上位への争いはやむであろう。…」6T400, 401

「分裂が教会の中に来るであろう。二つのグループが発展するであろう。麦と毒麦が収穫の時まで育つであろう。」2SM114

収穫の時まで麦と毒麦は育つ。

「教会のあるメンバーの人たちは高慢で、自己過信で、不信で、己の考えをゆだねない。ラオデキヤ教会へのメッセージが当てはまる証拠が山ほど積もっているにもかかわらず…。しかし、麦と毒麦の両方を一緒に収穫まで育つままにせよ。そのとき天使が分離の働きをするであろう。」2SM 69

その収穫の時はいつであろうか？

「麦と毒麦とは、収穫までいっしょに生長する。そして、収穫というのは、恵みの時の終わりのことである。」実物教訓 50

神の恵みの時の終わりとはいつか？ 運命が永遠に決定される時である。いつ永遠の運命が決定されるのか？

「主は私に、恵みの期間が閉じられる前に、獣の像が形作られるということをはっきり示された。なぜなら、それは神の民のための大なるテストだからである。それによって彼らの永遠の運命が決定されるであろう。… [黙 13: 11-17 を引用] …

これは神の民が印される前に受けなければならないテストである。」Letter 11,1890 (スタディバイブル新 585,586)

「両方とも収穫まで育つままにせよ。その時、主が毒麦を集めて焼き、また麦を天の倉に集めるためにご自分の刈り取る者を送られる。さばきの時は最も厳粛な時である。その時に主はご自分の民を毒麦から集められる。同じ家族の者が分かれる。義人には印が与えられるであろう。…交わっていた者(悪人)は神からの永遠の分離の印が押されるであろう。」TM 234,235

これはあきらかに日曜休業令の時である。

「教会は落ちかかるように見えるが、落ちはしない。それは残るのである。シオンの罪人が震い出されるであろう。尊い麦からもみからが分離されるであろう。これは恐ろしい試練であるが、起こらねばならない。」2 SM380

この震いまたは分離において、忠実な者たちはセブンスデー・アドベンチストから出て行くのか、残るのか？出て行くのは誰か？「シオンの罪人が震い出される」のである。忠実な者はどんなことがあっても残るのである。

教会に震いがもたらされるのは3つの方法による。

1. 異端による偽りの教え。TM112,5T707、それによって混乱と困惑が来る。5T80
2. 率直なラオデキヤへのメッセージによる。初代文集 438
3. 迫害、日曜休業令の最後のテストによる。

「神の律法が無効にされる時、教会は厳しい試練によって震われる。そして予期する以上の大部分の者が震われて、偽りの霊と悪魔の教えに大部分の者が気をとられてしまうであろう。」2 SM368

「神の震いは枯れた木の葉のように大勢の者を吹き払うであろう。」4T89

「あらしが迫って来るとき、第三天使の使命を信じると公言していながら、真理に従うことによって清められていなかった多くの者が、その信仰を棄てて反対の側に加わる。彼らは、世俗と結合し、その精神を抱くことによって、ほとんど同じ見方で物事を見るようになっている。そして、試練(テスト)が来ると、彼らはすぐに、安易で一般向けの側を選ぶのである。かつては真理を喜んだところの、才能ある雄弁な人々は、その力を用いて他の人々を欺き迷わす。彼らは、以前の兄弟たちにとって、最も苦い敵となる。」大争闘下 378

「教会の清めの日は急速に近づいている。神は清い、真実な民をお持ちになるであろう。まもなく起こる大いなる震いにおいて、イスラエルの力が分かるであろう。様々なしるしは、主がみ手にうちわをもって、その打ち場(教会)を徹底的にお清めになる時が近づいている事を示している。大きな混乱と困惑の時代が急速に近づいている。」5T80

「教会の危機と沈下が最高の時、光に立っている小さな群れは地に行われている憎むべきことに対して嘆き悲しむであろう。しかし、教会員が世の方法に従っているので、彼らの祈りは特に教会のために立ち上るであろう。」5T209

教会の中で教会員のために嘆き悲しむのである。

「特に教会の最後の働きにおいて、神のみ座の前で傷のないものとして立つ 144,000 が印される時に彼らは神の民と自称している民の悪を最も深く感じる。これは殺す武器を手に持つ者たちによってなされる最後の働きを預言者のたとえ(エゼキエル 9 章)で強烈に描写されている。エルサレム(神の教会)で行われている悪を嘆き悲しむ人々の額にしるしが与えられるのである。」3T266-267 "that sigh and cry for all the abominations that are done" in the church. {RH9/23/1873 par. 5}

国と指導者下 193-196 を見ると、教会員のために嘆くだけではない。彼ら自身の罪深さを徹底的に完全に嘆く。

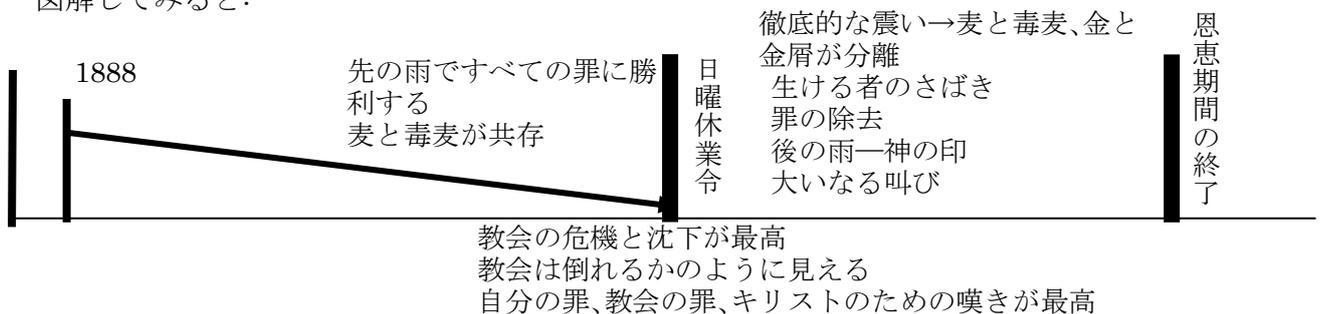
更に、イエスの苦悩に同情して嘆くのである。ゼカリヤ 12:10-13:1 参照。

1. 自分自身の罪の深さを認識すればするほど
2. 教会員のために嘆くようになる。
3. イエスの十字架の苦悩が続いている現実を共に嘆くことは、クリスチャンの高度な経験である。天に移されてもいい徹底的な、真の永続的な悔い改めの完成に導くものであろう。

ラオデキヤの残りの教会は今後どうなるのか？

1. 今にも倒れるかのように見えるところまで来るが倒れはしない。2SM308
2. 教会の危機と沈下が最高に達する時が来る。5T209
3. 最も失望すべき、不利な状況のとき、恐ろしい危機の時に保守的なグループの者は信仰を破棄し、敵の側に加わる。5T463 多くの者が震われる。大争闘下 378
4. 預言者はわが教会に起こる背教のオメガに身震いするほどだと言った。Series B #2 16,1904
5. 現代のイスラエルは古代の神の民よりも神を忘れ、偶像礼拝に導かれる危険は大きい。1T608
6. 真の忠実な、少数の今は隠されている者たちは教会の中で嘆き悲しむ。3T267
7. しかし、徹底的に震われ、清められて後に神の残りの教会は、栄光の姿となって勝利する約束が聖書の預言、証の書にも書かれている。

図解してみると：



我々は、真のメッセージを伝えるときに、分離は来るであろう。しかし、我々は分離をメッセージとして説くべきではない。メッセージを説くのであって、分離を説くのではない。メッセージがないとメンバーの教会離れが起こるのである。

「我々は今や神がうち立てられた土台から降りるわけにはいかない。今やいかなる新しい組織にも入ることはできない。それは真理からの背教を意味するからである。」2SM 68,69

2. 名目的再臨信徒とは？

初代文集 31、32 に説明されているので注意深く観察して頂きたい。

「最初、この進んだ光をもって前進していたグループと行動を共にしたものは、ほんのわずかしかなかった。1864年には、彼らの数は約50名であった。

1844年に預言が成就したという確信を失った多数派は、約三万を数えた。その指導者た

ちは、1845年4月29日から5月1日まで、ニューヨーク州、アルバニーの会議に集まった。そこで、彼らは、自分たちの立場を再検討した。彼らは、「特別の啓示」を受けたと主張する人々、「ユダヤの伝説」を教える人々、また「新しい試金石」を設ける人々に対して、警告を発するという事を正式に決議して記録にとどめている（アドベント・ヘラルド、1845年5月1日）。こうして彼らは、安息日と預言の霊に関する光に、扉を閉ざしてしまった。彼らは、預言が1844年に成就したのではないと確信した。そして、二千三百日の期間の終わるときをさらに将来に定めるものもあった。いろいろの時が定められたが、それらは、つぎつぎと、みな過ぎ去っていった。再臨の希望という結合力によって結ばれたこの人々は、教理的立場には相当の違いはあっても、初めのうちは、いくつかのグループにばく然と結ばれていた。こうしたグループのあるものは、やがて消えていった。残ったグループが、アドベント・クリスチャン教会になった。このような人々のことが、本書では『第一日再臨信徒』または、『名目的再臨信徒』と呼ばれていた。」初代文集 31,32 説明文

「わたしは、神が、安息日を理解してもいなければ守ってもいない子供たちを持っておられるのを見た。彼らはまだ安息日についての光を拒んではいなかった。悩みのときの開始にあたって、われわれが出ていってもっと徹底的に安息日を宣べ伝えたとき、われわれは聖霊に満たされた。このことは諸教会と名目的再臨信徒たち(付録参照)を激怒させた。彼らは安息日の真理に反論することができなかったからである。そして、この時、神に選ばれた者たちはみな、われわれが真理を持っていることをはっきりと知って、出てきて、われわれと一緒に迫害に耐えた。」初代文集 93

「わたしは、神が、名目的再臨信徒たちと、墮落した教会の中に、心の正しい人々を持っておられるのを見た。そして、牧師や信者たちが、災害が、くだされる前に、これらの教会から呼び出されて、喜んで真理を受け入れることをわたしは見た。サタンは、この事を知っている。第三天使の大いなる叫びがあがる前に、サタンは、これらの宗教団体に、興奮を起こさせ、真理を拒んだ人々に、神が彼らと共におられると思わせるのである。サタンは、心の正しい人々を欺いて、神がなお教会のために働いておられると彼らに思わせたいと願っている。しかし、光が輝き出る。そして、心の正しい人はみな、墮落した諸教会を去り、残りの民に加わるのである。」初代文集 424

「93ページ、名目的再臨信徒（ノミナル・アドベンチスト）—これは、第一、第二天使の使命の宣布には参加したけれども、安息日の真理を含んだ第三天使の使命を拒んだ人々である。しかし、彼らは、再臨の希望を信奉しつづけていたのである。ホワイト夫人は、この人々を、「現代の真理を拒否している人々」（146,147）、また、「再臨信徒であると公言している種々の団体」（230ページ）と言われた。われわれの初期の文書の中で、これらの人々は『ファーストデー（第一日）アドベンチスト』とも言われている。

1844年の秋に、人々が予期したようにキリストが来られなかったとき、多くのクリスチャンたちが失望に陥った。再臨信徒たちは、幾つかのグループに分かれた。その時の残ったものが、アドベンチスト・クリスチャン教会という小さい団体と、セブンスデー・アドベンチストとである。」初代文集 481-482、付録

※ 1844年が過ぎてからすぐに「名目的再臨信徒」はできていた。セブンスデー・アドベンチストはいつから「名目的再臨信徒」になったのだろうか？ いつバビロンになったのだろうか？ 1888年の使命を拒んでからか？

1903年:「徹底的な改革が起こる時が来た。」8T251

「わたしは、ミネアポリス会議の時以来、かつてないほどラオデキヤ状態の教会になったのを見た」 RH8/26/ 1890

A. T ジョーンズは大いなる叫びが宣布されたとも、後の雨が降りつつあったとも言っていない。

1893 年の彼の言葉:

「では、兄弟達はミネアポリスで何を拒んだのか? (1888 年のこと)... 彼等は後の雨一第三天使の大いなる叫びを拒んだのである。...

そこで兄弟たちよ、我々がその時拒んだ事を今晚とりあげる時が来たのである。ミネアポリスで神が、我々の為に素晴らしい祝福を与えようとしておられたとは、誰一人夢想だになかった。神が送られたメッセージを受け入れる用意があったなら、過去 4 年間に喜んで楽しむことができたはずのものを...。われわれは 4 年も延ばしてしまったのだ。今晚我々は、大いなる叫びそのものの驚異の真っ只中にいたはずである。」 GCBull 1893 研究 7 (三天使の使命)

更なるラオデキヤ状態に深く陥ったことは確かである。しかし、いつバビロンとなったのだろうか?

3. セブンスデー・アドベンチストから分離した改革運動教会は完全に一致しているか。

ここでは改革運動の歴史の詳細に触れることはできないが、簡単に事実を述べておこう。改革教会には二大組織がある。その両方の改革教会から出た有力な指導者二人の証言が筆者のところにある。彼らが詳しい歴史を語っている。

改革運動教会がセブンスデー・アドベンチストから分離したのは、ヨーロッパにおいて第一次世界大戦が終わってからである。組織が完成するのは 1925 年にドイツにおいてである。

1937 年にはヨーロッパだけでも 25 のグループに分裂。ほとんどは小さいグループ。ちなみに、韓国でも分裂した。

1948 年に大きく分裂する。その時に本部がドイツからカリフォルニアのサクラメントに移される。

1951 年に D.ニコリチグループ と オスカー・クラマーグループ に分裂。各地でどちらの改革教会に属するかが大きな問題であった。クラマーはやがて本部をコロラドに移す。1970 年にニコリチはサクラメントから出る。

ヨーロッパの総理 L.R.コンラーディ氏が問題の張本人であった。彼は有能な人物で、素晴らしい知能の持ち主であった。エネルギー的な人で、毎日 4 時間しか寝なかった。1856 年にドイツで生まれ、カトリックの学校に通い、そしてアメリカに渡った。1878 年にアドベンチストになり、バトルクリーク・カレッジに通う。植字工として働き、自給しながら 4 年コースを 18 ヶ月で終わる。

1882 年牧師として按手礼を受け、4 年後にヨーロッパに宣教師として送られる。63 ヶ国語の国々で働く。

1915 年コンラーディは、アドベンチストは軍務に参加するか、さもなければ除名だとの決意を持っていた。秋の世界総会で全員一致で彼の意見は退けられた。しかし、ドイツに帰ったときに、彼は世界総会で自分の意見が受け入れられたと報告。この偽りの報告は教会員に一石を投じた。大きな反対が起こった。多くの者がセブンスデー・アドベンチストはバビロンとなったと考えた。

1917年にある印刷物が出され、セブンスデー・アドベンチスト教会を離れるように信者に訴えがなされた。もし忠実な真のアドベンチストがアドベンチストバビロンから離れ、彼らに加わるなら、この「清められた教会」に後の雨が降り、キリストが再臨なさるということであった。

幸いに、世界大戦は終わった。多くのアドベンチストが銃を持たないために苦しみに遭った。ある者は殺された。コンラディの立場は何の助けにもならなかった。戦争に参加した者は安息日を犯し、同胞さえも殺すのであった。十戒の二つの戒めが破られた。コンラディはそれは良いことであるといったばかりでなく、戒めを破らなかつた者たちは除名されるべきであるとさえ言ったのである。

ヨーロッパの幾千という信者は、結束してわが教団に反対した。

1918年にヨーロッパ世界総会支部が解散。1920年にアメリカ世界総会総理 A.G.ダニエルズ長老と他の指導者が深く詫びて迫害されていた兄弟たちの許しを乞うた。しかし、改革派の指導者たちは、訴えを拒否。彼らは組織をリードすることを決意。

コンラディは1922年に役職からはざされた。1939年に、信任状を返してセブンスデー・バプテストに加わる。

筆者は、ニコリチグループから脱会して SDA になったニコリチの息子にカリフォルニアで何回か遭った。クラマーのグループの息子二人も脱会している。その息子が改革運動について本を書いている。彼らの証言は、改革運動教会は清められた一致した教会とは程遠く、権力、地位争いと分裂の歴史であることを指摘している。改革教会は、セブンスデー・アドベンチストより厳格である。

今はどこに行っても完全に完成された教会はない。震われて後の雨が注がれた暁に完成された教会が出現するのである。セブンスデー・アドベンチストから多く震い出されて、バビロンから多くの神の民が加え入れられ、最後の栄光の姿の教会が完成されるのである。

我らの主イエスは、今、至聖所において、ヨハネ 17 章のご自分の祈りが成就するのを待っておられる。

「われわれは預言者たちや使徒たちが試した信仰を抱いて、それを強めるようにしなければならぬ。それは神の約束をしっかりと把握して、神がお定めになった時と方法によって救いをお与えになるのを待つ信仰である。預言の確かな言葉は、われわれの主、救い主イエス・キリストが、王の王、主の主として栄光のうちに再臨なさるときに、完全に成就するのである。待望の期間は長く思われるかも知れない。心は失望的状况下に圧倒されるかも知れない。また、信頼されていた多くの人々が、途中で倒れてしまうかも知れない。しかしわれわれは、未曾有の背信の時代にあって、ユダを励まそうと努力した預言者と共に次のように言おう。「主はその聖なる宮にいます、全地はそのみ前に沈黙せよ」(ハバクク 2:20)。「この幻はなお定められたときを待ち、終りをさして急いでいる。それは偽りではない。もしおそれれば待っておれ。それは必ず臨む。滞りはしない。しかし義人はその信仰によって生きる」という励ましの言葉を常に覚えていよう(同 2:3,4)。』国指下 7

「神がお定めになった時と方法に従う信仰」、「聖徒の忍耐」を培う時である。

アブラハムの妻、サラは神の時と方法に委ねきれないで、ハガルによるイシマエルを生んだ。約束の子イサクは不信仰の失敗の後、神の時と方法に委ねた信仰の子であった。

再臨信仰の土台(ダニエル 8:14)の歪んだ理解から派出した様々な問題に我々は直面している。女性按手礼問題、セレブレーション、音楽、異宗婚問題等々.....これらの混乱の原因はどこにあるだ

ろうか？主の僕は言われた「多くの者はイエスを見失った」(EV190)と。第三天使の使命は我々を天の至聖所に向けている(初代文集 414-415)。イエスを仰いで生きよう！

30. エレン・ホワイト、証の書について

- ① エレン・ホワイトは単なる天才的宗教家か、あるいは預言者的指導者か、それとも聖書記者と同じ預言者か。

検証:

このことについては多くの良い書物が出ている。ロバート W. オルソン氏の著書 p 6 によく説明されているので、ここでは簡単に述べておきたい。

また、大争闘上序論(5)、初代文集 238-253 にもよく説明されている。

聖書を書かなかったからと言って預言者ではないとは言えない。旧約時代にも新約時代にも聖書を書かなかった預言者たちがいた。エリヤ、エリシャ、ナタン、バプテスマのヨハネ、女預言者アンナ、ピリポの4人の娘、ユダとシラス等々は聖典の記者ではなかったが預言者たちであった。

また聖書自体が預言の霊の賜物は、旧約、新約聖書時代に限られるものではないと言っている。

- ① イエスは世の終わりまであらゆる真理に導く聖霊を約束された。(ヨハネ 14:26、16:13; マタイ 28:20)。パウロも預言の賜物について言っている。(エペソ 4:12,13 ; 1テサ 5:20 ; 1コリント 12:28)。ヨエルは終わりの時に預言の霊が注がれることを預言した。(ヨエル 2:28) ヨハネは最後の教会はイエスの証=預言の霊を持つと預言した(黙示録 12:17、19:10)。
- ② 1260年の後、最後の真の教会にはイエスの証が与えられる。「女の残りの子ら、すなわち、神の戒め(律法)を守り、イエスのあかしを持っている者たち」と表現されている(黙示録 12:17,19:10)。
- ③ その場合に預言者の霊は預言者に服従する(1コリント 14:32)はずである。預言者が出現したら以前の預言者と完全に一致していなければ神から遣わされたのではない。
- ④ エレン・ホワイトはこう言っている:

「ある人々は、私が預言者であると主張しなかったことにつまずきました。そして、『これはどういうわけですか』と尋ねました。私はそのような主張をしていません。私は、自分が主の使命者であると告げられた、と言っているだけです。主は私の若い時に、主の使命者として召されました。主の言葉を受け、主イエスの名によって明確なメッセージを伝えるためにです。

若い時から、あなたは預言者ですか、とたびたび尋ねられました。私はいつも、私は主の使命者です、と答えてきました。多くの人が私を預言者と呼んだことを、私は知っています。しかし、私は自分で預言者という名称を主張したことはありません。私の救い主は、私を主の使命者と言われました。....

なぜ私は預言者であると主張してこなかったのでしょうか。- 現代は、大胆にも自ら預言者と主張する多くの人々が、キリストのみ業に対する非難の原因となっていますし、また私の働きは『預言者』という言葉よりもっと広い多くのことを含んでいるからです。」 1

⑤ W.C.ホワイトの言葉:

「母が女預言者であることについて。母の心の中で、また家族の者や手伝ってくださるすべての人々の心の中で、母が主の預言者であるということには何の疑いもない。しかし、母は、この事について、バプテスマのヨハネが取ったのと同じ立場を取るのである。ヨハネ 1:19-23 を読んでもらいたい。そうすれば、ヨハネが謙遜に、自分はエリヤでもあの預言者でもないと言っているのに気づかれるであろう。『主の道をまっすぐにせよと荒野で呼ばれる者の声である』と彼は言った。しかし、われわれはキリストの言葉から、ヨハネはエリヤであり、預言者であったことを知るのである。母は、彼女の働きについて『わたしは預言者と呼ばれたくない。わたしは使命を持った使命者である』と言っている。しかし、彼女は、自分が預言者ではないと言ったことがない。」 J.J.コレルにあてた手紙、5/13/1904

⑥ 預言者以上の働き

「私の働きの性質についていろいろ推測する人々によって妨げられてはならない、と私は教えられました。彼らは、いわゆる預言者の仕事と思われることに関連した多くの複雑な問題を一生懸命考えています。私の任務は預言者の仕事を含んでいますが、それだけではありません。疑惑の種をまいている人が考えているよりはるかに広い範囲にわたっているのです。」 1 セレクトッド・メッセージ 32

⑦ オルソン氏は次のように言っている:

「エレン・ホワイトの著書に、彼女が『啓示の程度』において他のいかなる預言者よりも劣っていると結論づける確かなものは何もない。各時代の争闘の序論から彼女の言葉を引用してみよう:

『聖霊は、神のみことばと調和して、新約時代にその働きをつづけるのであった。旧新約聖書が与えられつつあった時代に、聖霊は、聖書の中にあらわされるはずの啓示とは別に、個々人の心に光を与えることをやめなかった。聖書として与えられるものとは無関係な事柄において、人々が聖霊を通して警告と譴責と勧告と教えを受けたことが、聖書自体の中に述べられている。また、その語ったことばが記録されていない各時代の預言者の名もあげられている。同様に、聖書が完成されてからも、聖霊は、依然としてその働きをつづけ、神の民を照らし、警告し、慰めるのであった。

イエスは弟子たちに、次のように約束された。「助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわれる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起させるであろう。」「真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう。それは…きたるべき事をあなたがたに知らせるであろう」とお約束になった(ヨハネ 14:26,16:13)。これらの約束は、使徒時代に限られるのではなく、各時代のキリスト教会にまで及ぶものであることを、聖書ははっきり教えている。救い主は、ご自分に従う者たちに、「わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」と保証しておられる(マタイ 28:20)。パウロもまた、聖霊の賜物とその力のあらわれが教会に与えられたのは、「聖徒たちをととのえて奉仕のわざをさせ、キリストのからだを建てさせ、わたしたちすべての者が、神の子を信じる信仰の一致と彼を知る知識の一致とに到達し、全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた徳の高さにまで至」らせるために、みたまの賜物と啓示が教会内に与えられたと宣言している(エペソ 4:12,13)。

エペソの信者たちのために、使徒パウロは、「どうか、わたしたちの主イエス・キリストの神、栄光の父が、知恵と啓示との霊をあなたがたに賜わって神を認めさせ、あなたがたの心の目を明らかにして下さるように、そして、あなたがたが神に召されている望みがどんなものであるか、…また、神の力強い活動によって働く力が、わたしたち信じる者にとっていかに絶大なものであるかを、あなたがたが知るに至るように」と祈った（エペソ 1:17-19）。パウロがエペソの教会のために、このように祈り求めた祝福というのは、人々の理解力を照らし、神の聖なるみことばのうちにある深い事柄を心に開き示すための、聖霊の働きであった。…

神の大いなる日の光景と直接関連して、主は、預言者ヨエルによって神の霊の特別なあらわれを約束しておられる。「その後わたしはわが霊をすべての肉なる者に注ぐ。あなたがたのむすこ、娘は預言をし、あなたがたの老人たちは夢を見、あなたがたの若者たちは幻を見る」（ヨエル 2:28）。この預言は、ペンテコステの日に聖霊がくださったことによって、部分的な成就をみた。しかしそれは、福音の最後の働きに伴う神の恵みのあらわれにおいて、完全に成就するのである。」

終末時代にサタンの欺瞞が最も激しくなる時に、神の民は、悪魔の策略を「み言葉の光と聖霊の解明」により見破り堅く立つことができるようにされると、エレン・ホワイトは言っている：

「長年つづけられている善と悪との争闘の場面は、聖霊の光によって、本書の著者に示された。ときどきわたしは、生命の君であり、救いの創始者であるキリストと、悪の君であり、罪の創始者であり、神の聖なる律法を初めて破った者であるサタンとの間の、各時代の争闘の経過を見せられた。…

神の霊がわたしの心に、神のみことばの大いなる真理を開き、過去と未来の光景を示されたとき、わたしは、過去の争闘の歴史をたどるために、そして特に、急速に近づいている未来の争闘に照明を当てるために、自分にこのように示されたことを他の人々に知らせよう命じられた。」

「終わりの時」になって律法が回復される時「イエスのあかし」も回復される。神の戒め＝律法が女の残りの教会に回復される時、イエスのあかし＝預言の霊(キリストの霊が預言者に働く)が回復されるのである。

31.

② エレン・ホワイトは、聖典の著者に入っていないから権威はないか？

検証:

エレン・ホワイトは確かに「聖書、聖書のみ」を主張した。聖書は大きな光であり、あかしは小さな光であると言われた。

「しかし神はこの地上に、聖書、そしてただ聖書だけをすべての教理の基準、すべての改革の基礎として保持する一つの民を、お持ちになるであろう。」大争闘下 360

信仰の決定的な権威は聖書のみであると認めることは、神が用いられた聖書記者ではない預言者の権威を否定するものではない。エリヤ、エリシャ、バプテスマのヨハネ、ナタンは聖書を書かな

かったから権威がないと言えるだろうか。

今日残っている聖書は、他の預言者を排除するものではないはずだ。聖書が我々の権威であって、エレン・ホワイトは権威がないということは、偽りの二分法である。聖書は聖書の領域で、エレン・ホワイトはその領域で預言者の権威がある。

ユライヤ・スミスは次のように例証している：

「我々が航海に出たとする。船の主は、航海のための安全な手引書を与える。それにはいっさいの心得が書いてある。それに従えば、無事に目的地に着くことになっている。

出航して、我々はその手引書(マニュアル)を開く。その著者は、実際的な状況にどう対処したらいいか、突発事件が起きたらどうするか、特に目的地の近くになるとどんな危険なことが起こるかを書いてある。接岸の時には流砂や突風があることも注意している。著者は「しかし、この危険の時に対処するために、私は一人の水先案内人をあなたがたのためにつけているので、彼のいっさいの指示にしたがわなければならない」と。

この指示にしたがって我々は予告された危機の時に遭遇する。約束された水先案内人が現れる。しかし、その時、ある乗組員たちが出てこの危機の時にリードしようとする水先案内人に逆らって「私たちはオリジナルのマニュアルを持っています。それで十分じゃないですか。それだけに従います。あなたは必要ではありません。」と言ったとする。この場合、誰がオリジナルのマニュアルに従っていると言えるだろうか。水先案内人に逆らう者だろうか。それともマニュアルが言っているとおりに水先案内人の言うことに従う者だろうか。読者自らが判断して頂きたい。

ある者は...このように言うだろう：「では、あなたはホワイト夫人を我々の水先案内人として受け入れるようにということではないでしょうね。」早合点しないでいただきたい。この記事を書いたのはそういうつもりではない。はっきり言いたいのはこのことである： 霊の賜物は、この危機のときに水先案内人として我々のために与えられたこと、どこであろうが、誰であろうが本当の賜物が与えられたとき、その賜物を尊敬する決意をしなければならない。さもなければ、神の言葉がそう教えているのにそれに従わなければ、神の言葉を拒否することになるのではないだろうか。」

RH1/13/1863(ヨエル 2:28-32 ; 1 コリント 12:8-10,28 ; エペソ 4:11-13)

エレン・ホワイトの主張を聞いてみよう：

「ホワイト夫人(三人称で書いている)はこれらの書物の創作者ではない。」文書伝道者 125

「ただわたし自身の考えを表現した記事は一つもない。」5T67

「どのような場合にも、わたしは自分自身の判断または意見を言わなかった。」バトルクリークへの証、1882年 p 58

● エレン・ホワイトは、価値のある修養書ではあるが、教理的、神学的な権威ではないのか。

「1980年ダラスで持たれた世界総会で預言の霊について次のように再確認された：

「聖霊の賜物の一つは預言である。この賜物は残りの教会を特徴づけるしるしであり、エレン・G・ホワイトの働きに表わされた。主のメッセンジャーとして、彼女の書き物は、教会を慰め、導き、教え、正す真理の継続的で権威の源である。そして、それは聖書がすべての教えと経験を試す標準であることを明確にしている。」 1981 セブンスデー・アドベンチスト Year Book, p7

● エレン・ホワイトの著書で靈感によらないものがあるだろうか。

「日常の会話、または、単なる伝記的記事は、靈感によるものであると言わなかった。これは霊の賜物第二巻 1860 年出版に説明されている。」アーサーL.ホワイト 20 の指導原理 p32

「これは神の働きであるか、それともそうでないかである。神は、サタンと共同で何もなされない。わたしの働きは...神の印を帯びているか、それとも敵の印を帯びている。このことにおいて中途半端はない。証は神の霊からのものであるか、それとも、悪魔からのものである。」4 T230

● なぜ、ある人たちは、エレン・ホワイトにつまずくのであろうか。

彼女は「無謬」を主張していない。「神だけが無謬である」と言っている。証の書につまずく人は聖書にもつまずく理由を見つけるであろう。

「『写本を書いた人や、翻訳をした人に、何か誤りがあったかもしれないとは考えられませんか』と言います。それはあり得ることです(英文)。そして、心が狭くそのことにつまずく人は、靈感を受けた言葉の中にある神秘的な点についてもつまずきます。なぜなら、彼らの弱い心では、神の目的を見通すことができないからです。彼らは普通の人ならば神を認め、受け入れるような明瞭な事実にもつまずいてしまいます。しかし、神の言葉は明らかで美しく、魂を十分に養います。写本や翻訳のどんな問題も、あらわされた最も明らかな真理を理解するのに困難をひき起こすようなことはなく、人をつまずかせる原因とはなりません。」1 セレクトッド・メッセージ5

● 終わりの欺瞞から守られる約束

「主がエレン・ホワイトを通して語られ、メッセージを与えられたことを信じるすべての者は、最後の時代にやってくる多くの欺瞞から安全に守られるであろう。」3SM84

「神の民の証の書に対する信仰を弱めさせることが、サタンの計画である。次に我々の信仰の重要点、我々の立場を明らかにする柱(複数)に関する懐疑が続く。それから聖書に関する疑いが続き、そして破滅に降下していく。かつて信じられてきた証が疑われ、捨てられると、サタンはそこでとどまらないことを知っている。彼は努力を二倍にして公然と反逆を展開し、それはいやしがたいものとなり、破滅に終わるのである。」4T211

私の個人的確信

エレン・ホワイトの教育、家庭、子育て、健康、医事伝道、自然療法、預言と歴史、キリストとサタンの大争闘、伝道法等々に関して書いていることは、時がたてば経つほどますます神の預言者であることを確信させ、感動が高まるだけである。「人は変わり、世は移れど動かぬは」証の書と叫びたい。近年、特に様々な翻訳聖書が氾濫しているときに聖書の絶対性が揺らいでいる。どれが神の言葉なのかを学者に聞くよりも預言者に聞く方が安全確実で混乱から守られる。

32. 死んで主を迎えることと、生きて主を迎えることとの経験に違いはあるだろうか？

第三天使の使命とそれに伴う特別な働きを理解しているかどうかは、次のような率直な質問をすると分かる。「我々は死ぬ用意ができていれば、生きて主を迎える備えができていると思うか？」と。我々の先駆者たちと預言者の言葉から、我が教会に驚くべき根本的誤謬が入り込んできたことに気

がつくであろう。

1844年の昇天を期待していた再臨信徒について次のように描写されている：

「その時、神の民は、神に受け入れられた。彼らの中には、イエスのお姿が反映されていたので、イエスは、喜びをもって彼らをごらんになった。彼らは、完全な犠牲と全的献身をしており、不死の姿に変えられることを期待していた。」初代文集 393

「しかし、人々は、まだ主に会う準備ができていなかった。まだ、彼らのためになされねばならぬ準備の働きがあった。彼らは、まず光を受けて、天にある神の宮に心を向けねばならなかった。そして彼らが、そこで奉仕しておられる彼らの大祭司に、信仰によって従っていくときに、新しい義務が示されるのであった。もう一つの警告と教への使命が、教会に与えられるのであった。

...天の聖所におけるキリストのとりなしがやむとき地上に住んでいる人々は、聖なる神の前で、仲保者なしに立たなければならない。彼らの着物は汚れがなく、彼らの品性は、血をそそがれて罪から清まっていなければならない。キリストの恵みと、彼ら自身の熱心な努力とによって、彼らは悪との戦いの勝利者とならなければならない。天で調査審判が行なわれ、悔い改めた罪人の罪が聖所から除かれているその間に、地上の神の民の間では、清めの特別な働き、すなわち罪の除去が行なわれなければならない。この働きは、黙示録14章の使命の中にさらに明瞭に示されている。

この働きが成し遂げられると、キリストの弟子たちは、主の再臨を迎える準備ができるのである。」大争闘下 141

「わたしは、また、悩みの時に、聖所に大祭司がおられないで神のみ前に生きるためにはどのような状態でなければならないかを悟っていない人が多くあるのを見た。生ける神の印を受け、悩みの時に保護される人々は、イエスのかたちを完全に反映していなければならない。」初代文集 149

「かつてなかったほどの悩みの時が、まもなくわれわれの前に展開する。それだからわれわれには、一つの経験——今われわれが持っておらず、また多くの者が怠けて持とうとしない経験——が必要なのである。」大争闘下 397

その特別な経験とは何であろうか？

「今、われわれの大祭司がわれわれのために贖いをしておられる間に、われわれは、キリストにあって完全になることを求めなければならない。... 神のみ子は、天父の戒めを守られた。そして、サタンが自分に有利に活用することのできる罪が、彼の中にはなかった。これが、悩みの時を耐えぬく人々のうちにななければならない状態なのである。」大争闘下 397

「彼らは(144,000)、み座の前で新しい歌をうたう。この歌は、144,000以外のものは、だれも学ぶことができない。それは、モーセと小羊の歌、すなわち、救いの歌である。144,000のほかは、だれもその歌を学ぶことができない。なぜなら、それは彼らの体験—他どの群れもしたことのない体験—の歌だからである。『小羊の行く所へは、どこへでもついて行く。』彼らは、地上から、生きている者の間から、天に移された者たちで、『神と小羊とにささげられる初穂』とみなされる(黙示録 15:2,3 ; 14:4)。『彼らは大きな患難をとあつてきた人たちであつて』、国が始まって以来かつてなかったほどの悩みの時を通過してきた。彼らは、ヤコブの悩みの時の苦しみに耐えた。彼らは、神の最後の刑罰がくだる中を、仲保者なしで立った。」大争闘下 430,431

ジェームス・ホワイトは次のように言っている:

「多くの者は、人が死ぬ準備ができていたら、主の再臨に備えができていていると思っている。しかし、彼らは死ぬことと生きて主を迎える立場の違いを考えない。主にあって死ぬこと、父のみ座の前で執り成すキリストに、彼らの霊を委ねることは一つのことであり、主が人類のために執り成しを止め、大祭司の務めを止められ、敵に報復し、ご自分の民を迎えにおいてになるまで、悩みの時を通過して生きる人々とは大きな違いがある。これらのことを認める者は、神のあわれみによって、聖徒たちの完全のために配慮されている方法に対して感謝するであろう。」L.S. of James and Ellen White 431

S.N.ハスケルは次のように言っている:

「調査審判において、価値ある者とされた人は、天に仲保者なくして生きるのである。彼らの経験は、この地上に住んだどのグループとも異なっているのである。」The Cross and its Shadow 221

M.L.アンデレアセンは「聖所の奉仕」の「最後の世代」に次のように書いてある:

「福音が人間の内に、そして人間のために...どんなにすばらしいことをなし得るかという最後のデモンストレーションはなお未来のことである...それが成し遂げられると終わりは来るのである。...

最後の世代に神は、人が神の律法を守ることができ、罪を犯さず生き得ることの最後のデモンストレーションをされる。...

最後の世代の聖徒たちによって神はついに擁護されるのである。彼らによって神はサタンを敗北させ神が勝利なさる。神の計画の中で彼らは重要な役割を果たすのである。...

宇宙において最も重要なことは、人間の救いではない。それも大切であるが、何よりも重要なことは長い間のサタンの告訴から解放され、神ご自身の潔白が証明されることである。」聖所の奉仕 299,321

大争闘に終わりをづけ、生きて主を迎える 144,000 の出現は至聖所の大祭司の働きに民が協力することにかかっている。だから、これほどサタンが憎む真理はないのである。

「サタンは、数えきれないほど多くの策略を考え出してわれわれの心を捕え、われわれが最もよく知っていなければならない働きそのものについて、われわれに考えさせまいとしている。大欺瞞者サタンは、贖罪の犠牲と全能の仲保者を明らかにする大真理を憎んでいる。イエスと彼の真理から人々の心をそらすことに、万事がかかっていることを、彼は知っているのである。」大争闘下 221

死んで主を迎える準備をさせることは他教派でもできる。しかし、生きて主を迎える備えは三重の使命を託されたセブンスデー・アドベンチストしかできない。

このような宇宙的な問題、しかも神の大問題を解決するよう召されているのである。①イエスのように神の律法を守り、②サタンの主張を打ち破り、③神のみ名を擁護することにより神の正しいことを証明するために我々が最後の世代に存在させられているとは何とすばらしい特権であろう。

「我々が存在するようになったのは、神が我々を必要とされているからである。」

ST4/22/1903

「シオンよ、さめよ、さめよ、力を着よ。聖なる都エルサレムよ、美しい衣を着よ。」イザヤ 52:1